

第 三 回

高 野 山 大 学

チベット仏教文化調査団報告書

はじめに

高野山大学長 酒井真典

吾が高野山大学のインド西北部ラダック・サンカル（ザンスカール）地方の第三回総合調査が終り、こゝに「第三回調査報告」が発刊されることになりましたことは大変うれしい事でありませう。あの月世界を思わすような乾燥した不便の土地で、長期間にわたりよくも頑張られたものと敬意を表するものであります。

吾が高野山大学の隊員は一般の好奇心を満たす旅行者と異なり、その調査の基礎に語学・歴史・教理等に深い造詣と経験を持つベテラン揃が参加した強みがありました。

現在吾が隊と行動を共にした毎日新聞隊の報告である「もうひとつの西遊記」には興味ある記事がよせられ、記者独特の軽いタッチの読物が八十回まで続いています。こうした記事によって、地味な調査活動に世間の関心が寄せられることは、喜ばしいことです。

松長教授は従来不明であったかの^{ロフツァー}翻訳官と伝われる如く後期密教を盛んにし、この地方に多くの寺を建立したと伝えられるリンチェンサンポの遺跡を克明に調査され、そのお堂等の様式論まで展開していただいたことは大変有意義な成果であったと思われるのであります。

尚壁画の研究等に当っても形体論にとらわれず、必ずその本源たる儀軌にさかのぼって探索し、その立論された事は立派なことであり、今後もかかる研究形態の継続が望ましいのであります。

この方面の碩学であるスネルグローブ博士にもこのラダック地方に関する最近の著書がありますが、吾が高野山隊はこれ以上に出た研究成果が報告されたことは大変うれしい事と思われるのであります。

ここにいささか蛇足を加えてこの発刊を^{ことほ}寿ぐ次第であります。

1980年3月20日

目 次

はじめに	酒 井 真 典… 1
第三回調査総括	
— 第三回学術調査を終えて—	松 長 有 慶… 5
ラダック地方におけるリンチェンサンポの遺跡	松 長 有 慶… 11
ラダックの仏伝壁画	氏 家 昭 夫… 17
仏頂尊について	
— アルチ寺の二種の仏頂曼荼羅を中心として—	小 林 暢 善… 26
金剛界三十六尊立体曼荼羅について	
— アルチ寺・マンギェ寺・小スムダ寺を中心として—	小 林 暢 善… 37
ラダックの密教儀礼	
— フィャン寺とヘミス寺の仮面舞蹈祭—	塚 本 佳 道… 42
ザンスカール再訪記	常 多 昇… 53
ブクトル・ムネ寺調査	佐 藤 健… 62
ラトーとファスブン	
— サブー村の事例から—	山 崎 正 矩… 68
水 難	龍 雄 …… 73
壁画の撮影	
— その技術と苦労談—	加 藤 敬… 75
民衆とラマ教	馬 場 昭 道… 77
二つのラダック	足 立 安 史… 79
日 程 表	81
備 品 目 録	86
会 計	93
寄付者御芳名	94
団 員 名 簿	95
研究会彙報	96
編 集 後 記	
地 図	

第三回調査総括

— 第三回学術調査を終えて —

松 長 有 慶

昭和52年夏、ラダック地方のレー地域に、高野山大学より、第一回のチベット仏教学術調査団が派遣された。昨年の第二回にひきつづいて、今年も、五名の団員が、ラダック地方に赴いて、チベット仏教の現地調査に従事した。

今年実施された第三回のチベット仏教文化調査は、いくつかの特色をもった。すなわち、第一回、第二回と調査が進むにつれて、前回までの調査の成果を取り入れて、新たな計画を樹てなおす必要が生じたこと、現地調査が回を重ねた結果、レーおよびザンスカール地域のチベット仏教文化の研究を、なんらかの形で集成して総合的にまとめ、報告する責務が生じたことである。そのため、今回は準備段階より、調査目的、対象、団員の構成などが改めて検討されなおすことになった。

まず調査目的の変化である。昭和49年夏に、ラダック地方はながく続いた外国人の立入り禁止の令を解いて、広く問戸を外に向って開いた。それより二年の準備期間をおいて、昭和52年夏、高野山大学がラダックの地に学術調査団を送った。当初の意図は、ラマ教すなわちチベット仏教の文化遺産と、その実態を調査、研究することにあった。現在、密教が生きた宗教として生命を保っているのは日本と

チベット文化圏しかない。チベット本国はすでに中国に編入されて、僧侶の多くが国外に出ているため、チベット仏教がいまなお息づいている地域は、ヒマラヤ周辺のごく一部にかぎられている。ラダック地方は六・七千メートル級の高山にかこまれた僻地であり、そのうえ、ながらく鎖国状態にあったため、比較的古いチベット文化がそこなわれずに残されている。ラダックの仏教文化の解明は、親戚関係にある日本の密教徒の手によってはじめて可能であり、また責務であると考えた。このような意図のもとに、ラダック地方のチベット仏教の現地調査を、第一回、第二回と継続しているうちに、調査目的に変化の萌芽があらわれた。調査を進めるにつれて、ラダック地方の仏教文化は、単にチベット仏教のみならず、インド密教の貴重な遺産であることが判明しはじめたからである。

インド本国から密教が姿を消して、すでに八百年を経ている。インド本国には、ほとんど密教の遺跡も、遺品も残されていない。ところがラダック地方に残る古い寺院には、7世紀のインド密教がそのまま継承されていることに気付いた。ラダックはチベット仏教の文化遺産だけではなく、インド密教の研究にとっても、貴重な資料を保存していた。調査の

目的は、当初めざした生きたチベット仏教の研究とともに、古いインド密教の文化遺産の研究にも向けられた。

第三回の調査団は、このような事情からラダック地方の古い寺に残るインド密教、とくに11世紀にこの地方で活躍したリンチェンサンポのもたらした密教の調査を重点的に行った。その調査成果は、改めて後にくわしく報告されるであろう。

つぎに調査の対象についても、変化がみられる。第一回の調査団は、ラダックに残されたチベット文化の全貌を知るために、団員の調査対象を、大まかに三種に分け、それぞれに研究者と学生を配した。

1. 寺院の壁画、彫刻などの調査班。2. 寺院に所蔵されている経典などの文献調査班。3. ラダック地方の寺院および民衆の中で保存されている宗教儀礼、民俗行事などの調査班がそれである。

第二回の調査団は、第一回の調査成果に基づき、インド密教研究の貴重な資料をもつアルチチョスコル諸堂の壁画を丹念に撮影し、それらを研究資料として残すこと。また第一回の調査において残されたザンスカール地方の仏教を調査することに目標が置かれた。第一回、第二回ともに団員の努力によって目標はほぼ達成され、その成果は第一回および第二回の報告書の中にくわしい。

第三回の調査団の調査対象として、もう一度第一回の調査の際に便宜的に区分した三種の対象の再検討から始めた。その結果、第2の文献調査と、第3の宗教儀礼と民俗行事の調査は、短期間の調査によっては、学術的に信頼度の高い成果をあげるにはむずかしい。したがってこれからの調査には、二・三年にわたって現地に住みこみ、調査する必要があるとの考えから、派遣する人選を進めたが、結局、教

員および学生の中に、その適格者をみいだしえず、文献と儀礼を対象とする調査計画は一応、今回は放棄せざるをえなかった。したがって、比較的短期間に学術的な成果をあげる第一の対象すなわち寺院の壁画、彫刻の調査に、その対象をしぼることにした。

調査地域は、レー地域とザンスカール地域を含むラダック地方において、第一回と第二回の調査にもれた寺を、重点的に調査することになった。それはほとんど四・五千メートルの山岳地帯にあるため、肉体的、精神的にかなりの困難を伴うであろうことが当初より予想された。

調査時期は、ラダック地方において一番気候がよく、また、ザンスカール地方に入域する便に最も恵まれた7月を中心とすることになった。教員、学生によって団員が構成される関係上、夏休みのほぼ二カ月がそれにあてられた。第一回の調査団は、経済的、時間的な制約のため、半月程度のごく限られた期間であった。しかし第一回調査の成果が広く認められて、第二回以降の調査には、宗団当局をはじめ識者より経済的な援助を得たため、およそ二カ月にわたる調査が可能となったのである。

つぎに団員の構成について。前述の調査目的と対象に応じて、第三回の調査を実施するため、第一回の調査団の長であった松長有慶が、再び第三回の調査の責任を負うことになった。第二回の調査団の派遣準備についても、黙々と目に見えぬ努力を重ねていただいたチベット仏教研究会の四人の委員には、是非参加していただきたいかった。だが東助教授は秋に派遣されるブータンの学術調査の準備、蜜波羅助教授は師父の御病氣、越智講師にはザンスカール調査によってかかった肝炎の治療と、それぞれやむを

えぬ理由によって、辞退された。それでも、九年前にネパールに二カ年余り留学され、ヒマラヤの奥地を縦横に踏破した経験をもつ氏家助教授が、同行を約束されたのは幸いであった。氏家助教授には、自身の研究のほか、隊の会計事務一切をひきうけていただいた。

本年の調査地域がほとんど山岳地帯の寺院であるため、山岳地帯を踏破する技術、体力、精神力に秀で、渉外の面においても抜群の能力をもつ常多昇君（高野山大学四回生）の参加は必須である。同君は最終学年でことのほか多忙な夏休みを、快くフィにして、団員に加わってくれた。今年も山岳寺院の調査に、かれのモチ味はフルに生かされた。

またラダック地方の寺院の壁画に造詣の深い小林暢善君（高野山大学大学院修士課程昭和53年度修了）の研究者としての能力は、今年の調査にも捨てがたい魅力をもっていた。今年、同君は三カ月余りレーに滞在し、寺院の壁画調査のみならず、写真の撮影にも協力を惜しまなかった。

現地調査に不可欠のラダック語ないしチベット語のできる団員の選定には、困った。越智講師の参加が不可能であるため、だれか代りに同行してもらう通訳が、どうしても必要である。高野山大学の学生中に適任者をみだしえなかったため、やむをえず、名古屋大学出身でネパール在住の高岡秀暢氏に特別参加を願った。団員が入域する一カ月前からラダックに入り、腕をさすって我々を待ちかまえていた高岡氏ではあったが、病気のため、実際に隊と行動を共にする機会が少なかったことは、同氏にとっても残念なことであつたろう。しかしラダックの地になじみ深い同氏の種々の配慮が、今回の調査活動に大きな助けとなった。

昨年の第二回調査のとき、リキル寺で特別に依頼した護摩供の執行以来、護摩法の研究に熱中している塚本佳道君（高野山大学大学院修士課程二回生）は、昨年の調査で残された儀礼と行事の総まとめのため、今年も同行を希望した。宗教儀礼の調査は本年の調



左より 滝 塚本 佐藤 常田 高岡 加藤 氏家 足立 松長 馬場 小林 山崎

査目的には入っていないが、同君の研究の完成を望んで特別に団員に加え、一昨年と昨年の経験を生かして主として渉外の任にあたってもらった。

さらに今年の第三回調査隊の大きな特色は、毎日新聞社・社会部の記者である佐藤健氏一行六名の参加である。宗教担当記者としてジャーナリズムの第一線に活躍する同氏は、過去二回の高野山大学のチベット仏教調査団の活動に注目し、第三回の調査団に同行することを約束された。それも単に同行し、記事にするという従来の調査取材のパターンからぬけだし、研究者とジャーナリストの共同研究調査を目ざした。佐藤記者は仏教各宗の首脳の間を駆けめぐり、個人的な信頼関係によって多額の浄財を集め、さらに四名の団員の派遣を可能とした。このような経過を経て、佐藤記者と、毎日新聞社カメラマン滝雄一氏を入れて、六名の団員よりなる毎日隊と高野山隊とからなる総勢12名の調査隊が編成された。

こうした毎日隊員の一人、文化人類学の研究者である山崎正短氏は、出発前から今回の調査の食糧計画と装備に尽力されただけでなく、山岳地帯踏破の緻密な計画の立案、ならびに会計事務など煩瑣な仕事一切をひきうけられた上、自身の研究活動を進められた。

世界60数カ国を単独旅行し、いくたびかの生命の危機をのりこえた貴重な経験をもつ海外生活のベテラン馬場昭道氏は、キャンプ生活のリーダーでもあると同時に、寺院壁画の写真撮影にも、着実なもち味を生かされた。

カメラマンとして、すでに多くの実績をもつ加藤敬氏は、三カ月余りの長期間にわたりレー地区に滞在し、あるいは山のような写真機材を積んだロバの後を追いつつ、いく度も高山を越え、僻地の寺院の

撮影を続け、またキャンプの夜にも、おそくまで黙々と記録整理にあたった。同氏の撮影された壁画の大部分は、高野山大学のチベット仏教研究会に毎日隊より寄贈された。それらは今後、高野山大学におけるチベット仏教研究の貴重な資料となるにちがいない。

足立安史君（早稲田大学法学部四回生）は若さにものをいわせ、実にこまめに、しかも着実に一切の雑事を、いやな顔一つみせず、三カ月余りにわたりみごとに処理してくれた。かれのバイタリティあふれる活躍によって、団員一同どれほど助けられたか知れない。

毎日隊の六名の方々は、一人ひとりがすばらしい個性の持主でありながら、小我を殺して佐藤隊長のもとにみごとな団体行動に徹して、今回の学術調査に協力された。炎天下での寺院の測量に、ほこりっぽく薄暗い寺院内の壁画の撮影に、四千メートル、五千メートル級の山越えとキャンプ等々に、毎日隊の方々の協力がなければ、第三回の高野山大学ラダック調査団の成果は、おそらく何分の一かに減じていたにちがいない。

またレーにある国立高校の教師で、「ラダックの寺院と城の歴史入門」の著者、「リンチェンサンポ伝」の編者でもあるトブテン・パルダン師は、短い二週間の夏休み、および学期中の日曜・祭日をすべて犠牲にして、われわれの調査活動に献身的な助力を惜しまれなかった。師の協力がなければ、これほど短期間に、ラダック地方の遺跡の調査が遂行せられなかったであろう。

またアルチ周辺の寺々の調査には、アルチ村のロンポであるソナム・ドルジェ氏が、ザンスカール地域の調査には、カルシャ村のロンポの子息ナムギャ

ル氏が、終始同行され、それぞれ適当な助言と協力をいただいたことも忘れられない。

高野山隊と毎日隊、合せて12名の大部隊になるため実際の調査活動に際しては、全員をいくつかの班に分けた。各人の行動はこの報告書の後に記録されている。二百数十キロに及ぶ写真機材と食料の輸送と、ヘミス寺の祭典見学のため、毎日隊六名と、高野山隊のうち、小林、塚本の両名は、6月21日に成田を発った。松長、氏家、常多の三名は大学の夏休みになった7月8日、レーに到着し、先遣隊と合流した。

7月中は全員を少人数の数班に分け、それぞれ別個に調査活動を続け、8月には、レーに残る壁画の調査・撮影班と、ザンスカール地区の調査班とに二分され、それぞれに高野山隊、毎日隊の数名が配された。8月以降、高岡は病気の療養、塚本は護摩の研究資料収集のため、それぞれ隊を離れ、単独行動に移った。

松長、氏家、常多が8月末に、佐藤、滝、馬場が9月20日帰国したのちも、加藤、山崎、小林、足立はレーに残留して、継続して調査活動と、写真の撮影に活躍し、10月12日に成田に帰り、四カ月近くのラダック調査に終止符をうった。

ベースキャンプ地となったレーですら、海拔三千五百メートル余、そのほか四千メートル、五千メートルの高地での活動、極度の乾燥と、昼夜のはなはだしい温度差、馴れぬ食事、ダニ、シラミといった虫の攻勢による不眠等によって、ほとんどがかわるがわる身体の不調を訴えた。一人の臥床が他の何人かに大なり小なり過重な負担を強いるため、各人それぞれ無理を承知で調査活動を継続した。まことに涙ぐましい努力というほかはない。この報告書にもられた研究成果の中には、いまだ世界に知られてい

ない新しい発見も少なくない。だがその裏には、こうした過酷な条件のもと、個々の団員の高地での人知れぬ努力が秘められている。したがって今回の調査報告は、個人名で発表せられてはいるが、いずれも参加した全員12名の共同研究の成果といわねばならないであろう。

今年度の調査研究の成果は、各団員によって報告されるであろうが、要点のみ記せばつぎの通りである。

1. ラダック地方(レー地域、ザンスカール地域)に存在するリンチェンサンポの寺院と廃墟、ことごとく調査し、壁画の写真撮影と、寺院の実測を完了した。

2. アルチ寺の三層堂の二階の壁画についての従来の説の誤りを訂正し、それがまだわが国に知られておらず、世界の学界にも紹介されたことのない金剛界曼荼羅の一種であることが判明した。

3. 小スムダ寺において、金剛界37尊の立体曼荼羅が発見された。

4. ザンスカール地域において、未調査であった奥地のリンシェ寺、ブクトル寺、ムネ寺等の学術調査をおえ、その成果をはじめて公にした。これには毎日隊の単独調査による成果も含まれている。

5. ヘミス寺、フィヤン寺の祭り、宗教儀礼、ならびにリキル寺における三種(息災、増益、敬愛)の護摩法を、ハミリフィルムに収め、今後の研究の資に供した。

なお三回のラダック調査団に参加した、小林、常多、塚本の三君が調査の成果をもとに、図像学・歴史・儀礼それぞれの専門研究者に育ちつつあることも、特記しておかねばならない。

当初の計画では、ラダック地方のチベット寺院の

調査は、今年をもって完了し、つづいてヒマラヤの他の調査に移る予定であった。しかし本年の調査、研究に際し、リンチェンサンポの寺院と遺跡を調査するうちに、リンチェンサンポがラダック地方に移植したのは、インドにおいて七・八世紀ころ栄えた金剛頂経系の本格的な密教であることが判明した。インドにおいて、金剛頂経系の密教の遺跡に乏しいことから、リンチェンサンポの密教の研究は、単にラダックの仏教だけではなく、日本の真言密教の研究にも、役に立つことであろう。

リンチェンサンポの寺と遺跡は、レー、ザンスカールなどのラダック地方のみならず、それより東の山岳地帯であるスピティ、ラホール地方、さらにはいまは中国領となっているチベットのグゲ地方にひろがっている。リンチェンサンポの業績の調査、さらには金剛頂経の密教を完全に把握するためには、さらに来年度以降にせめてスピティ、ラホール地方の寺院だけでも調査する必要がある。高野山大学の過去三回にわたる調査研究は、現地でも注目され、いまであれば、これらの外国人の入城禁止地区に入るための特別の許可をとる便宜が与えられやすい。

ただこれら学術調査が行われていない山岳地帯の

寺院の調査には、いままでにもまして強靱な体力、精神力、研究意欲、さらにはすぐれた語学力をもった人物があたる必要がある。こういった人材の養成が今後のチベット仏教、ならびにインド密教の現地調査のための最大の課題となることはいうまでもないであろう。

最後にはなったが、第三回高野山大学ラダック地方調査団の派遣にあたって、多額の資金援助を賜った高野山真言宗、高野山大学、高野山住職会、金剛峰寺座主親下、宗務総長をはじめとする本山役職の方々、学長、学監、研究所長をはじめとする高野山大学の役職の先生方に、厚く御礼を申し上げねばならない。

また調査にあたって献身的に協力下さった毎日隊の方々、またその資金援助をしていただいた全仏教の各宗の諸大徳、碩学に、心よりお礼の言葉を申させていただきたい。

われわれのチベット仏教の調査、研究が、世界の学界だけではなく、日本仏教にとっても、意義をもつものになってほしいと願いつつ、第三回ラダック地方のチベット仏教学術調査の報告の総括を終えたいと思う。

ラダック地方におけるリンチェンサンポの遺跡

松 長 有 慶

リンチェンサンポは後伝期 *phyi dar* のチベット仏教を再興した中心人物である。また顕密にわたる経典、儀軌、成就法、注釈書などを多数翻訳し、一般に *lo tshā ba* の尊称をもって呼ばれている。しかしかれらの活動範囲は、西チベットすなわち Guge, Spiti, Lahul, Ladakh 地方にかぎられているという点で特異である。リンチェンサンポの業績については、すでに Tucci によって一書にまとめられている (G. Tucci, *Indo-Tibetica*, vol. II, Roma 1933), またかれの活躍した地域の一つであるスピティ地方の Nako 寺、あるいは Tabo 寺については、今世紀初頭に行われた Francke の調査報告もあり (A.H. Francke, *Antiquities of Indian Tibet*, New Delhi, reprint pp. 32 - 43), Snellgrove のリンチェンサンポの記述の中に、これらの寺についても紹介されている (D. L. Snellgrove, *Buddhist Himalaya*, Oxford 1957, pp. 180 - 193)。しかしラダック地方におけるリンチェンサンポの遺跡については、さきのフランケの報告は簡にすぎ、またラダック地方の調査研究書としてすぐれたスネルグロヴの書物 (*The Cultural Heritage of Ladakh*, vols. I, 1977) も、リンチェンサンポの寺全体を網羅したものではない。

高野山大学から昭和 54 年夏、ラダック地方に派

遣された第 3 回チベット仏教調査団は、その調査活動の一環として、この地方に残されたリンチェンサンポの遺跡を調査した。リンチェンサンポはその生涯に 108 の寺を建立したといわれるが、その中には伝説的な要素が少なからず含まれており、確實視されるものはそれほど多くない。リンチェンサンポの *rnam thar* によれば、ラダック地方において、かれが建立したとされるのは、Nyarma 寺のみである (Thupstan Paldan, *Chags rabs gnad don kun tshañ*, Leh 1976, p.69)。ただそれは現在廃墟となっており、その原型を求める材料はほとんど残されていない。

リンチェンサンポの建立と伝えられる寺の中で、現在その形をとどめているのは、ラダック地方においては Alchi choskor, Tsha tshapuri, Mangya, Sumda chuñ, Lamayur の *Señ ge sgañ*, Wanla および Zañskar 地区の Karsha にある *bCu gcig shal* の諸堂である。

一方、諸堂がもとの形をとどめず、廃墟となっているのは、Nyarma をはじめ、Leh の choskor, Basgo 東, Basgo, Chigtan, Sumuda chuñ, Sumuda chen, Spitok の対岸にある二つの洞窟, Stok, Stok choskor などの諸堂である。これら現存

するあるいは廃墟になっている諸堂が、ことごとくリンチェンサンポの建立になるとは考えられない。なかには時代の下るいくつかの要素を含むものもあるが、それらを通じてリンチェンサンポ様式ともいべきいくつかの特色をもっていることが今回の調査によって判明した。それらを整理すれば、つぎようになる。

1. 五仏の像がまつられ、あるいは五仏を中心とするマンダラが描かれている。中尊のvairocanaは智拳印、転法輪印、定印のいずれかである。四仏の印と色は経軌に忠実である。

2. マンダラの諸尊はすべて頭を上、足を下に向けている。ラダック地方の他の寺、あるいはリンチェンサンポの寺でも、後世建立された寺とか、描き直された壁画の諸尊は、マンダラの中尊に足を向け、外側に頭を向けたものがみだされる。

3. マンダラの外周の円は、金剛杵の画と、火炎の輪の画の二重になっている。Alchiの新堂 lha khañ somaのように、時代の少しおくれる堂のマンダラは、以上の二重の画の内側に、白い波の模様の第三重が加えられる。

4. 仏像と壁画に、チベット仏教によくみられる男女合体像 yab yum が無い。Alchiの新堂とか、後に描き直された Sumda chuñ の ḥḍus khañ にはそれがあらわれる。

5. マンダラと仏像は Tattvasaṃgrahaṅtra とか、Durgatipariśodhana など yogatantra 系のものにかざられ、anuttarayoga 系のものはみあたらない。

6. ḥḍus khañ には凸形のものが多い。三方に窪みをもつ形、すなわち Alchi の Sum tsek, Wanla, Nyarma の第7堂などは、凸形の一つとみなすべきであろう。凸形の窪みの部分に、現に五仏がまつら

れていた跡がある。ただ Lamayur の Sen ge sgañ のみ方形の堂に五仏をまつる。

7. lha khañ には方形が多い。前室とか側室をもつものがある。大体4メートル四方くらいのものが多く、マンダラと千仏で覆われている。単独あるいはごく少人数の瑜伽観法のために用いられたのではないかと思われる。

8. 壁の内部は石を積み、その上に土、しっくい塗る。Nyarma 寺の一部のように煉瓦のみの場合もある。Nyarma 寺と Basgo 東の廃墟のほかは、大体70センチから90センチ程度の厚さのものが多い。壁の色は煉瓦色で、一見してリンチェンサンポ様式の寺の壁であることがわかる。

9. 堂の天井と壁との間の横木には、獅子頭の彫刻をしたものが多い。

10. 天井との境界の壁に、白い鳥の絵が描かれている。Alchi の諸堂をはじめ、Alchi 村の Tsha tshapuri などにもある。

これらによって気付くのは、リンチェンサンポ建立の寺といわれるものが、ラダック地方の他の寺に比して、かなり特異な形態をもっているということである。現在ラダック地方に存在する大きな寺のほとんどは、15世紀 Namgyal 王朝の創立以降に建立されたものであり、リンチェンサンポ様式の寺とは、異質である。ラダック地方において、後世建てられた寺は、リンチェンサンポ様式の寺にないつぎのような特色をもっている。

1. anuttarayoga 系、すなわち Guhyasamāja, Hevajra, Sambhara, Kālacakra などのマンダラが主となり、中尊は akṣobhya 系の諸尊に変わり、yab-yum 像も少なくない。

2. 六道輪廻図をはじめ、地獄・極楽の絵、仏伝

図など、民衆教化に関する壁画があらわれる。

3. 宗派的な影響を受けて、彫刻、壁画いずれもに祖師像がまつられるようになる。

4. 現世利益信仰と密接に結びつく忿怒尊が数多く出現する。

以上のような特色は、現在ラダック地方における寺堂に共通する特色のように思われているが、本来のリンチェンサンポ様式の寺にはみいだせないものである。すなわち現在のラダック地方の寺に、リンチェンサンポ様式の寺の特色が、ほとんど受け継がれていないということがわかる。中世のラダック地方の仏教が、インドとかチベットで栄えた宗派的な形態をとったanuttarayogatantraの影響をうけたためと考えられるが、新しい寺がリンチェンサンポの仏教の伝統を、ごく一部しか継承しなかったことも事実である。

リンチェンサンポがラダック地方に移植しようとした仏教は、Tattvasaṃgraha-tantra, Durgatiparisódhanaとか、7世紀ころインドで栄えたyagatantraに基づくものである。リンチェンサンポの時代は、インドにおいてはすでにanuttarayogatantraの隆盛期であるから、その影響があらわれていても不思議ではないにもかかわらず、それが無い。つまり7世紀ころのインド中期密教が、後期密教の影響をまったく受けずに存在するという点は注目に価する。インドにおいて、仏教は13世紀のはじめに滅亡して、その遺跡、遺品に乏しい。この意味において、7世紀の金剛頂経系の密教の実態を知るための資料の重要な部分が、西チベットのリンチェンサンポ様式の寺だけに残されているといってもよいであろう。

ラダック地方に残されたリンチェンサンポ様式の

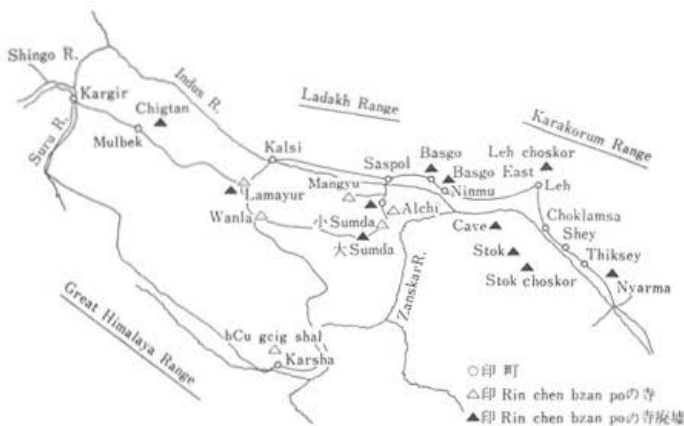
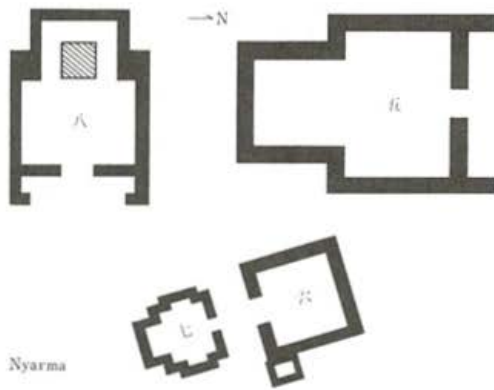
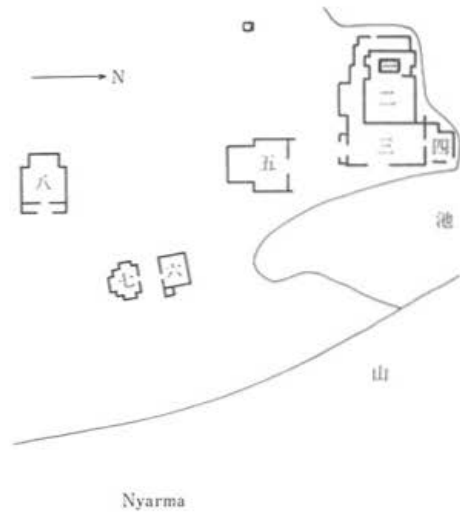
寺とか遺跡を調べると、リンチェンサンポがこの地に移植しようとした密教が、瑜伽観法を中心とし、民衆教化を直接目的としない本格的なyogatantra系の密教であったことがわかる。それにもかかわらず、現在この地に、リンチェンサンポ崇拜は盛んである。Alchi, Sumda, Mangyuなど、リンチェンサンポゆかりの寺を、団体を組んで巡礼して廻る信者も少なくない。またAlchi寺の入口には、リンチェンサンポの枝から芽生えたという大木が昨年まで存在していた。現在それは大風によって倒されてしまっているが、それはリンチェンサンポに対する民衆の信仰をよくあらわしている。その思想と行動の中に、民衆性の希薄なリンチェンサンポが、カリスマ的な人物となって、現在、民衆の内に根強く尊崇されていることは、興味深いことといわねばならない。

またリンチェンサンポ様式の寺のマンダラと仏像の中心をなす五仏は、本来、大乘仏教の四智説に密教独自の法界体性智を加えた五智を象徴化したものとされる。しかし、この五仏をラダック地方の民衆は後世になると、大乘仏教的な思想よりも、日常生活的なレベルにおいて受け取っている事例が存在する。すなわちLamayurのDukkar lha khañの右壁に、vajrsattvaを加えた金剛界六仏と、六種のherukaが上下に描かれ、これらのうち法身の大毘盧遮那を除く11尊が、人間の死後、1日から11日まで順次に往生すべき仏であると記されている。つまり金剛界五仏の高度な思想性は、のちの民衆の間ではそのまま伝わらず、わが国の十三仏信仰のような民間信仰として伝えられているのである。

リンチェンサンポが西チベットにもちこもうとした仏教の全貌は、ラダック地方だけではなく、Guge, Spiti 地方の寺堂を調査した上でなければ、把握で

きないことはいうまでもない。ただこれらの地方に調査に入ることは、現在不可能であるため、とりあえずラダック地方におけるリンチェンサンポの足跡をたずね、その仏教の性格の一端を解明しようと試みたのである。

寺堂の実測図、堂内のマンダラ、仏像などについての調査研究は「ラダック地方におけるリンチェンサンポの遺跡の調査報告」(密教文化129号)にくわしい。またAlchi choskorのSum tsek 2階のマンダラの経軌との比定については、「アルチ三層堂二階の曼荼羅」(仏教史学創立三十周年記念仏教史学論集, 同朋舎刊)を参照していただきたい。





Mangyu



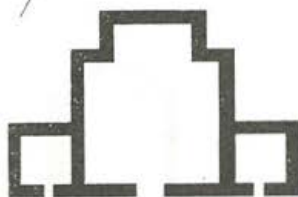
Alchi 丘



Alchi chachapuri
Alchi tshatshapuri



大Sumda



小Sumda



Señ ge sgañ

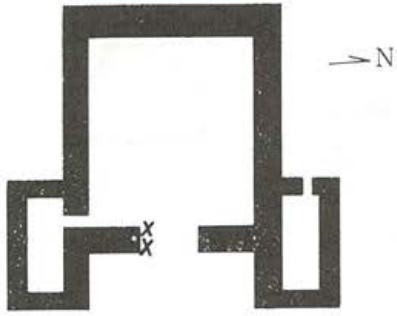


Lamayur

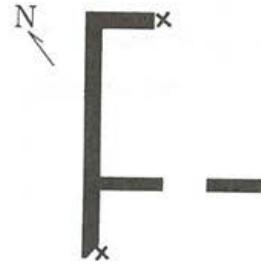


Wanla

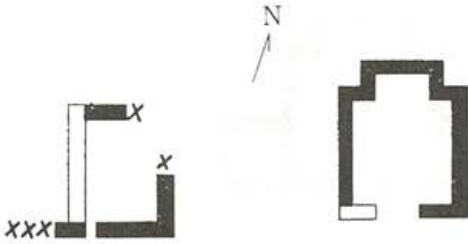




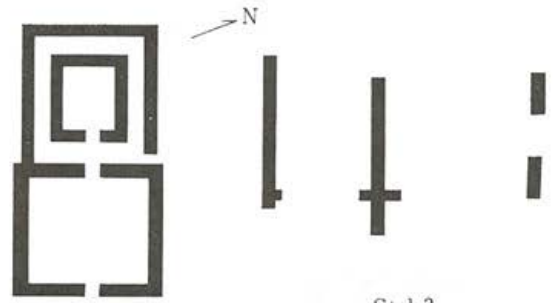
Basgo East



Chigtan

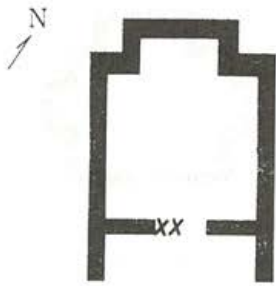


Basgo



Stok 1

Stok 3



Leh choskor



Stok 2

Stok 4

ラダックの仏伝壁画

氏 家 昭 夫

1. 諸寺における仏伝壁画

仏教が流伝した土地には仏陀への讃仰と敬慕を表明する仏伝の彫刻や絵画が多数制作されているが、ラダック地方の寺においてもそれは例外ではない。ただラダックのチベット寺では彫刻はみられず、仏伝は壁画やタンカに描かれて今日に伝えられている。壁画はおおむね各種仏伝の記述に忠実にしたがっている。仏伝壁画の主要な柱は五事観察・托胎・誕生・学習・結婚・四門出遊・出家・苦行・降魔成道・説法・涅槃などの12相で、これらに付随してその他もろもろの伝記や事蹟が描写されている。上の各場面のモチーフの設定は大筋においてインドの仏伝彫刻のそれと大差はみられない。壁画は彫刻に比して立体感に欠けるうらみがあるが、一方写実性に富む利点も持っている。すなわち画面のなかで仏陀など主要人物を大きく描いたり、遠近法を駆使して区切られた平面上に描かれる際の諸制約をうまくカバーしている。諸寺の壁画が制作された年代は比較的新しく、古いものでも12世紀以上にさかのぼりうるものはない。これはラダックのチベット寺の開創期の人とされるリンチェンサンポ(958~1055)時代の寺が現在ほとんど残されていないことと、リンチェンサンポに帰せられている寺でも後代の改変改修の跡が歴然

としていて、その文化や美術遺産を到底当時のものと認定しえないからである。しかし古いものでも12・13世紀ごろのものから最近代のもので各寺の壁画に時代の差があるのと、地域的な差異もみられるから、同じ仏伝でもモチーフの設定や絵画の様式にある程度特色と差異をよみとることができる。そこでまず最初に、ここで各寺の仏伝壁画の特色を概観してついでⅡにおいて全体としてのチベットの仏伝の性格を誕生仏を中心に報告したい。

アルチ・ゴンパ第2堂の正面弥勒仏の両足に仏伝中の兜率天における浄幢菩薩の五事観察から降魔成道にいたる各場面が描かれている。ここにみられるシッダールタ太子や宮中に仕える侍女などの像は、同じ堂内の各種マンダラの諸尊にみられるようにカシミール・ベルシャ系の仏教美術の影響を受けているように思われる。それは容貌や服装から、インドや中央アジアの宮廷貴族の雰囲気をよく感じさせるものである。この仏伝壁画はリンチェンサンポの時代にもっとも近いもので、ラダックの諸寺の仏伝画のなかではおそらく最古の形式を伝えるものであろう(1)。

同じアルチ・ゴンパでも新堂の入口左右の壁の下段に描かれている仏伝は、第2堂のものに比してよ

りインド的な雰囲気をもっていて、非常に素朴な力強さと地方色を感じさせる。五事観察から出家にいたる各場面が6段構成で最上段の左から右へ順次に第2段・第3段の左から右へ伝記が進行している（入口左の仏伝）。右の方は金剛手などの下に2段にわたって説法から涅槃および舍利8分にいたる各場面が描かれている。素朴ではあるが人物の表情は生き生きとしていて存在感があり、同じ寺院でも第2堂のものとはかなり描法に差異がある。おそらくこちらの方は土着の絵師によって庶民的な感覚で描かれたものと思われる(2)。各場面にとくにかわったモチーフは見られないが、ただ一つ最初の五事観察の場面に五仏のようなモチーフが採用されている(図例1)



すなわち中央に説法印で身体白色のビルシャナ(?)を配し、その回りを阿闍(青)、阿弥陀(白)、宝生(黄)、不空成就(緑)の四仏(?)がとり囲んでいる。五事観察とは兜率天における淨幢菩薩が人界に降下するに際して(1)生まれる時と(2)生まれるべき国と(3)生まれるべき種族と(4)同じく血統と(5)母となりうる徳をそなえた女性を観ずることとされている。その五事が五仏のマンダラのモチーフをかりて表現されたものと思われるが、このような事例は他

には見られない特殊なものである。

バスゴー・ゴンバの金銅堂の2階ヴェランダに描かれている仏伝図は、アルチゴンバについて古い仏伝壁画の一つである。このゴンバにはもう一つ弥勒堂の内壁にも仏伝が描かれている。弥勒堂は16世紀の中ごろタシナムギャル王の息子のツェワンナムギャル王が建立したとされている(3)。二つの仏伝図はほぼ同じ頃に作成されたものと思われるが、2階ヴェランダに描かれている仏伝図は外気に触れているので、その分だけ剝落の度合いが大きい。重要な場面と思われるもののうちでいくつかは判定が困難であるが、従兜率天下生より火葬にいたる釈尊の全生涯が十数コマにまとめられている。そのうち前半の従兜率天下生より四門出遊の各場面は、兜率天宮と王宮の建物が中心になっていて、太子とおぼしき人物は建物の内部または周囲に小さく描かれているにすぎない。これに対して出家以後では、画面の中央に与願印(触地印?)、禅定印、説法印の仏陀を配してそれぞれ降魔成道、冥想、初転法輪などの各場面に見合うように按配されている。これは仏伝中の仏陀が本尊仏としての礼拝対象として設定されていることを示すもので、仏伝史実の仏陀の理念化である。この傾向はインドの仏伝彫刻にもみられるところであり、目新しいものとはいえない。チベットでは、とくにこの形式が、仏陀や菩薩像を単独であるいは他の尊格とともにマンダラとして描くタンカの仏画様式として固定している。このバスゴー・ゴンバの仏伝壁画は、成道後の仏陀がタンカ形式の本尊として理念化されていく過渡期の仏画様式を伝えるものである。各場面のモチーフはほぼ他のものと同じであるが、図例(1)は、太子の宮廷生活(結婚生活)の有様が、さまざまなモメントを織りまぜ



で描かれている。中央上方の王宮の建物の一室に太子が王妃と侍女らしき数名とともに坐している。すでに太子には出家の決意が固まってきているであろうか、それを暗示するかのように太子の頭上から一筋の雲がふくらみつつ出ている、そのなかに馬上姿の太子が数名の家臣(?)とともに描かれている。(まさしく出家はこのつぎの画面に示されている。)王宮の左の一角にひとりの人物が描かれているが、これは太子の出家を心配する父の浄飯王であろう。太子の出家を憂う父王の命によって城門の入口には武装堅固の兵士が警護している。そのさらに下方に太子と愛馬のカンタカと老人や死人が描かれている。これは太子が四門出遊によって老・病・死人の世の無常を体験する場面である。画面の最上段に金剛界の五仏らしき5体の仏格と画面左右にこの場面には不釣合な光背をもつ3人の弟子像が配されているが、全体として出家をめぐる多くの要素が一所によくまとめられていて見ごたえのある作品である。

バスゴー・ゴンパのもうひとつの弥勒堂の内部を飾る仏伝図も、各場面の中央に光背をもつ仏陀を配している点は、さきの金銅堂の仏伝図と同じ様式によるものである。堂内に描かれているだけに前者にく

らべて保存状態もよく、各登場人物の表情も明瞭で写実的である。各画面の下に若干の説明が付されているが、描かれている内容とかならずしも一致していない。これは説明と付合するもとの仏伝をのちに描き直したときに誤まってちぐはぐにされたものかもしれない。二種の仏伝画を比較すると、前者には一つの画面のなかに多くの要素や表情をよみこもうとする傾向があり、後者には一画面一要素の単純化がなされている。後者の方が理解しやすいのは事実であるが、叙述性という面では前者の方がすぐれている。

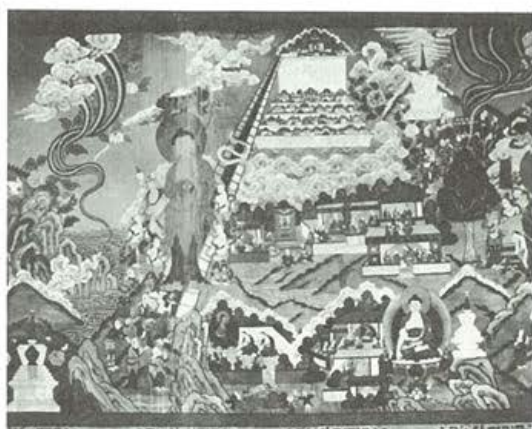
ヘミス・ゴンパの勤行堂の後壁に描かれている仏伝画は、アルチゴンパやバスゴーゴンパの仏伝画に比してどこことなく中国的な雰囲気をもっている。ひげをたくわえた人物の表情や服装さらには木造の建築様式などにそれがうかがえるのであるが(4)、風景の描写にしても中国の山水画の様式に近いものを感じさせる。そのような特色が五事観察以下の各場面にみられるわけであるが、そのなかからえらんだ図例(3)は、太子の出家苦行の場面を示すものであ



る。左手上方の王宮の建物のなかに太子が妃らしき女性に向い合っている場面で、太子のすぐ下に小さ

なストゥーパがひとつ描かれている。これは太子の出家の決意を暗示しているものと思われる。その下方に太子の出城後の断髪と、そのもとを愛馬カンタカ（犍陟）をつれて名残惜しそうに去っていく御者のチャンダカが描かれている。その右下には苦行中の太子が村民から身体にふれられて試されているユーモラスな場面があり、中央にナイランジャー河（尼連禅河）のほとりて瞑想にふける太子と周囲に修行中の太子に仕えるガルダや祝福をなす天女が示されている。右上の建物のなかではひとりの人物がめん類のようなものを釜で煮ている風景がみられる。仏伝中になぜこの場面を設定するのかよく分らないが、この建物の前で修行中に太子の食事を供養する様子がみられるので、そのための用意かとも思われる。いずれにしてもこれらの場面の背後にある自然や建物の描写には中国的な画法と感覚がいきわたっている。この仏伝壁画は風景・人物・習俗の描写が写実的である点では、ラダック仏伝画中の随一であると思ふことができる。

つぎにリゾン・ゴンパの仏伝図は大乘堂の内壁三面を飾るもので、ラダックの仏伝壁画のなかでもっとも新しく最近代の作品である。他の仏伝図と同じく五事観察より涅槃・荼毘にいたる主要な場面が美しく描かれていて壮観なことこの上もない。ただしあまりにも仏陀の生涯が美しく理念化されているため、たとえばシッダールタ太子の出家・苦行の場面などにも、太子の人間的な苦しみが少しも感ぜられない。荘厳、華麗な作品がかならずしも単純・素朴な作品よりも宗教的にすぐれているとはいえないということだろうか。図例（4）は釈尊を出生されたあと7日後にこの世を去り、三十三天に再生されたマヤー夫人に説法をするため仏陀が三十三天に



おもむかれたときの場面である。その間地上では誰も仏陀のゆくえを知らず人びとは大いに悲しみ心配していたが、3ヶ月後仏陀は三十三天より金・銀・瑠璃の三道宝階を伝ってこの世に降下された、とされている。中央上方に三十三天と左に三道宝階を降っていく仏陀が描かれている。また仏陀が不在の間人びとは仏陀を偲ぶために仏陀の像をつくってそれを礼拝したといわれる。画面の下方で仏弟子が仏陀像を画いている場面がみられるが、これは仏像の制作がチベットの的に変容して仏画の制作となったものであろう。その上方では、タンカに描かれた仏陀を人びとが礼拝している様子が描かれている。

仏伝図は以上の各ゴンパの他では、ラマユル・ゴンパやグル堂にも素朴で見ごたえのある作品が断片的に残されている(5)。またラマユル・ゴンパには比較的新しい作品ではあるが、仏伝ジャータカ（本生話）が一部描かれている。そのなかにはアングリマール（指曼外道）の物語などで興味を引くものもあるが、今回は紙面の都合により、別の機会に譲りたいと思う。またラダックの諸寺院には、壁画の他にもすぐれた仏伝タンカが数多く残されているが、これらの研究報告も他日を期すこととしたい。

Ⅱ．仏伝誕生図について

以上に紹介したように、ラダックの仏伝壁画は一部にチベットのあるいはまれに中国的な自然や風俗を伝える描写がなされているにしても、主要場面に主題にそぐわないモチーフが採用されたり、独自の要素が付加されることはまずありえない。これは一般にチベットの仏教美術は僧院の内部で規定どおりに儀軌にしたがって制作されるという伝統があるため、仏伝美術にかぎって仏伝資料に親しみのない別の要素が入り込む余地はまったくないわけである。仏伝図の各場面がいかに忠実に各種仏伝の記述に沿ってなされているかという点について、以下ラダックの仏誕生図を例にとり、それを他の誕生仏の資料とも比較して述べてみたい。

各ゴンパの誕生図のうちアルチ・ゴンパなど古いゴンパに描かれている誕生仏は、いずれも手を垂下したポーズをとっている(Ⅰの図例1参照)。その際七歩を示す蓮華は、七つのみのものと上下左右(東南西北)に各七つ描かれているものがある。これはシッダールタ太子がマヤー夫人の右脇から生まれ落ちると、すぐ七歩あゆまれて、「わたくしはこの世のなかで最勝の者である」などと獅子吼(宣言)された伝説を表わしたものである。仏伝資料のなかには七歩のみにとどまらずに、東南西北上下にそれぞれ七歩あゆまれたとするものもある(『方廣大莊嚴經』卷3、『大般涅槃經』卷4など)(6)。左右上下に七つずつ蓮華を描く例(バスゴー・ゴンパの弥勒堂、リゾン・ゴンパの大乗堂など)はこの各方向へ七歩ずつあゆまれたとする記述にしたがったものと思われる。

誕生仏画のなかに太子が右手を肩口にあげて宣言のポーズをとっている例がみられる。

リゾン・ゴンパの大乗堂(図例5)、ヤリンショト・ゴンパの集会堂その他の仏伝画にあらわれる誕生仏がそれであるが、仏伝文献でもとくに漢訳の



資料に、太子が右手をあげてつぎのように宣言されたと記述されている。

四月八日夜半明星の出ずる時をもって生じ、地に墮ちて行くこと七歩、右手を挙げて曰く、天上天下我れまさに人民のために師となるべし。(『摩訶剎頭經』)(7)

菩薩は漸々として右脇より生ず。時に樹下に亦た七宝七茎の蓮華を生ず。大いさ車輪の如し。菩薩は即便ち蓮花上に墮つ。扶持する者無く、自ら行くこと七歩、其の右手を挙げて獅子吼す。我れ一切天人中において最尊最勝なり。(『過去現在因果經』卷1)(8)

このように右手をあげて宣言する太子像は仏伝の記述とも一致するところであるし、インドの仏伝彫刻のなかにも、両手を垂下するものと右手を肩口にあげている像とがみられる。私見によると、二様の誕生仏のうち右手を肩口にあげて宣言のポーズをとる像は、両手を垂下する灌頂姿の誕生仏とは別に新しく七歩や宣言を重視して造像されたものであろう

と思われる。そのことを暗示するのは、燧燿の「眞」に画かれている仏伝誕生図のなかに、両手を垂下する「灌頂」の像と右手をあげる「七歩・宣言」の像が二場面一組のセットで描かれている図例(6)である(9)。初期のガンダーラの彫刻でも知られるとお



り、古くは誕生仏は灌頂でも七歩でも両手を垂下している(この伝統的な造様はラダックにも前述のとおり受けつがれている)。それが燧燿の仏伝図のように、灌頂の誕生仏とは別にとくに七歩または宣言を示す像が作成されるようになったと仮定すれば、両手を垂下する誕生仏に比して、右手をあげる太子像は誕生仏の新たな様式であるといわざるをえない。

ところでインドやチベットの仏伝誕生図には、わが国の誕生仏のような右手を高く頭上にあげて天を指し、左手を下げて地を指す、あの独特の像がみられない。そのわけは、仏伝資料中にこの像にかんする具体的な記載がないことと付合している。チベットの仏画にも現れる両手を垂下する誕生仏は、仏伝中の竜王の灌水にもとづくものである。この灌水については、インドの古い資料やその漢訳などの仏伝資料にも明瞭に記載されているため(10)、議論の余地はまったくない。

つぎに「右手をあげる」とかあるいはたんに「手をあげる」という表現も、漢訳の仏伝には随所に説かれている。しかし右手を頭上にあげ左手を垂下する誕生仏を正確に記述する文献は、ほとんどみあたらない。これにはほぼ一致と思われるものは、『雑阿含経』巻23の「如来初生の処、生ずる時七歩を行く。諸四方を顧視し、手を挙げて天上を指す。我れ今最後の生なり、まさに無上道を得て、天上及び人に於いて我れ無上尊となるべし。」(11)であり、もう一つは『根本説一切有部毘奈耶雜事』の、「扶持を仮らずして足七花を踏み、行くこと七歩し已て遍く四方を覩る。手は上下を指し、是の如き語を作す。此れは即ち是れ我が最後生の身なり、天上天下唯我独尊と。」(12)である。このうち『雑阿含』は求那跋陀羅(394~468)によって訳され、『有部毘奈耶雜事』は義浄(635~713)によって漢訳されている。すでに七世紀の白鳳時代からわが国に流布している、天を指し地を指す誕生仏の起源は、これらにあると一応は考えてよいかも知れない。中国の図像例としては、さきに紹介した燧燿の仏伝誕生図などがあり、唐代からこの図像が普及したことがわかる。しかし、同じ燧燿の一連の誕生図のなかに、左手を頭上にあげている例がみられる。このことは、さきの『雑阿含』や『雜事』などが、かならずしも「右手頭上、左手垂下」の造像の典拠を提示しなかったことを示している。上の二文献には手をあげて天上を指すことは言明されているけれども、それが右手であるか左手であるかというところまでは明示されていない。文献に明示されていない以上、これにもとづく造像や作画にもとぜん混乱が予想される。誕生仏の挙手の姿が一定していないのもそのためであろうと思われる。『雑阿含』には、これに相当する「ディヴ

ヤ・アヴァダーナ』(22)があり、それには「この世に生まれるやいなや、かの牟尼は地上にて七歩を歩いた云云」、とある¹⁴⁾。しかしこれには、「手を上下にあげ、またさげる」ことには何らふれていない。このほかにも仏伝関係の多くの有力な資料が、仏誕生時のさいの挙手については沈黙したままである¹⁵⁾。

このように仏伝文献の記述があいまいなために、燉煌の仏伝図にみられるような、宣言にさいして手をあげるにも、右手ではなく左手をあげる太子像が描かれたものであろう。

同じことはチベットの仏伝誕生図についても言えるようである。ラダックの学術調査でわれわれが知りえたかぎりでは、誕生仏は両手を垂下する像と右手を肩口にあげる像のみであるが、他の報告や資料にこれと相違する例がみられる。そのひとつはA. ゴードンの『チベットのラマ教の図像学』に出されているブロンズ像の誕生仏である。この像は燉煌の仏伝図にあるような、左手をたかだかと頭上にあげ、右手を垂下する姿をしている¹⁶⁾。

もうひとつの例は、多田等観編の『西藏仏画釈尊伝』¹⁷⁾にみられるもので、そこではマヤー夫人とその下方に七歩を表現する4体の誕生仏が蓮花上に描かれている。この4体のなかに右手を胸元にあげるポーズをとる像がひとつあるが、他は右手ではなく左手が上にあげられている。うち一体は左手を肩口よりやや上にあげ、右手を垂下している。ここに描かれている仏伝図は、編者がダライラマ13世よりゆずられた24幅のタンカを再編集したものであるから、仏伝図としては純チベット様式の由緒のあるものとみてよい。その由緒のある伝統的な様式を採用している仏伝図においてすら、このように誕生

仏の姿が一定していないということは、儀軌に忠実なチベットの絵師をあやまらせるほど仏伝文献の記述が不確かなものであったと考えざるをえない。

河口慧海著の『西藏伝印度仏教歴史』(上巻)には、11種ものチベット所伝の仏陀の伝記がまとめられているが、そのなかに仏誕生の場面がつぎのように描写されている¹⁸⁾。

時に摩耶夫人は右手を延ばして、其の樹枝に掛け給い、空を見給いしに、夫人の右脇よりして、黄金塊、百千日光の潤光あるもの、頓に出でたりと見るや、仏身誕生あらせられたり。而して梵天王及び因陀羅王の二神は天衣カーシカを以て尊身を受け、難陀・優婆難陀の二龍王は甘露の雨を供し、無数の天人天女は天の香水を以て、尊身を灌浴せり。而して梵天と帝釈天とは尊身を空中に捧げんとするや、菩薩は是れを制止して地に下り、四方を七歩つづ歩行して天上天下唯我独尊と一大獅子吼し給えり¹⁸⁾。

ここでいわれる竜王の灌水や七歩(同時に宣言)などが、ラダックの伝統的な古様の仏伝誕生図にもとり入れられている。しかし、ここには先述来問題にしている右手をあげる誕生仏については、何も述べられていない。アルチ・ゴンバをはじめとするラダックの諸寺の古様の仏伝壁画に描かれている誕生仏が、すべて両手を垂下する姿をとっているのはこのためでもあろうか。諸仏伝に明確な記述がないために、誕生仏の造像は伝統的なインド古来の灌水像を採用したものと思われる。

それではリゾン・ゴンバやリンショト・ゴンバなどにみられる右手を肩口にあげる誕生仏は、どのような文献または典拠にもとづいて作成されたものであろうか。この問題については、今わたくしはつぎ

のように推定しうるのみである。すなわちひとつは、われわれが今手にしうるインドおよびチベットの文献にはそのことが記載されていなくとも、すでに失われた文献に典拠があり、それがラダックにも伝えられているのではないかということ。それともうひとつより確実と思われる推定は、右手を施無畏印のように肩口にあげる誕生仏は、別に文献の典拠がなくとも容易に造像されうるのではないかということである。周知のとおり、古くは初期のガンダーラの仏像（紀元1世紀以降）から後期密教の不空成就仏にいたるまで、仏教美術の上で施無畏印の姿をとる仏像や尊像の例は数多くあり、枚挙にいとまがないほどである。同時にその姿や印相が表わす意味もさまざまである。初期のガンダーラの彫刻では、過去七仏や弥勒仏がこの印相をとっている¹⁹。この他にも、仏伝中のアシタ仙人が浄飯王にマヤー夫人の懐胎を予言するさいに、右手をあげたポーズがとられている²⁰。何かを予言したり宣言したりする場合には、今日でもそうであるように、古代より一般に右手をあげることが常識であるとすれば、仏陀が誕生時に、「私はこの世のなかでは最尊最勝である」と宣言されたとされる像に、その常識が適用されることは何ら不自然ではない。それはもともと「灌水」に力点をおいて制作・作画されたであろうと思われる両手をさげた誕生仏が、別にその造像の典拠を文献に確かめなくとも、何ら違和感を抱かないのと同様である。この意味で、たとえ文献上の保証がなくとも、釈尊の誕生時の「宣言」の像に右手をあげる太子像が作られることは、少しも不合理とは思われない。もしこの推定が当をえているとすれば、ラダックの仏伝図において宣言の右手をあげる太子像はきわめて常識的な自然な姿をとっているといえるで

あろう。

さりとて、それではラダック以外の仏伝図において宣言の挙手が右手ではなく左手であるのは造像上の誤りである、とはいえないであろう。わたくしは宣言上の挙手が一定していないのは、むしろこのことを記す文献上の記述の不明瞭さに帰したいと考える。これを敷衍すれば、誕生仏の定型というものは存在しないのであるから、誕生仏といえば右手を頭上にあげて天を指し、左手をさげて地を指すもの、というわたくしたちの常識は、撤回されなければならない。

またこれはわたくしの個人的な危惧にすぎないかもしれないが、右手を高く頭上にあげる誕生仏には「天上天下唯我独尊」の宣言と一組になっていて、この宣言を個人の尊厳のみに限定した唯我論的なものと理解しようとする傾向があるのではないか。もしそうだとすれば、それこそ根拠のないものであることを指摘しておきたい。

同時にまた、その宣言に見合う造像がいかなるものが適当であるか、を論ずることも無用であろう。ただしいていわしむれば、わたくしはこのように考えてみたい。すなわち釈尊の降誕時における宣言の意味は、たとえば『長阿含経』巻1に「天上天下唯我のみ尊しとなす。要は衆生の生老病死を度するにあり」²¹といわれるように衆生の救済が念頭におかれている。これは釈尊の「独尊」の宣言が、衆生の上に君臨することを意味していない。むしろ衆生のひとりひとりに対して、救済のにない手として第一人者であることの誓いを立てていると解したい。そうであるとすれば、その尊像の姿は右手を施無畏印のようにあげるのがもっともふさわしい、と考えるものである。²²

- 注 (1) スネルグローブはアルチ・ゴンパ三層堂の壁画の年代を11~12世紀頃のものとする。The Cultural Heritage of Ladakh, p.79. また堂内の壁画がインド的雰囲気の中にチベット・中央アジア的色彩をもつ点にかんして、チベット中央アジアで学んだチベット人の絵師がカシミールの美術家と組んで制作したからであろうと推定している。上同書40~41ページ。
- (2) スネルグローブも新堂の壁画には三層堂にみられたベルシャやカシミール美術の影響はほとんどみられないという。また新堂の壁画は13世紀頃に描かれたものと推定している。上同書67, 79ページ
アルチ新堂の仏伝図については長田実生「アルチ寺院の仏伝壁画考」(第2回高野山大学チベット仏教文化調査団報告書, 53ページ以下)の報告がある。
- (3) スネルグローブ上同書93ページ。長尾雅人他「チベット密教壁画」178ページ。
- (4) このことはすでに指摘されている。「チベット密教壁画」227ページ。
- (5) これらのゴンパの仏伝壁画の一部は「チベットの密教壁画」に紹介されている。同書201, 214ページ。
- (6) 大正3, 553上中, 大正12, 388中下, 石上善応「仏伝に現われた七歩の意味」仏教文化研究第15号23, 25ページ。参照
- (7) 大正16, 797下。石上上論文25ページ。
- (8) 大正3, 625上。石上上論文24ページ。
- (9) 松本英一「燼燼画の研究」図録73C。
- (10) 肥塚隆他「釈尊の生涯」図7, 図9。
- (11) たとえば「ブッダ・チャリタ」1-16, Johnstons' ed. p. 2, p. 5.
- (12) 大正2, 166中, 石上上論文25ページ。
- (13) 大正24, 298上, 石上同26ページ。
- (14) Divyāvadāna, Vaidyas' ed. p. 248。石上同26ページ。
- (15) 挙手について語らない文献はこの他にもペーリの「ニダーナ・カタール」や「長部」・「中部経典」, サンスクリットの「ブッダ・チャリタ」や「マハーヴァスツ」などがある。石上上論文21ページ以下参照。
- (16) Antoinette K. Gordon, The Iconography of Tibetan Lamaism, p. 55。
- (17) 多田等観編「西藏仏画釈尊伝」第3図釈尊の誕生。
- (18) 河口慧海「西藏伝印度仏教歴史上」(一名釈迦牟尼伝)50ページ。
- (19) 高田修「ガンダーラ美術における大乘的徴証—弥勒像と観音像」仏教芸術125号, 11ページ以下。
- (20) 上出「釈尊の生涯」図3。
- (21) 大正1, 4下。
- (22) この報告のⅡは筆者が昨年高野山時報第2221, 2222号(昭和54年10月21日, 同11月1日付)誌上において「ラダック学術調査中間報告①, ②」として発表したものである。

仏頂尊について

—アルチ寺の二種の仏頂曼荼羅を中心として—

小林 暢 善

アルチ寺に描かれた曼荼羅の内、仏頂曼荼羅と見られるものが二種存在する。一つは、釈迦牟尼を中尊とする悪趣清浄曼荼羅であり、いま一つが、文殊菩薩（Dharmadhātu vāgīśvara manjuśrī）を中尊とする曼荼羅である。前者は新堂西壁中央、三層堂三階西壁、大日堂東壁右に描かれ、これについては前回の報告書で既に論究した。^① 後者の曼荼羅は大日堂西壁右に描かれている。中尊は四面八臂の文殊菩薩で、中尊を囲む第一重の八葉蓮弁上には大仏頂を初めとする八仏頂尊が描かれている。第二重は方形で、各方位には金剛界四仏と四明妃、四仏の各尊のまわりには四尊ずつ金剛薩埵を初めとする十六大菩薩が描かれている四重の曼荼羅である。

両者の曼荼羅に描かれた八仏頂尊を比較すると、次の様な点が注目される。

(A)八仏頂尊の一つである白傘蓋仏頂は、両者の曼荼羅に描かれているが、各々の像容が全く異っている。

(B)前者の曼荼羅の八仏頂尊は、各々異なる像容をしているが、後者では尊名は異っていても、像容が全く同じである。

そこで、仏頂尊の尊名と像容に注目しながら、その系譜を曼荼羅の構造と共に眺めてゆきたい。

仏頂とは、如来の三十二相の一つである無見頂相の功德を表示するもので、仏頂尊には三仏頂、五仏頂、八仏頂、九仏頂、十仏頂等の別がある。例えば漢訳大日経及び経疏にもとづく曼荼羅では、釈迦院に三仏頂として、廣大仏頂、極廣大仏頂、無辺音声仏頂が釈迦牟尼の北方にある。また五仏頂として、白傘蓋仏頂、勝仏頂、最勝仏頂、光聚仏頂、除障仏頂が南方に描かれている。八仏頂は以上の総和であり、九仏頂は八仏頂に攝一切仏頂を加え、十仏頂はさらに普通仏頂を加える。そしてこれらの仏頂尊は説かれる経軌によって尊名も像容も若干の相違がある。以下仏頂尊の初出する陀羅尼集経を初めとする、漢訳、チベット訳諸經典に説かれる仏頂尊の尊名と、像容の異同を整理してゆきたい。

〔1〕漢訳諸經典に説かれる仏頂尊及び仏頂曼荼羅。
①陀羅尼集経（唐、阿地瞿多訳）

同経第一卷大神力陀羅尼經釈迦仏頂三昧陀羅尼品一卷於大部卷第一（仏部卷上）（大・8・780 c）に施願印、身金色で赤袈裟の釈迦金輪仏頂が説かれる。さらに仏頂像法（大・18・790 a）では、金輪仏頂の頂上内鬘相中より放たれた五色光中に、光聚仏頂が流出すると説かれているが、その像容の説明はない。また仏頂八肘壇法では、中尊として光聚

釈迦仏頂が説かれているがやはり像容の説明はない。

同経第二巻に一切仏頂像法(大・18・795 a)がある。この一切仏頂は身色黄色で赤単裙をまとい、転法輪印をなすと説かれている。

同経の仏頂曼荼羅は仏頂八肘壇と呼ばれ、先に見た光聚釈迦仏頂を中尊とする、方形三重の曼荼羅である。中尊以外には仏頂尊は見られない。

以上が同経に説かれる仏頂尊及び、仏頂曼荼羅である。これらは尊名、像容に於いても最も原初的なものであり、光聚仏頂が金輪仏頂の頂上内鬘相中より放たれた五色光中に生ずると説かれている様に、各種仏頂尊が生じてゆく過程を見る事もできる。

㊤一字仏頂輪王経(唐・菩提流志訳)

同経巻第一画像品第二(大・19・230 b)に五仏頂尊が説かれている。その五仏頂尊とは、一字頂輪王、白傘蓋頂輪王、高頂輪王、光聚頂輪王、勝頂輪王であり、いずれも金色で半跏座をし、蓮座に坐す菩薩形の像容をなしているが、各々異なる持物を持っている。

同経巻第四大法壇品第八には、九仏頂尊が説かれている。これは画像品第二に説かれる五仏頂尊以外に、摧碎頂輪王菩薩、会通三頂輪王菩薩、会同一切超頂輪王菩薩、聖無辺頂輪王菩薩の四仏頂が付け加えて説かれている。また同経の同本異訳とされる唐・菩提流志訳の五仏頂三昧陀羅尼経、及び不空訳の菩提場所説一字仏頂輪王経には、画像品第二の五仏頂尊が説かれている。しかし各経軌の仏頂尊には若干の像容の相違が見られる。(表1参照)

表1より明らかな様に、五仏頂、九仏頂という各仏頂尊が生まれ、各々が異なる持物を持ち、陀羅尼集経で説かれた光聚仏頂以外は、新しい仏頂尊である

事が認められる。しかしこれら三本の経軌が同本異訳とされながら、同じ仏頂尊に於いても、各経軌に於いて少なからぬ像容の相違がある事は、未だこれら仏頂尊が、各々定形化した像容を持つに至っていない事を示している。

次に同経の仏頂曼荼羅は画像品も大法壇品も説法相の釈迦牟尼を中尊としている。特に大法壇品の仏頂曼荼羅は、胎藏曼荼羅の原形をなすと思われるが、東方第二重に一切仏心印を中央として、南方に無量光と開敷華、北方に阿闍と宝星の尊名が見られるのが注目される。

㊦不空罽索神變真言経(唐・菩提流志訳)

同経巻第九広大解脱曼荼羅品第十二(大・20 271 b)に六仏頂尊が説かれる。

六仏頂尊とは、白傘蓋仏頂菩薩、勝仏頂菩薩、光聚仏頂菩薩、最勝仏頂菩薩、無辺仏頂菩薩である。先に見た一字仏頂輪王経に説かれる仏頂尊と比較すると、両経に説かれる摧碎頂輪王菩薩の像容に相違があるが、同経の最勝仏頂尊は、輪王経の一字頂輪王菩薩と像容が一致し、同体異名と考えられる。即ち、摧碎頂輪王菩薩を除けば、他の五仏頂尊は像容が一致し、仏頂尊の像容の定形化の傾向がうかがえる。(表1参照)

また同経の曼荼羅は仏頂曼荼羅とは言えないが、北方第三重に六仏頂尊が配せられている。中尊は定印の釈迦牟尼で、第二重の四方には金剛界四仏が説かれている。(但し北方は世間王如来)西方の阿弥陀仏のみ定印であり、他の三仏は右手を揚げるのみである。また第二重の東南等の四隅には、地藏、弥勒、普賢、曼殊の四菩薩が説かれる方形六重の曼荼羅である。

(表I) 〔漢訳諸經典に説かれる仏頂尊の像容一覧表〕

	一字仏頂輪王經 (大法壇品第八)	同 (画像品第二)	五仏頂三昧陀羅尼經 (一字頂輪王画像品第三)	菩提場所説一字頂輪王經 (画像儀軌品第三)
中尊	釈迦牟尼(説法相)	〃	〃	〃
① 一字頂輪王	左-開蓮華, 華台上金輪 右-揚掌	金色, 左に同じ	金色, 身有圓光, 坐白蓮華	(転輪大王) 金色, 周遍光明, 作觀仏勢
② 白傘蓋頂輪王	左-胸執開蓮華, 華台上 白傘蓋 右-持開蓮華	金色, (左-左に同じ 右-執半開蓮華)	金色, 執蓮華, 坐蓮華座	金色, 持蓮華, 如大王形 坐白蓮華
③ 高頂輪王	左-持開蓮華, 華台上八幅 金輪 右-胸側揚掌	金色, (左-引惹布羅迦葉 右-ウトバラ)	金色, 執強惹布 羅迦葉,	金色, 持俱縁果, 坐白蓮華
④ 光聚頂輪王	左-持開蓮華, 華台上仏心 印 右-以大拇指, 頭指直伸其中 指, 無名指, 小指屈於掌内	金色, (左-左に同じ 右-如意珠)	金色, 執如意珠, 〃	金色, 持眞多摩 尼宝,
⑤ 勝頂輪王	左-持開蓮華, 華台上劍 右-ウトバラ	金色, (左-左に同じ 右-如意宝珠)	金色, 左-如意宝珠 〃 右-仰右膝上	金色, 左-持宝, 〃 右-施願,
⑥ 摧碎頂輪王	左-持開蓮華, 華台上金剛 幢幡 右-屈上向内揚掌			
⑦ 会通三頂輪王	左-持開蓮華, 華台上金剛 杵 右-當胸向外揚掌			
⑧ 会同一切超 頂輪王	左-仰左臂, 開蓮華 右-當胸仰拳四指, 大指直 伸			
⑨ 聖無辺頂輪 王	左-覆屈膊左脇, 側開蓮寶 螺 右-當胸側手揚手			

◎大日經(唐・善無畏訳)

漢訳の大日經及び經疏に説かれる仏頂尊は八仏頂尊である。

入曼荼羅具縁品第二(大・18・7c)では, 白傘蓋仏頂, 勝仏頂, 最勝仏頂, 光聚仏頂, 捨除仏頂, 廣大仏頂, 極大仏頂, 極廣大仏頂, 無辺音声仏頂の八仏頂尊が説かれ, 各々の色相の説明のみ説かれている。(表I参照)

また秘密曼荼羅品第十一(大・39・634a)では, 具縁品に説かれる八仏頂尊の内, 廣大仏頂と極廣大

仏頂が無く, その代わりに広生仏頂と發生仏頂が説かれている。これら二尊は, 各々の持物から同体異名と考えられる。この秘密曼荼羅品では, 三摩耶形, 持物が説かれるのみである。また經疏(大・39・743c)も同様である。(表I参照)

ところで, これら大日經に説かれる仏頂尊の像容の異同に関して, 一字仏頂輪王經, 不空罽索神変真言經所説の像容と, さらに図像例として, 胎藏図像, 旧図様及び現図胎像曼荼羅の仏頂尊とを比較対照した研究がある。② それによれば, 胎像図像, 旧図像,

不空羂索神變真言經 (廣大解脫曼荼羅品第十二)		大日經及び經疏 (入曼荼羅具緣品第二) (秘密曼荼羅品第十一)				尊勝仏頂修瑜伽法軌儀	
釈迦牟尼(定印)		毘盧遮那(定印)				毘盧遮那(定印)	
最勝 仏頂菩薩	(左-持蓮華台 上堅輪印 右-揚掌)	最勝 仏頂	浅黄色	最勝仏頂	輪印	最勝仏頂輪王	(左-揚掌 右-持蓮華上安八幅宝輪)
白傘蓋 仏頂菩薩	(左-持蓮華台 上傘蓋印 右-揚掌把蓮華)	白傘蓋 仏頂	金色	白傘蓋仏頂	傘蓋印	白傘蓋仏頂輪王	(左-執蓮華。於蓮華上安置白傘蓋 右-揚掌)
光聚 仏頂菩薩	(左-執蓮華台 上仏頂印 右-胸)	光聚 仏頂	極白色	火聚仏頂	仏頂髻	放光仏頂	(左-執蓮華。於華台上仏頂印 右-揚掌)
勝 仏頂菩薩	(左-持蓮花台 上堅劍印 右-持青優鉢羅花)	勝 仏頂	うっ金色	勝仏頂	大慧刀印	勝仏頂	(左-執劍 右-揚掌)
摧碎 仏頂菩薩	(左-執蓮華台 上宝印 右-揚掌)	捨仏 除頂	浅白赤色	除障仏頂	鈎印	尊勝仏頂	両手定印その上に蓮華。於蓮華上金剛鈎。肉白色
		広大 仏頂	白色	広生仏頂	金剛	広生仏頂	(左-揚掌 右-執開蓮華)
		極広大 仏頂	黄色	発生仏頂	蓮華	発生仏頂王	(左-執開蓮華 右-右膝上)
無辺 仏頂菩薩	(左-執蓮華 右-揚掌)	無辺音声 仏頂	赤色	無量声仏頂	宝螺	無辺声仏頂輪王	(左-揚掌 右-蓮華, 華台上宝螺)

現図は、一字仏頂輪王經及び不空羂索經と密接な関係があり、特に胎藏図像は一字仏頂輪王經と一致する事が述べられている。また三者の内、胎藏図像が最も古く、漢訳大日經系のものであり、旧図様及び現図はチベット訳大日經系のものとしている。

表Iによれば、輪王經、羂索經、大日經の三經に説かれる仏頂尊の内、白傘蓋仏頂、勝仏頂、光聚仏頂の三仏頂は尊名、像容共に一致している。また大日經の最勝仏頂、発生仏頂(具緣品では極広大仏頂)、広生仏頂(具緣品では広大仏頂)、無量音声仏頂が、

輪王經の一字頂輪王、会同一切超頂輪王、会通三頂輪王、聖無辺頂輪王に各々対応し、像容が一致している事より同体異名であると認められる。

漢訳大日經の図像例としての胎藏図像は、輪王經、羂索經、大日經の関連をよく説明していると共に、仏頂尊の像容の定形化を示している。

胎藏曼荼羅に於ける仏頂尊の位置は、漢訳大日經及び經疏では東方第四重に、胎藏図像の曼荼羅では東方第五重に描かれている。これはいわゆる釈迦院であり、中央に説法相の釈迦牟尼、その北方に三仏

大妙金剛大甘露軍拳 利焰曼熾盛仏頂経		仏説大乘観想曼 荼羅浄諸悪趣経		
毘盧遮那(定印上八幅輪)		釈迦牟尼(黄色, 転法輪印)		
最勝頂輪王	手持八幅金輪放綠色光焰坐綠色蓮華	東	金剛仏頂	白地 触地印
白傘蓋仏頂輪王	手持白傘放白色光坐大白蓮	南	宝仏頂	青色 施願印
		西	蓮華仏頂	赤色 定印
光聚仏頂輪王	手持如来頂印放大光聚坐赤蓮華	北	羯磨仏頂	綠色 施無畏印
勝頂輪王	手持利劍放雜巧色光明坐雜色蓮華	東南	威光仏頂	白赤色 右-日輪 左-腰
除一切蓋障仏頂輪王	手持紅蓮華華上有鈎, 放紅色光明坐紅蓮華	西南	幢仏頂	赤黒色 宝幢
黄色仏頂輪王	手持三股日縛折羅放青色光坐青蓮華	西北	利仏頂	青色 右-劍 左-經典
発生一切仏頂輪王	手持黃蓮放黄色光坐明坐黄色蓮華	東北	白傘蓋仏頂	白色 白傘蓋
無辺音声仏頂輪王	手持白螺, 放紫色光焰坐紫色蓮華			

頂尊, 南方に五仏頂尊が配せられる。

㊦ 尊勝仏頂修瑜伽法軌儀(唐・善無畏訳)

同経は, 尊勝仏頂法及び尊勝曼荼羅を説く経軌である。同経画像品第七(大・19・376 a)に八仏頂尊が説かれている。(表1参照)これらの尊名は, 大日経秘密曼荼羅品を継承しているが, 尊勝仏頂(除障, 摧碎仏頂に相当)放光仏頂(光聚仏頂に相当)の二尊のみ相違している。像容に関しては, 尊勝仏頂が定印をなしてその上に蓮華を持し, 蓮台上に金

剛鈎を持す事を除けば, 持物は大日経, 輪王経と一致する。(絹索経は最勝仏頂のみ異なる)また同経の仏頂尊は全て五智宝冠を戴せている事より, 現図に近い像容とも言える。

同経の仏頂曼荼羅は, 尊勝曼荼羅と呼ばれている。同経画像品第七(大・19・376 a)の曼荼羅は, 中尊を定印の毘盧遮那とし, そのまわりを八仏頂尊が囲む二重の曼荼羅である。この曼荼羅の中尊は智拳印となる場合もあり, 後者の曼荼羅の仏頂尊の方が経軌に忠実である。

大灌頂曼荼羅品第八(大・19・377 c)にも, 毘盧遮那を中尊とする金胎合軌の曼荼羅が説かれている。

㊧ 大妙金剛大甘露軍拳利焰曼熾盛仏頂経(唐・達磨栖那訳)

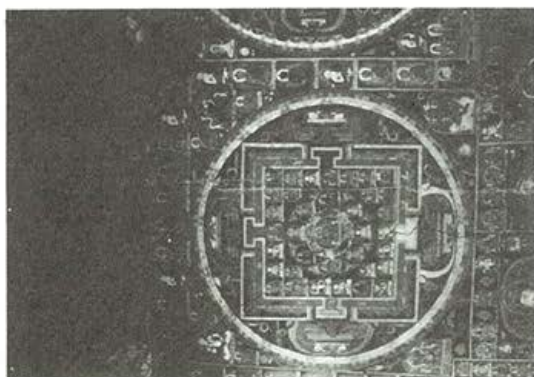
同経は仏頂曼荼羅として代表される曼荼羅を説き, その曼荼羅は, 攝一切仏頂曼荼羅あるいは, 大仏頂曼荼羅と呼ばれる。同経の説く八仏頂尊の内, 黄色仏頂輪王が尊名に於いて初出のものであるが, その像容から広生仏頂広大仏頂の同体異名である事がわかる。像容に於いては, 胎藏図像等に見られるものと等しい。但し, 蓮台上に持物を持すのではなく, 直接手に持している点が相違している。さらに各仏頂尊は, 各方向の色の蓮座に坐し, 同色の光を放つと説かれる。仏頂尊の色相に関しては, 一字仏頂輪王経とその同体異訳の二本の経軌には金色相と説かれ, 不空絹索経では色相の説明はない。また大日経及び経疏では初めて, 八仏頂の各々の色相が説かれているが, 金色, 白色, 赤色, 黄色の四色だけである。ところが, 同経では, 赤, 黄, 白, 雜巧, 青, 緑, 紫の七色が説かれるに至っている事は注目すべ

き事である。(表I参照)

同経の仏頂曼荼羅の中尊は、定印の毘盧遮那であり、定印の上には八輻金輪を持している。これは別名、攝一切仏頂輪王とも呼ばれる。中尊のまわりの第一重を八仏頂尊が囲み、各々の仏頂尊が、八大菩薩、八大明王を流出する。さらに四隅には、内外四供、四方に四摂菩薩と八方天を加えた五重の曼荼羅である。

④ 仏説大乘観想曼荼羅浄諸悪趣経(宋・法賢訳)

同経の曼荼羅は、チベット訳悪趣清浄軌(東北Nos. 485, 北京Nos. 117)に説かれる釈迦牟尼を中尊とする悪趣清浄曼荼羅と等しい。③この曼荼羅は既に報告した様に、釈迦牟尼を中尊とし、中尊を囲む第一重八葉蓮上弁上に、金剛大仏頂を初めとする八仏頂尊が説かれる三重の曼荼羅である。この仏頂曼荼羅がアルチ寺新堂、三層堂、大日堂に描かれている。(写真①及び表I参照)



(写真①) (アルチ寺新堂西壁中央の釈迦牟尼を)
中尊とする悪趣清浄曼荼羅

同経に説かれる八仏頂尊の内、胎藏系仏頂尊と同名のもは白傘蓋仏頂のみである。他の七仏頂尊では、尊名、像容共に異なるものとして、金剛大仏頂如来(白色、触地印)、宝仏頂如来(青色、施願印)

蓮華仏頂如来(赤色、禪定印)、羯磨頂如来(緑色、施無畏印)の四仏頂如来がある。これらはその色相、印相より、金剛界四仏の変容と考えられる。また残りの三仏頂如来の尊名は初出であるが、その像容に於いて、光明頂如来が光聚仏頂と宝幢頂如来は尊勝仏頂あるいは摧碎仏頂と、利仏頂如来は勝仏頂と各々対応すると考えられる。即ち金剛界四仏の変容と考えられる金剛、法、蓮華、羯磨の四仏頂如来を除けば、胎藏図像等に見られた仏頂尊が継承されている。もう少しつきつめて言えば、同経の八仏頂尊は、胎藏系四仏頂如来(白傘蓋、光明、宝幢、利)と金剛界四仏頂如来が混在していると考えられる。いずれにせよ同経は、漢訳諸経典の中では特異の存在と考えられ、同経のチベット訳が存在する事からも、チベット諸経典に説かれる仏頂尊との関連を考える上でも、重要なものと思われる。

同経の仏頂曼荼羅については、既に論じたのでここでは省略したい。

以上、仏頂尊の初出する陀羅尼集経を初めとする漢訳諸経典に説かれる、仏頂尊及び仏頂曼荼羅の構造を見てきた。不空罽索経と大日経は仏頂曼荼羅ではないが、中尊及び仏頂尊の位置を確認してきた。以上を要約すると、

① 仏頂尊は、一字仏頂輪王経及び不空罽索経に於いて一応像容は定形化している。さらに大日経に至っては、各仏頂尊の色相も説かれ、こうした経軌を基に胎藏図像は描かれている。

② 胎藏図像等に見られる胎藏系仏頂尊は、尊勝仏頂修瑜加法軌儀、及び大妙金剛大甘露軍拏利焰曼熾盛仏頂経に継承されている。

③漢訳・チベット訳のある仏説大乘観想曼荼羅浄諸悪趣経のみ、金剛界四仏の変容である仏頂尊と、胎藏系仏頂尊が混在している。

④仏頂曼荼羅としては、金輪、光聚、一切仏頂を中尊とするもの(陀羅尼集経)。転法輪印の釈迦牟尼を中尊とするもの(一字仏頂輪王経及び同本異訳、浄趣悪趣経)。定印の毘盧遮那を中尊とするもの(尊勝軌)。定印で八輻金輪を持す毘盧遮那を中尊とするもの(大妙経)が見られる。その他、仏頂尊が見られる曼荼羅として、定印の釈迦牟尼を中尊とし、胎藏曼荼羅の原形である不空罽索経の曼荼羅では北方第二院に六仏頂尊が配せられ、胎藏曼荼羅では、東方第四重に釈迦牟尼を中央として左右に八大仏頂尊が説かれる。総じて胎藏系曼荼羅が主流であると認められる。

〔Ⅱ〕チベット訳諸経典に説かれる仏頂尊及び仏頂曼荼羅

④大日経

同経の八仏頂尊については、漢訳の項にて論究したので反復を避けたい。また先にも述べた様に、チベット訳大日経の図像は、旧図様及び現図に継承され、漢訳大日経系の胎藏図像と比較すると、少なくとも持物に関しては一致している事も認められる。

チベット訳の胎藏曼荼羅に於いては、仏頂尊の説かれる釈迦院が、東方第三重にある事が漢訳と異なる点である。

⑤悪趣清浄軌(東北Nos.483,485,北京Nos.116,117)

同経には新訳と旧訳があり、それぞれ説かれる曼荼羅には相違がある。本論と関連する釈迦牟尼を中尊とする悪趣清浄曼荼羅は、新訳、旧訳共に説かれ

るが、新訳については既に論究し、先の漢訳でも言及しているので、旧訳に説かれる仏頂尊及びその曼荼羅を眺めたい。

旧訳(東北Nos.483・11b⁶~12a²,北京Nos.116・66a⁸~66b⁴)で説かれる仏頂尊は、釈迦牟尼を中尊とする曼荼羅の第一重八葉蓮弁上にある。(表Ⅱ参照)まず東方より順に、金剛手大力、勝仏頂転輪王、最勝仏頂の四仏頂尊が、また東南等の四隅に、光聚仏頂、能破仏頂、尊勝仏頂、白傘蓋仏頂の以上八尊が中尊を囲んでいる。この内、仏頂尊は六尊で、能破仏頂を除けば胎藏系仏頂尊に見られた。同経には像容の説明が欠けているので尊名のみから判断すれば、胎藏系仏頂尊が主流となっている。

同経の仏頂曼荼羅は、新訳及び漢訳に説かれる曼荼羅と構造は同じであるが、外四供養妃及び賢劫十六尊が説かれていない。⑤

⑥文殊師利法界秘密自在曼荼羅儀軌(北京Nos.3416)

同経の仏頂曼荼羅の中尊は四面八臂、白黄色の獅子座に坐す文殊菩薩である。この中尊を囲む第一重八葉蓮弁上に八仏頂尊が説かれる。(表Ⅱ参照)即ち東方より順に、大仏頂、白傘蓋仏頂、光聚仏頂、最勝仏頂が、東南等四隅に、尊勝仏頂、上行仏頂、大上行仏頂、勝仏頂の以上八尊である。同経には像容の説明は見られないので、ニシュパンナヨーガーヴァリー所説の像容を見ると、これら八仏頂尊の像容が全て、一面二臂、黄色で獅子座に坐し、右手に八輻輪を持して、左手を左脇に安ずると説かれている。(東北Nos.3141・125a⁶~125b⁴)(写真④参照)同経の仏頂尊は、尊名に於いては、大仏頂、上行仏頂、大上行仏頂の三尊を除く(五仏頂は、胎藏系仏頂尊であり、上行、大上行仏頂の二尊も胎藏系の広

<図像対照表>

(宝相樓仏像群の諸尊は胎藏系仏頂尊の像容に対応する持物をポイントとして撰択している。
蓮華、金剛、宝幢、威光各仏頂は悪趣清淨曼荼羅に見られる諸尊である。)



無量音声仏頂

発生仏頂

広生仏頂

摧碎仏頂

最勝仏頂

光聚仏頂

勝仏頂

白傘仏頂

(胎藏図像)



無量声仏頂

高仏頂?

大転輪仏頂

摧碎仏頂

最勝仏頂転輪

光聚仏頂

勝仏頂転輪

白傘蓋仏頂

(現図)



無辺音菩薩

蓮華仏頂?

金剛仏頂?

宝幢仏頂

尊勝菩薩

威光仏頂

仏頂菩薩

白傘蓋菩薩

(宝相樓仏像群に見られる仏頂系諸尊)

大、極大仏頂に対応する事が考えられる。とすれば、同経の仏頂尊も尊名から見ると、胎藏系仏頂尊を継承している事がわかる。

同経の仏頂曼荼羅が、アルチ寺大日堂西壁に描かれている。④（写真②参照）全体は方形四重の曼荼羅で、第二重の方形が九分され、その中央の方形に中尊と八仏頂尊が描かれている。他の四方と四隅の方形には、金剛界四仏と四明妃があり、各四仏のまわりを、金剛薩埵を初めとする十六大菩薩が囲んでいる。金剛界四仏及び四明妃は、いずれも四面八臂の像容をなしている。第三重には、四隅に内の四供養妃、四方四門に四摂菩薩、各四方に十二尊ずつ計四十八尊の諸尊が描かれている。第四重は、普賢菩薩を初めとする賢劫十六尊と、四方と四隅に十忿怒神が描かれている。

㊦吉祥金剛心藏莊嚴大本統王（金剛道場莊嚴軌）

（東北Nos.490,北京Nos.123）

同経の八仏頂尊は、中尊の毘盧遮那を囲む第一重八葉蓮弁上に説かれる。（表Ⅱ参照）即ち、東方第一尊より、持輪仏頂、光聚仏頂、白傘蓋仏頂、最勝仏頂の四仏頂と、東南等四隅の、光照仏頂、上行仏頂、大上行仏頂、大勝仏頂の以上八仏頂尊である。この内、持輪、光照、大勝の三仏頂が初出であるが、光照は光聚仏頂と、大勝は尊勝仏頂と対応すると考えられる。つまり、同経の八仏頂も持輪仏頂を除けば、他は全て胎藏系仏頂尊名を継承している。但し同経には像容の説明がなく、胎藏系仏頂尊の像容を継承しているのか、あるいは先の文殊師利の曼荼羅の八仏頂尊の様に、全て同じ像容になっているのか定かではない。

同経の仏頂曼荼羅は、中尊を毘盧遮那とする四重



（写真②）（アルチ寺大日堂西壁右のダルマダーツ・ヴァーギーシュヴァラの曼荼羅）



（写真③）（中尊ダルマダーツ・ヴァーギーシュヴァラ）



（写真④）（中尊を囲む八仏頂尊は全てこの像容）である。

の曼荼羅である。第一重の八仏頂尊を囲む第二重には、金剛薩埵を初めとする十六大菩薩が説かれる。

また第三重の四隅には内の四供養妃、第四重の四隅には外の四供養妃とその四方四門には四摂菩薩が配せられる。さらに普賢菩薩を初めとする賢劫十六尊が、四尊ずつ四方に描かれる。⑥

以上チベット訳諸經典に説かれる仏頂尊及び仏頂曼荼羅を見てきた。以上の經典が仏頂尊を説く全てではないが、少なくとも(Ⅰ)で見た漢訳諸經典との比較をすると次の様な点が注目される。

①新訳の悪趣清浄曼荼羅を除くチベット訳經典に説かれる仏頂尊は、漢訳諸經典で説かれる仏頂尊(胎藏系仏頂尊)の尊名を継承している。但し、無辺音声仏頂は大日経を除いてはチベット訳に全く説かれていない。

②胎藏系仏頂尊名を継承しながら、それらの像容が全く同一となっている仏頂曼荼羅や、金剛界四仏の像容の変容である仏頂尊と、尊名は異っていても、胎藏系仏頂尊の像容を持つ仏頂尊が混在する仏頂曼荼羅は、像容の変化が著しく、特異である。

③大日経を除く仏頂曼荼羅は全て金剛頂系の曼荼羅であり、釈迦牟尼、毘盧遮那を中尊とするのに代って、文殊菩薩を中尊とする曼荼羅も見られた。

〔Ⅲ〕結び

以上、漢訳、チベット訳諸經典に説かれた仏頂尊を、曼荼羅を通して眺めてきた。〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕で要約したものをまとめて結びとしたい。

漢訳諸經典に説かれる仏頂尊は、一字仏頂輪王経、不空羂索経、大日経を中心とした胎藏系仏頂尊と総

称する事ができる。これらの曼荼羅も胎藏系曼荼羅が主流であり、その中尊も、釈迦牟尼か毘盧遮那のいずれかであった。それに対してチベット訳諸經典では、胎藏系仏頂尊の尊名を継承しつつ、像容が全て同一となったり、金剛界四仏の変容と思われる仏頂尊が生じたりしている。また曼荼羅も大日経を除けば金剛頂系仏頂曼荼羅であり、中尊には、釈迦牟尼、毘盧遮那と共に文殊菩薩が現われている。こうした系譜からも明らかな様に、アルチ寺の二種の仏頂曼荼羅の内、釈迦牟尼を中尊とする悪趣清浄曼荼羅は、金剛頂系仏頂尊の出現を知る上で注目されるし、文殊室利の曼荼羅では、胎藏系仏頂尊の像容の著しい変化を知る上で特異な存在と考えられる。さらにこれらが、瑜伽タントラの代表的仏頂曼荼羅の図像例であると考えるとき、今さら乍ら、アルチ寺の曼荼羅群の貴重性を痛感せざるを得ない。

注 ①「第二回高野山大学チベット仏教文化調査団報告書」1979年、高野山大学チベット仏教文化研究会。及び「密教学研究第11号」1979年、日本密教学会。

② 石田尚豊「恵果、空海以前の胎藏曼荼羅について」東京国立博物館研究紀要1号。

③ 酒井真典「悪趣清浄軌について」密教文化123号に藏漢対照の研究がある。

④ アルチ寺以外では、チャチャプリ寺、小スムダ寺に見られた。

⑤ 酒井真典「八幅輪曼荼羅について」密教文化87号に和訳研究がある。

⑥ 同上。

(表Ⅱ)〔チベット訳諸經典に説かれる仏頂尊の像容一覧表〕

悪趣清浄軌 (東北Nos.485.が仏説大乘觀想 曼荼羅淨諸惡趣經に相当する)			文殊師利法界秘密 自在曼荼羅儀軌			吉祥金剛心藏莊嚴大本統王 (金剛道場莊嚴軌)					
東北Nos.483.北京Nos.116			東北Nos.485.北京Nos.117			北京Nos.3416			東北Nos.490.北京Nos.123		
釈迦牟尼			釈迦牟尼(黄色,転法輪印)			文殊師利(白黄色 四面八臂)			毘盧遮那(定印)		
東	金剛手大力	像容の説明 なし	金剛仏頂	白色 触地印	大仏頂	黄色 右-八幅輪 左-安脇	持輪仏頂	像容の説明 なし			
南	勝仏頂	"	宝仏頂	青色 施願印	白傘蓋仏頂	"	光聚仏頂	"			
西	転輪王	"	蓮華仏頂	赤色 定印	光聚仏頂	"	白傘蓋仏頂	"			
北	最勝仏頂	"	羯磨仏頂	緑色 施無畏印	最勝仏頂	"	最勝仏頂	"			
東南	光聚仏頂	"	威光仏頂	白赤色 右-日輪 左-腰	尊勝仏頂	"	光照仏頂	"			
西南	能破仏頂	"	幢仏頂	赤黒色 宝幢	上行仏頂	"	上行仏頂	"			
西北	尊勝仏頂	"	利仏頂	青色 右-劍 左-經典	大上行仏頂	"	大上行仏頂	"			
東北	白傘蓋仏頂	"	白傘蓋仏頂	白色 白傘蓋	勝仏頂	"	大勝仏頂	"			

金剛界三十七尊立体曼荼羅について

—アルチ寺・マンギユ寺・小スムダ寺を中心として—

小林 暢 善


アルチ寺は、金剛界曼荼羅、悪趣清浄曼荼羅、文殊室利法界秘密自在曼荼羅等、瑜伽タントラの曼荼羅の宝庫である。そしてここに紹介する金剛界立体曼荼羅は、大日堂正面にある四面定印の毘盧遮那を中尊とし、その周囲に四波羅蜜菩薩を、両側壁には金剛界四仏を塑像として配し、十六大菩薩等の壁画を加えて金剛界三十七尊と賢劫十六尊による立体曼荼羅を構成している。

またアルチ寺と並んで、リンチェンサンポの創健と伝えられるマンギユ寺大日堂にも、アルチ寺と同様に、定印の毘盧遮那を中尊とし、中尊を囲む八女尊を四仏と共に塑像となし、十六大菩薩等の壁画を配して、立体曼荼羅を構成している。

さらに小スムダ寺もリンチェンサンポの創建と伝えられるが、同じく大日堂に、転法輪印(?)の毘盧遮那を中尊とし、四仏、四波羅蜜十六大菩薩等の三十七尊を、全て塑像によって構成した立体曼荼羅が見られる。

以下、各寺院の立体曼荼羅の概要を述べ報告したい。

① アルチ寺大日堂の立体曼荼羅(写真①参照)

大日堂は、①の如く凸型になっている。この突

出した部分の中央壁に、四面定印金色の毘盧遮那の塑像がある。そしてその周囲に四波羅蜜菩薩の塑像が配されている。それら女尊の色相は、東南等の四隅に於いて順に青色、黄色、赤色、緑色となっている。また側壁である①面には、下段に青色、触地印、象座の阿閼如来が、上段に黄色、施願印、馬座の宝生如来の塑像がある。一方②面には、赤色、定印、孔雀座の阿弥陀如来が上段に、緑色、施無畏印、金翅鳥座の不空成就如来が下段に、いずれも塑像として配されている。さらに①②両壁には壁画が見られる。①面では阿閼如来の下方に四尊ずつ二段となって八尊があり、阿閼と宝生如来の両側には、七尊ずつ計十四尊が配されている。②面も同様である。阿閼如来の下方八尊及び不空成就如来の下方八尊、計十六尊は各四仏の四親近である十六大菩薩となっている。因みに阿閼如来の下方の八尊の内、下の段の右より、金剛薩埵、金剛王、金剛愛、金剛嬉続いて上の段の右より、金剛宝、金剛光、金剛幡、金剛笑となっている。②面の八尊も上の段の右より金剛法、金剛利、金剛団、金剛語、続いて下の段の右より、金剛業、金剛語、金剛牙、金剛拳の以上八尊が配される。

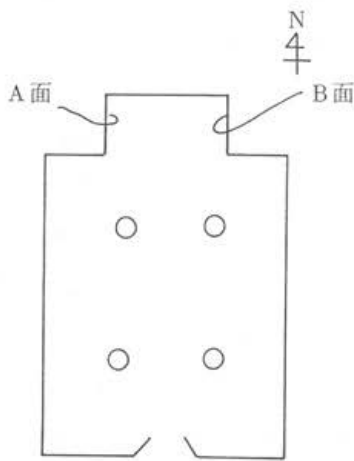
次に内、外四供養妃も、両面にわたって描かれて

いる。まず内の四供養妃は、A面の右側縦七尊の下から二番目に金剛嬉菩薩が、左側縦七尊の上から二番目に金剛曼菩薩が見られる。さらにB面の左側縦七尊の上から二番目に金剛歌菩薩を、右側縦七尊の下より三番目に金剛舞菩薩を配している。外の四供養妃も各々の内四供養妃に並んで描かれている。

四摂菩薩は、A B両面の縦七尊の最も下に見られる。また、続いて白色で金剛を持す尊と、黄色で宝珠を持す尊と、赤色で蓮華を持す尊、緑色で羯磨を持す尊が各四尊ずつ、計十六尊があり、これらは、同じアルチ寺三層堂二階の金剛界曼荼羅の下方に見られる十六尊と同じもので、賢劫の十六尊と考える事ができる。以上の如く、金剛界三十七尊と賢劫十六尊によって立体曼荼羅が構成されている。内外の四供養妃及び賢劫十六尊の配置に不規則性を感じるが、四部族の色によって同色同士を組み合わせている。大日堂には、他の壁面に金剛界曼荼羅（智拳印の毘盧遮那を中尊）が二つ、文殊室利法界秘密自在曼荼羅（四面八臂の文殊菩薩を中尊）が一つ、悪趣清浄曼荼羅（普明と釈迦牟尼を中尊）が二つ、さら

に般若波羅蜜曼荼羅があり、計六個の曼荼羅を有す。即ち大日堂は、定印のビルシャナを中心とする立体曼荼羅と各種曼荼羅によって構成される、一大仏教宇宙空間と考えられる。但し、各種曼荼羅の関連性については今後の研究課題となろう。

また、定印の毘盧遮那と悪趣清浄軌に典拠があるときれる普明(Sarvavid Vairocana)は同じ像容であるが、悪趣清浄曼荼羅における四仏は、東方・悪趣清浄王（白色、定印、象座）に初まり、東南等の四隅も四明妃となっている点で、以上の立体曼荼羅と構成が異っている。しかしラダックの他の寺院（ワンラ、ラマユル寺）や、ザンスカールのチューチーシャルゴンパに於いて、定印の毘盧遮那を中尊とし、金剛界四仏を四方に配する曼荼羅が見られる。この事は、定印の毘盧遮那と金剛界三十七尊による曼荼羅の普及を意味し、この立体曼荼羅を説く経軌が存在するのか、あるいは真実撰経の説く智拳印の毘盧遮那と交替しているのに過ぎないのか。この点も研究余地がある。さらに普明の曼荼羅との関連も注目される所である。

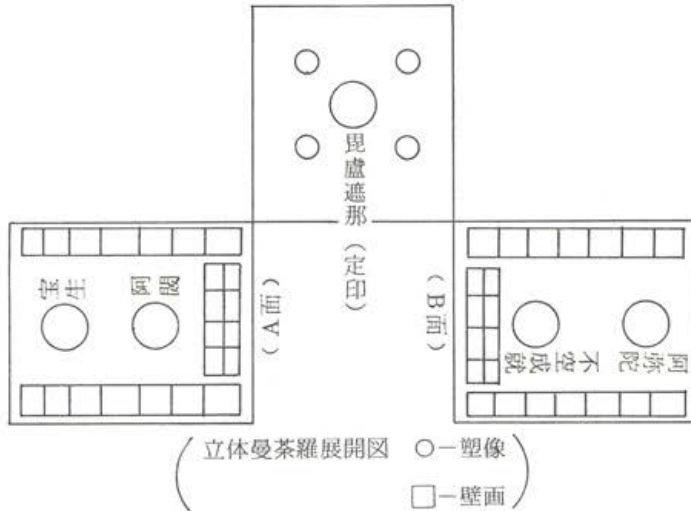


(アルチ寺大日堂平面図)



(写真①)

(図1)



② マンギユ寺大日堂の立体曼荼羅(写真②参照)

次に同じくリンチェンサンポの創建と伝えられるマンギユ寺の立体曼荼羅について述べたい。大日堂は、アルチ寺の半分程の広さである。アルチ寺と同様、凸型の堂で、その突出した部分に立体曼荼羅が見られる。堂の他の壁には、大曼荼羅が数個描かれている。それらはアルチ寺大日堂の曼荼羅と類似するものであるが、雨漏りによるいたみが激しい。正面中央の立体曼荼羅は、アルチ寺と等しく、四面定印の毘盧遮那を中尊とし、金剛界四仏も同様に配してある。異なる点は、中尊の周囲に八女尊の塑像があり、また内、外四供養妃や賢劫十六尊の配置が相違している。またかなりいたみがひどく、像容の細かい点が判別しがたいが、阿闍如来と不空成就如来の下方には、アルチ寺と同様に十六大菩薩の壁画があり、総合的に見て、マンギユ寺の立体曼荼羅は、アルチ寺のヴァリエーションと考える事ができよう。



(写真②)

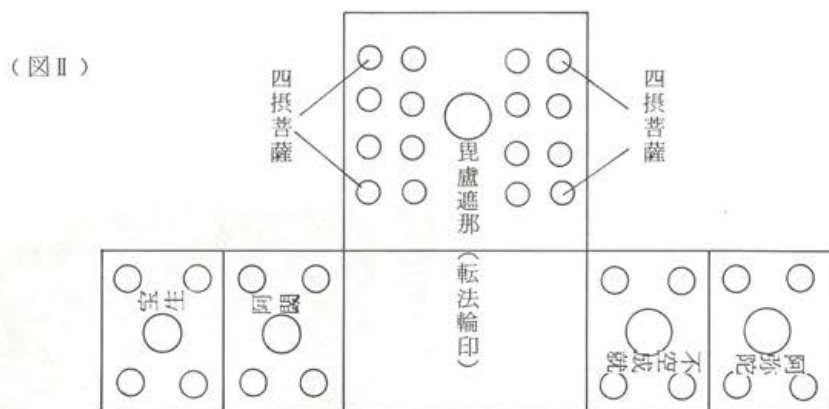
③ 小スムダ寺の立体曼荼羅(写真③参照)

小スムダ寺もリンチェンサンポの創建と伝えられる。現在ある建物で残っているのはこの大日堂のみである。その大きさは、マンギユ寺大日堂とほぼ等しい。但し、両脇に弥勒と観音菩薩を祭る小堂が附属している。この堂の形もやはり凸型で、周囲の壁画には曼荼羅や千体仏、観音、文殊といった諸尊が描かれている。曼荼羅の一つは、アルチ寺大日堂と同じ文殊室利法界秘密自在曼荼羅である。これは創建当初のものと考えられるが、他の二つの曼荼羅は後世描き変えられた新しい曼荼羅である。

小スムダ寺の立体曼荼羅は、まさしく立体的に全

尊が塑像によって構成されている。中尊は、四面、金色で転法輪印に似た印をなす毘盧遮那である。その周囲は図Ⅱの如く、十二の女尊と四摂菩薩と思われる展左の姿勢の男尊が見られる。両側の壁面には、金剛界四仏がアルチ寺、マンギユ寺と同様に配され、十六大菩薩は、各四仏の周囲に四尊ずつ見られる。内、外の四供養妃と四波羅蜜は、毘盧遮那の周囲の

十二女尊に相当している。従って小スムダ寺の立体曼荼羅は、完全な金剛界三十七尊立体曼荼羅と明言できる。また、アルチ寺やマンギユ寺の定印の毘盧遮那を中尊とする立体曼荼羅に続いて、転法輪印の毘盧遮那を中心とする小スムダ寺のものは、それ故に貴重な存在例である。



(小スムダ寺金剛界三十七尊立体曼荼羅展開図)



(写真③)

以上アルチ寺、マンギユ寺、小スムダ寺の各大日

堂に見られる金剛界立体曼荼羅の概要を述べてきた。次に以上の事を要約して結びとしたい。

- ①三寺共にリンチュンサンボの創建と伝えられ、堂の形式、堂内の曼荼羅の壁画は類似している。
- ②立体曼荼羅の中尊は、アルチ寺とマンギユ寺が四面、定印の毘盧遮那で、小スムダ寺で転法輪印の毘盧遮那であった。またアルチ寺マンギユ寺は、中尊、四波羅蜜、四仏は塑像で他は壁画となっているが、小スムダ寺は完全な塑像による金剛界三十七尊立体曼荼羅を構成している。
- ③アルチ寺、マンギユ寺の立体曼荼羅の中尊である定印の毘盧遮那と、悪趣清浄曼荼羅の中尊としての普明の関係については、定印の毘盧遮那を中尊とし、金剛界四仏、十六大菩薩等より構成される大曼荼羅の壁画が数例存在した事より、同体か否

か、立体曼荼羅を説く経軌の存否と共に研究の余地がある。

- ④日本に見られる立体曼荼羅は、あくまで平面上に築かれるものであるが、ラダックの場合は壁面を

利用して、まさしく立体的に空間を利用している。

以上のとおり、金剛界立体曼荼羅について調査結果を報告しておきたい。

ラダックの密教儀礼

—フィヤン寺とヘミス寺の仮面舞踊祭—

塚本佳道

昨年の夏、フィヤン寺では、ちょうどディグン・カギユ派開創八百年祭が催され、普通は冬季の間にしか行なわれない仮面舞踊の祭りが特別にそのプログラムの一部として組み込まれて、幸運にも我々はラマ僧が守護神等の面と衣装を身につけた踊りを見る機会を得た。これは、1978年9月、フィヤン寺にディグン・カギユ派管長、ディグン・ツェツァンリンポチェ(1946.6.4生)が、1975年にチベット本国より奇跡的な脱出に成功し、フィヤン寺に入られた事に始まる。ディグン派開祖、ディグン・キョバ・ジクテン・ゴンポは、800年前にチベットのディグン寺を創建され、ディグン派の一大宗派を開かれた。そのお生れになった旧暦の6月4日(昨年、7月28日)を選び特別に開催されたものである。ところでチベットでは、旧暦6月4日を仏陀の初転法輪の日ともされる。

その八百年祭の概要は、7月21日には高さ実に約16mという開祖ディグン・キョバ・ジクテン・ゴンポが描かれている奉納大タンカの開眼供養に始まり、7月26日と7月27日の二日間は、ディグン・カギユ派の守護神たちの仮面舞踊祭があった。そして開祖の誕生日、7月28日には、ラダック中の各山のリンポチェや大臣、役職関係者、軍隊の主要

メンバーも招待されて盛大なセレモニーがなされ、各山のリンポチェの祝辞やディグン・ツェツァン・リンポチェの挨拶があり、後にインドのダラムサーラに住む子供達の歌と踊りなどの種々の催しがなされた。そして7月29日には、ディグン・ツェツァン・リンポチェによる灌頂の儀式をもってすべての行事を終えたのである。

ところで、ヘミス寺(ドクパ・カギユ派)では、毎年バドマサンバグァの誕生日、旧暦5月10日(昨年7月4日)を含め前後三日間、密教儀礼の舞踊と祈りによって祭りが催される。昨年もその誕生日にあり、先発隊として先に現地に行き調査にあたった。

さて今回は、以上のヘミス寺とフィヤン寺に於て行なわれた仮面舞踊祭について特にその内容を紹介したい。まずその祭りの歴史であるが、その起源はボン教や初期のチベット密教にすでに見い出される注①という。フィヤン寺の踊りについては、ディグン派の25代ヘッド、クンチョク・ティンレイ・ザンポ(1656~1718 A.D.)によってそのプログラムが構成され、ディグン・カギユ派独自の伝説として伝えられて来た。ヘミス寺の踊りについては、その詳しい起源は確かでない。ところで、ネパール、ダージリン、カリンポン、ガントクにあるチ

ベット寺院も同様に11月～2月中旬までの異なる日に行なわれる。注② また、ラダックのラホールのカンサル(Kanggsar)の近くにあるゲムル(Gyemur)寺では、一年中のもっとも適した日、パドマサンバヴァの誕生日にあたる日に行なわれたことが1952年の調査で紹介されている。注③ また、ネパールのチベット寺院でもっとも美しく荘厳なタンポチェ寺では、1930年から始まり、その近くのタミ寺では、1940年から仮面舞踊の祭典が始まったとされる。注④ さらにその日時を選定は、チベット暦の正月前後の満月の日などに行なわれる場合が多く、また宗教的な特別の日、すなわちパドマサンバヴァの誕生日やツォンカパの命日等を選んで行なわれる。注⑤

ところで、その宗教的な踊りの理由は、悪魔を払い、特殊な守護者である神とイダムを認めるために我々に感覚的にその存在を教えることである。その上、これらの神によって、多くの聴衆が色々な災難に打ち勝つための力となり、ふりかかってくる悲劇や現在や未来の生活の欠点を克服するための助けとなる。もし死が近づいた時に、これらの守護神と踊りを思い出す事が出来るならば、これらの神は人々を三つの崇高な世界(六道輪廻の教えに従って、神の領域と阿修羅の領域と人間の領域)に化身させる。

さっそく、その踊りの内容を紹介します。まず、フィヤン寺とヘミス寺の仮面舞踊祭に行なわれたプログラムを示し、そこには、登場する守護神たちの踊りの名前と時間経過をあわせて記したい。各々の踊りの説明は、フィヤン寺の場合は、ディグン派管長と同寺のトクデン・リンポチェより説明してもらったものである。またヘミス寺の場合もヘミス寺の高

僧に聞き、後でその内容を在ネパールのケツン・ザンボ先生より確かめていただいたものである。

仮面舞踊祭のプログラム

フィヤン祭(初日)

<タイトル>	<人数>	<時間>
(1) タイコの舞 (セルケムという供養あり)	20人	6:37~8:50
(2) ゴンボの舞 ゴンボとその4人の眷属 (①ゴンボの母, ②鳥, ③鳥, ④鳥 las kyi mgon po bya rog gdon)	5人	9:19~10:00
(3) アチの舞 アチとその4人の眷属(① dam tshig mkhah hgro ② ye ses mkhah hgro ③ sa za mkhah hgro ④ dban gyi mkhah hgro)	5人	10:01~10:37
(4) 護法の舞 A. ①gzah ②ma mo ③dam can ④ha ra B. ①rnam sras ②than lha ③tshans pa ④par la lha ⑤sog ra b tsan	9人	11:06~11:59
(5) ゲルボと護法の舞 フィヤン祭(二日目)	2人	13:30~14:15
(1) 阿蘭梨の舞	2人	6:30~8:00
(2) ヘールカの舞 ヘールカとその眷属(①鳥 bya ②ブタ phag ③フクロウ	5人	8:30~9:00

hug ④狼spyan)			(7) トゥルダクの舞	4人	15:30~15:55
(3) しかの舞	2人	9:08~ 9:30	(8) 四摂菩薩の舞	4人	"
śa ba pho と śa ba mo			(9) ヘーカルの舞	5人	16:00~16:20
(4) 水牛の舞	2人	9:30~10:00	(10) ツォクレンの供養	5人	16:30~17:00
(5) ヘールカの舞	1人	10:17~10:30	(11) キンパの舞	10人	17:00~17:30
(6) 阿闍梨の舞	2人	10:51~11:00	ヘミス祭(二日目)		
(7) 帰りの舞	19人	11:40~13:00	(1) トォムワトゥクと13人の	14人	9:30~ 9:43
ヘールカ(3人), bkah brgyad(8人), 水牛(3 人), 鹿(3人), srog grub nag mo, śan pa mar nag。			ツァムツェパの舞		
(8) ソルチャム	8人	13:50~15:00	(2) ゲェソルの供養	ラマ僧 全員集 会堂に て	12:00~14:30
(9) 阿闍梨の舞	2人	15:15~15:48	(3) キンパの舞	10人	15:05~15:20
(10) テルチャム	18人	16:24~17:36	(4) ゴンポをはじめとする守 護神の舞	18人	15:30~15:55
(11) ルンナクツップブッチャム	18人	17:40~18:00	(5) セルケムの供養	4人	16:00~16:30
ヘミス祭(初日)			(6) 四摂菩薩の舞	4人	16:35~16:45
(1) ハシャン・ハトゥクの舞	2人	11:40~11:45	(7) 忿怒尊の舞	4人	16:45~17:00
(2) 黒い帽子をかぶったラマ 僧の舞	13人	11:45~12:00	(8) トゥルダクの舞	4人	17:00~17:15
(3) グル・パドマゲルポの舞	16人	12:05~12:20	(9) ハシャン・ゲルポとハト ウクの舞	5人	17:17~17:40
(4) グル・パドマサンバヴァ の化身の舞	44人	12:30~13:40	フィヤン寺第一日目		
パドマサンバヴァ, 8人の 化身, 7人の施主, 16人の ダキニ, dpah bo(4人), dpah mo(4人) snom phrug(2人) sen phrug(2人)			(1). タイコの舞(rna hcham)	この踊りは, 中央チベットのディグンで為される ために使用されたもので, 同じ方法で行なわれる。 この特殊な踊りは, ウバセル・ヨーギニマ(hod pa ser yo gi ni ma)に受け継がれた後, 慣例はシラカ ラによって行なわれた。彼は順次にディグン・ゲェ ルワ・リンチェン・ブンツォク(1509-1557 A.D.)に通し, 偉大なマハーバンディタ・リクジ イン・チュウキータクパ(1595-1659 A.D.)	
(5) 護法の舞	10人	15:00~15:20			
(6) セルケムの供養	3人	15:30~15:55			

のために以来この大変よい日にとぎれなく引き続けられている。この踊りは、悟りと涅槃に到るため20の違ったレベルを描写する。手にタイコを持ち踊る所からこの名前がつけられた。踊る中を他の僧侶が中央に供養台を置き五供物が供えられ、その後茶台が設置される。そして五人の僧侶が供養台の後に立ち、ハチ、タイコ、経典を持ちセルケム（ gser skyems ）の供養がなされる。（写真①参照）



（写真①）タイコの舞。中央でセルケムの供養がなされている。

（2）ゴンポの舞

次は、四手のゴンポの踊りと呼ばれている。この特殊なゴンポは、イダム・テェチョク（ yidam de chog ）の荒々しい表明である。ゴンポは、一切の仏から伝授をうけ、第十番目の位の菩薩になり、千体仏の教えを守る守護神のように定められた。ゴンポの業の化身は、マハーカーラ（ Mahākāra ）である。彼はブダガヤ、ナーランダ大学、ヴィクラマシーラ大学、南インドのナーガルフンダ山の近くに住み、これらの色々な場所で仏教徒信仰のための守護神になった。何人かの不信者が仏教徒に反抗した時、ナーガルジュナはマハーカーラを妨害の災難から守るために送り、彼は壮烈な戦いによってすべての異教徒に打ち勝ち、他の人を仏教に転換させた。黒い

出現で、四手のゴンポは法身（ Dharma-kāya ）を表わし、四手は四つの業の成就を表わす。最初の右上手はくだものを持ち、健康を満たすことを望むシンボルである。右下手は剣を持ち、仏教徒の信仰のためにすべての妨害を撃破するためのものである。左上手は彼が悪魔の血を飲むことを示す血で、頭骸骨をかかえている。左下手は三鉗杵をかかえており、彼が三つの身（ kāya ）を含んでいることのシンボルである。四つの牙は悪魔の根絶を示し、三つの目は十方向のすべてを見ることの出来る能力を持っている。彼の化身からすべての予言の伝達を象徴する。頭のもつれ髪は、すべての神の征服を表わし、へびはすべての龍の征服を象徴し彼の頭に巻きついた。三鉗杵とダマルは、すべてのダキニの征服を表わす。（写真②参照）



（写真②）ゴンポの舞

（3）アチチュウキトオルマの舞

アチチュウキトオルマ（ a phyi chos kyi sgrol ma ）は、仏教の主たる守護神の一人であり、特に

ディグン・カギユ派の至高な守護神の神のように尊敬され、11Cに生まれ、父はネエンジョルバル、母はトゥリサ・ダルジャンであった。早年にカムのツウコル村に行き、アミツクルティム・ギャツォと結婚し、ディグン・カギユ派の開祖キョバ・ジクテン・ゴンボの偉大な祖母になった。右手には輪廻と涅槃をはっきりと心に描くようにするため、また存在する六王国の自然を理解するために、彼女の能力を表わしている銀の鏡を持っている。左手には、大切なものを達成する望みを含んでいる頭骸骨を持つ。すなわち、彼女の能力がすべての感覚のある存在の願いを遂行するためと同様に、すべての仏に供養することの象徴である。彼女は、輪廻の世界からすべての感覚ある存在を自由にするために、彼女の能力を表わす白い法衣を身に着けており、それによって彼らを悟りの道にセッティングしている。月の光のような体は、彼女が千体仏の教えを守護していることを表わす。彼女もまたディグン・カギユ派のグルと彼らの伝説を守護する。顔は三つの身(kāya)の成就を象徴し、三つの目は法身を現わす。五仏の悪相は、五つの錯乱の浄化と五つのヤナ(Yana)の汚名を現わす。彼女をとりまくもつれ髪は、彼女が輪廻から存在する五王国を自由にさせたことを示す。

(写真③参照)



(写真③) (セテンという楽器隊の入場が続くア)
(チチュウキトォルマの舞)

(4) 護法の舞 (bkah srun hcham)

最初に登場するのは、偉大な聖者ラフラである。仏陀の教えを守護し従者の望みを遂行する。第二番目は、ズドク・ザンモの化身である荒々しいエーカ・ザ・トゥリマである。第三番目は、ダルマチェン・ドルジェ・ラクパで、ワニの顔をした人は、ザル・ハラ・ナクポである。そしてしばらく間をおいて出てくる最初の踊り手は、毘沙門天である。毘沙門天は富の神であり、きびしい貧苦の問題を解決する。次の四人の踊り手は、バルラハ、ソクラツェン、チュブテン・ルワン、テルドン・メンマである。これらの四人は、ディグン・キョバ・ジクテン・ゴンボの教えの伝説的な守護神である。次はまた教えの守護神であり、ナムギャル・カルポとして知られている。次は梵天で、富の神である。最後に登場するのは、リンネエンチェン・タンラであり、すべての仏の化身で全世界的な神の主である。

(5) 護法の舞

次は、護法(Dharma-pāla)の父母の踊りである。父は、仏陀によってクンガスンと名づけられ、彼らは仏陀の教えを守護するために作られた。次いで、男女のサル(sprihu pho mo)が現われ、二人の阿闍梨とたわむれる。その頃、左方の群衆の中を分けて大タンカが運ばれてくる。先頭に大きく長い傘(gdugs)数本と勝利幢(rgyal mtsan)数本が並んで中庭に入ってきて、その後ドゥン、ギャリン、ルモ等の楽器をしたがえ、十数人の僧侶がかかえる大タンカが入る。そして群衆のいっせいのかけ声で大タンカが釣り上げられ、その前に僧侶が座し読経する。(写真④参照)



(写真④) (開祖ディグン・キョバ・ジクテン)
(・ゴンボの大タンカを見る群衆。)

(6) ゲルボと護法の舞

ゲルボと護法の二人があらわれる。赤面をつけたゲルボは、右手に鉄鉤 (lcags kyu), 左手にシャクバ (shags pa) を持す。護法はうす赤の面をつけ、右手にドゥン (gdun), 左手にティグク (gri gug) を持する。

フィヤン寺第二日目

(1) 阿闍梨の舞

先頭にセテン (se phren) と言われる楽器群が入場する。それらは、まず最初に阿闍梨がはた (hchar dar) を持ち、次いで銅号筒 (rag dun) ニペアー (四本), 笛 (rgya glin) ニペアー (四本) 香炉 (spos phor) 三ペアー (六コ) が続く。そして中庭の場内を一周して引き上げる。これらのセテンの意味は、次に登場する守護神や仏たちの讃嘆とともに観衆に対するしらせの合図ともなる。守護神たちの踊りの終わった後に再度登場し、場内を一周して引き上げる役目がある。さてこの場面の踊りは、二人の阿闍梨があらわれ、彼らはハツァンバとギャチンの化身である。取りたててこの阿闍梨の踊りには意味を持たないが、サーカスのピエロの役のよう

に観衆を笑わして楽しませてくれる道化役の役割をなす。水をかけあったり、たたきあったり見ている大変おもしろい。(写真⑤参照)



(写真⑤) 阿闍梨の舞。

(2) ヘールカの舞

次は、ヘールカとその眷属であるゴマジィ (sgo ma bshi) の踊りである。すなわち、ゴマジィとは、狼、フクロウ、ブタ、鳥の面をつけた四人である。狼は「愛」を示す化身であり、フクロウは「あわれみ・同情」、ブタは「喜び」、鳥は「平静・おちつき」を示す化身である。

(3) しかの舞

(4) 水牛の舞

二人の男・女の水牛の面をつけた踊りは、ヘールカの精神的な心の化身を象徴する。

(5) ヘールカの舞

(6) 阿闍梨の舞

(7) 婦りの舞 (log hcham)

この場面では、合計19人の踊り手が登場するが、その中にカゲェ (bkah brgyed) といわれるもっとも重要な意味をもつ8人が出る。その8人とは、ジャムペェク (hjam dpahi sku), パドマスン (phadma gsun), ヤンダクトック (yan dag thugs), ブルパティンレェ (phur pa phrin las), ドッチ

ィユンテン (bdud rtsi yon tan) の仏たちと、ムッパタクガク (dmod pa drag snags), ジイクテン・チュウトゥ (hjig rten mchod bstod), マモトォン (ma mo h bod gton) の守護神たちの合計8人である。彼らは、仏陀の8つの教えを象徴的に示す。(写真⑥, ⑦, ⑧参照)



(写真⑥) カゲェといわれる8人の舞



(写真⑦) カゲェといわれる8人の舞



(写真⑧) カゲェといわれる8人の舞

(8) ソルチャム (gzor hcham)

ツァンバをねって作った死体 (ña bo) を中庭に用意する。そしてこのまわりをシャナク (shwa nag) という黒い帽子を身につけた8人の僧侶が何回となくまわり、各々の武器を手に持ち死体を破壊する踊りである。その武器とは、まず最初に敵を破壊するためのブルバ (phur pa) で死体を突きさし、次に鉄砲の玉のかわりにカラシナの種子 (yuns dkar) をなげてたたく。次は、刀剣の中に入っている赤い粉 (血を示す) を死体にふりかけ、さらに別の刀剣に入っている黄の粉 (骨の中にあるものを示す) をふりかけ、次いで青い粉 (水を示す) と緑の粉をふりかける。そして今度は、弓とやりを持ち死体を射る。最後は長剣 (ral gri) で死体をこなごなに切り裂く。そうすると、死体の中に入れていた動物の内臓が飛び出すというまことにグロテスクな光景にもあう。これらの行為は、死体についている悪魔、悪罪を取り除くための供養である。(写真⑨参照)



(写真⑨) (ソルチャムの一場面。左に置いてあるのがニャオという死体。)

(9) 阿闍梨の舞

(10) テルチャム (sgral hcham)

次は、(7)場面に登場した守護神たちが再度登場し、

彼らは前にこなごなに切り裂いた死体を左手に持っているトッパ (thod pa) の中に各々ねりつける。そして、それを持って踊りながら前にセルケムの供養がなされたトルマの周辺に集まり、トルマに向けて右手に持っているブルバ (phur pa) で左手のきざみつけた死体の一部をはらい落とす。次いで、ブルバを胸に両手で持ち、先を天に向けてしばらく舞う。これらの踊りは、肉体を殺してもその死体のもつ心は供養によって助けようとするものである。

(III) ルンナクツップブッチャム (rlung nag htshub bu hcham)

再度、前場面に登場した守護神たちが現われ、黒風の如くはげしく場内を一周して舞い引き上げる。

以上で二日間のすべての舞踊が終り、中央の供養台に供えられた供物やトルマで作られた本尊などすべて焼きつくされた。さて、以上の舞踊で気づく点を2~3あげてみる。まず、特に第一日目のプログラムは、ディグン・カギュ派独自の伝説の主要な本尊と守護神たちが登場し、彼らの衣装や持ち物、踊りにそれぞれ密教の教えの意味があり、観衆に見せる事によってその認識をより知らしめようとしている事が分かる。また、それらの本尊たちは、寺と信者をはじめ、全世界の悪魔をはらって平和を守り、かつ人々のもつ悪罪を滅する。第二日目の死体を破壊して供養する場面でより実感がわく。それは一種の護摩法に似た外供養そのものであり、その目的は息災護摩法に大変よく似ている。また、ラダック人にとっては、長く厳しい冬季の間の唯一の楽しみの大祭でもあろう。年に一度だけ行なわれる。

次に、ヘミス寺の仮面舞踊祭について簡単に紹介する。

ヘミス寺第一日目

(1) ハシャン・ハトックの舞

この踊りは、ハシャン・ハトックという大変な財産家で、寺に対してよくお世話をしたという中国人がおり、施主が布施を行なう事によって金持ちになると伝えられる伝説を示すものである。

(2) 黒い帽子をかぶったラマ僧の舞

この黒い帽子 (shwa nag) をかぶったラマ僧の服装が以前の古い密教僧の正装といわれる。(写真⑨参照) 13人あられ、円をつくりトルマを献ずる。

(3) グル・パドマゲルポの舞



(写真⑩) (パドマサンバヴァをはじめとする8人の化身の入場。)

(4) グル・パドマサンバヴァの化身の舞

次は、この祭りの主人公であるパドマサンバヴァ (蓮華生) の化身たちの舞である。パドマサンバヴァの伝記^{注⑥}によると、「法身阿弥陀仏は自らの舌から一乗の光が発せられて、udyanaのDhanakośaという湖に吸いこまれた。そこから一つのウドゥンバラ (蓮華) が生じて、その蓮華から生まれた御子が阿弥陀仏の化身でパドマサンバヴァのこの世にあらわれた最初のお姿である。」とされる。したがってパドマサンバヴァは阿弥陀仏の化身である。次に登場するパドマサンバヴァをはじめとする8人の化身は、パドマサンバ

ヴァの本生伝をもとにくり広げられる仏たちの舞いである。まず最初にパドマサンバヴァをはじめとする8人の化身が登場し、次いで16人のダキニ、7人のラダック人の施主が続いて登場する。そうすると施主達によって奉納されたカタと金品をラマ僧たちがパドマサンバヴァをはじめとする8人の化身に献じる。次いで、dpah bo (4人)、dpah mo (4人)が続いて登場し、パドマサンバヴァをはじめとする8人の化身たちの前で各々の踊りと讃歌がなされる。すると今度は、8人の化身たちが一人ずつ中央に出て各々の舞を披露するのである。そして最後に16人のダキニの舞がなされ、セテンという楽器隊を先頭に見いるラマ僧全員も立ってその退場を見送る。ところで、ヘミス寺所伝のパドマサンバヴァの伝記によれば、8人の化身とは次の如くである。湖の蓮華から生まれた姿から名前をつけられた①ツォケェ・ドルジェ。当時、南インドの王様であったサホル・ゲルポの名前よりつけられた②パドマ・ゲルポ。仏陀の世話をする人で、アーナンダで出家したとされることから③シャキャ・センゲェと名づけられた。またダキニに密教を教える④ロデン・チョクセェ。湖にあったツォペマ寺において、パドマサンバヴァが体に火を燃やし、その時の火は変化して水になり、水の中に花がさき喜んだといわれることから⑤パドマ・チュンネェと名づけられた。⑥センゲェ・タトォックは悪魔が信仰深くなりその弟子になることよりつけられる。また⑦ニマ・ウセルはパドマサンバヴァと外道が論争し外道が敗れ、その人たちがすべて弟子になったことよりつけられた名前。⑧ドルジェ・トォルックはパドマサンバヴァがチベットに行った時、その教えを弟子に伝えるために土の中にかくしたといわれることよりつけられた名前である。た

だその名前の由来は、他のパドマサンバヴァの伝記において少し異っている場合がある。注⑦ 他にも伝説では、その化身は12人になったり100人になったりしたといわれ、8人とは、そのもっとも有名な化身たちの名前である。

(5) 護法の舞

(6) セルケムの供養

黒い帽子をかぶったラマ僧が二人の従者を連れて祭壇の前に立ち、チャン(酒)と米を献じる。これは仏教の仏たちを讃美するために行なわれる。

(7) トゥルクダクの舞

次は、人間の骸骨の身なりをした4人のトゥルクダク(dur bdag)が現われる。彼らの義務は、死の神(Yama)を補助する役目であり、寺を守る神でもある。

(8) 四摂菩薩の舞

次は、金剛界曼荼羅37尊中の四門にも配する金剛鈎・金剛索・金剛鋸・金剛鈴の四菩薩が登場する。

(9) ヘールカの舞

悪魔を殺す5人のヘールカが現われる。

(10) ツォクレンの供養

(11) キンパの舞

天地を駆けつりまわる10人のキンパ(gin pa)の踊りである。

ヘミス寺第二日目

(1) トォムワトックと13人のツァムツェパの舞。

最初は、トォムワトック(khrom ba drug)と13人のツァムツェパ(mtshams bcad pa bcu gsum)の舞である。彼らは、人々を守り悪魔を追いはらう。

(2) ゲェソルの供養

いったん僧侶たちと信者は集会堂に入り、お堂の

中で特別にゲルポの供養 (sku l^hnahi rgyl gsol) が行なわれる。これは、信者が自分の持っている悪罪を滅してもらうためにゲルポに布施するためのものである。

(3) キンパの舞

再度、中庭に出て前日も登場したキンパの踊りがくりひろげられる。

(4) ゴンポをはじめとする守護神の舞

まず最初に、二人のラマ僧が中庭の中央にやって来て、地面に土で三角形の形を作り、その中にnri (འྲི) という文字を書き、さらにその上にニャオ (ñā bo) というツァンパで作った死体を置く。そして、しばらくすると、ゴンポをはじめとする守護神18人が登場し、その死体を取りまくようにながら舞う。

(5) セルケムの供養

次いで、黒い帽子をかぶった4人のラマ僧が死体のまわりに現われ、前の如くチャン(酒)と米を献ずる。

(6) 四摂菩薩の舞

(7) 忿怒尊 (sgo skyon) の舞

(8) トルダクの舞

四摂菩薩や忿怒尊たちが死体のまわりをとりまくように踊った後、前日も登場したトルダクが現われ、その内の2人が中央の死体を持ち上げると共に、あたかも死体にとりついて悪魔・悪罪をはらいのけるように、その土を足でけり上げながら舞うのである。

(9) ハシャン・ゲルポとハトックの舞

この祭りの最後に、ハシャン・ゲルポと5人のハトックがじゃれ合いながら登場し、すべての人が金持ちになるようにと願う踊りがなされる舞

踊りが終わる。

以上がヘミス寺の舞踊祭の内容である。ヘミス寺では、パドマサンバグァの誕生日を選んで毎年行なわれているためか。祭りの主人公にパドマサンバグァをはじめとする8人の化身の賛嘆の舞を特に強調しているのが特色である。しかしその主目的は、本尊や守護神たちの存在をより認識させ、本尊や守護神たちによって悪魔・悪罪をはらい、寺とその信者たちをはじめ全世界の人々が平和になるようにと祈願して行なわれる。これはフィヤン寺の祭りの場合も同様である。

ところで、チベット密教儀礼の研究には、多くの時間とねばり強い労力をかけた現地調査が必要であることを改めて切に痛感する。今回は、ヘミス寺とフィヤン寺のみの舞踊祭の調査であったが、さらにラダック地区の他の寺院も含め、シッキム、ブータン、カリンボン、ネパール等に行なわれる密教儀礼について広範な研究が望まれる。

注 ① MANI RIMDU NEPAL by MARIO FANTIN p. 18.

② 同上著 p. 18.

③ Some Remarks on the 'TERRIFIC DEITIES' in Tibetan 'DEVIL DANCE'. by P. H. POTT. 密教学密教史論文集 p. 270.

④ MANI RIMDU by LUTHER G. JERSTAD p. 72.

⑤ 同上著 p. 98.

⑥ 本学前学長中川善教授文庫の117章本。(U-rgyanのグル蓮華生の本生伝を詳しく書いたものでpadma bkahi than yig)の翻訳、

本学密教学科林由美子氏の昭和54年度卒業論文の研究による。

- ⑦ 同上の中川文庫本では、8人の化身のすべての名前の由来が記しては不在が、バドマ・チ

ュンネエやバドマ・ゲルボの名前の由来が異なっている。バドマサンバヴァの化身の問題については別の機会にゆずる。

ザンスカール再訪記

常 多 昇

一昨年に引き続き昨年もザンスカール地域を訪れる機会を得た。以下、日誌風に今回の行程と寺の紹介をしたい。

7/31(晴)朝7時には来るはずのトラックが来ない。探しに行くと運転手が雲がくれている。年若い運転手だったのでザンスカールへの難路に尻込みをしたか。代わりのトラックを探し夕方16:00すぎ、やっとカルギル出発。トゥンリまで2500ルピーの契約。21:30パニカルのP.W.D.ゲストハウスに着く。(昨年度地図訂正、道路はサンクまでスル川左岸、サンク先の橋で右岸に移り30分程走ったマンドン(?)から再び左岸にもどる)パニカル(スル)までは政府のバス便もあり、馬を雇うための基地でもある。今回はこの少し先のパルカチまでしか車が入らなかった。

8/1(晴)出発時にトラックがタイヤを溝に落とし全員で持ち上げる。9:30ゲストハウス発。岡山の登山隊が荷物と共に下山してくるのに会う。リエゾン・オフィサー死亡のため登山を中止したとのこと。途中次々に村人が乗り込んで来てトラブルがあった。カルギルからの便乗組以外はパルカチで

降ろす。シンモダンサで昼食。20:00ジュルド着、ここにもゲストハウスがある。去年は建設中だった。床にシートをひいて寝る。

8/2(晴)昨夜は冷えこみが厳しかった。運転手は風邪気味。8:00ジュルド発。ランドン・ゴンパでトゥンリからのトラックに出会う。人を満載していて、マナリから抜けてきた日本人2人が乗っていた。ゴンパでは、ちょうどダラムサーラから来ていたリンポチェにお会いする。ペンジラ峠もトラックで難なく越え、チブラで昼食。19:00トゥンリ村着。今回は今日の行程を馬と徒歩で6日間かけている。橋の側に新しくテントのレストランが開業。カルギルでたのんでおいた馬の用意もできていると連絡がある。カルシャのロンボも来ていて、彼のすすめにより、先にゾンクル・ゴンパへ行くことにする。ザンスカールは、ラダックのバクラ・リンポチェがやって来るという話で沸き立っている。我々が通って来た村々には歓迎の飾りつけ等が整い、ロンボも忙しいとのこと。夜、運転手と支払いについても、約束の値段に上乘せをする。

8/3(晴)8:30荷馬7頭を連れてトゥンリの

馬方2人が来る。橋を渡り対岸をもとの方向へ引き返す。馬1頭が暴走、荷をふりおとす。荷を積んだ初日にはよくあることだが幸い被害は少なかった。14:00トクタ着。風が強くてテントを張るのに苦労した。村の子供が手伝ってくれる。ザンスカール街道では子供や大人までアメ等をねだって閉口するが、このあたりは人づれしていないせいか、それほどでもない。外人のトレッカーが大勢はいて来て、モノをばらまくから人が物乞いになってしまうのだろう。貧しさだけに原因があるのではない。

8/4(晴)8:20 荷を置いて馬でゾンクル・ゴンパへ向かう。川沿いのガレ道を馬まかせて進む。9:40 ゴンパ着。ちょうどジトォ (bshi khro dam pa ri gyā) というお祭をしていた。このあたりでは、ごちそうであるバター入りのごはんをふるまわれる。ゴンパ内を見た後、少し離れた場所のナローパの修業窟(上の洞窟)にも登る。前回来調査、ナローパと持金剛の像。マンダラ壁画あり。トクタにもどってキャンプ撤収。14:30発。もとの道をトウンリへ向けて帰る。渡渉地点で滝カメラマンが



(写真①) ゾンクル・ゴンパ上の修業窟、ナローパ(左)と持金剛の像。

水に流される。午後には雪どけの水が増え、昨日より川の水位が上がっていたのだ。17:00シャーカル村でキャンプ。

8/5(晴)8:00 前回来調査のシラツェ (si la tse) ゴンパに向かう。僧は3人居るといすが、昨日のゾンクル・ゴンパの祭に行って留守。ドカンには十一面千手観音が1体あるのみ。別の堂には、基段6m四方、高さは約4m以上ある大きなチョルテンが祀ってあった。龕(がん)には釈迦像が安置されているが、チョルテン頂部には東方を向いて青色、触地印の阿閼仏が描かれている。中段には四面に2体ずつ計8体の仏が描かれ、八種の吉相を示す持物を持っている。東方は各々白色に塗られ、法輪(h-khor-lo)菱型文様の図形(dpal-be)を持つ。南方、緑(青?)で蓮華(pad ma)と黄(?)で勝幢(rgyal-mtshan)を持つもの。西方、二体ともに赤色、白傘蓋(gdugs)とほら貝(dun)を持つ。北方、黄で壺(bum-pa)を持つ(?)ものと緑、魚(gser-ñā)を持つ仏が浮彫りになっている。この8吉相の上の段にはやはり4面に2体ずつの像が描かれているが、すべて同じ形である。



(写真②) シラツェ・ゴンパ(滝雄一氏撮影)

11:00トゥンリの橋にもどり、テントレストランで昼食休憩。ここのコックを我々の調査隊に引き抜くことにする。日給40ルピー。トゥンリ・ゴンパに行くが鍵持ち不在のため入れない。馬方の家に寄り茶を飲んだ後、新しくカルシャまで車が通れるよう掘られた道路をランミ村まで歩く。18:00ランミ手前でキャンプ。

8/6(晴)カルシャのロンボ宅に行き、しばらくここをベースキャンプにさせてもらう。荷物の整理をする。夕方、バクラ・リンポチェが対岸のピピティン・ゴンパよりゴムボートで来村。カルシャの村人、僧侶が総出で歓迎する。ラッパの音が響きわたり馬上のリンポチェが一人一人を祝福する。

8/7(晴)サニ村で祭りがあるというので騎馬5頭、荷馬2頭で出発、4時間程でゴンパに着く。ラダックのスタクナ・リンポチェが来ていて、村人に説教をしている。着飾った人々がつめかけていた。前回もここで灌頂のお祭りを見たから期待していたのだが、秘仏のナーローパ堂の御開帳の他には特別のこともなかった。それでも集まった人を目あてに、小間物売りや食べ物を売る出店が出ていた。この夜は満月で、村人は遅くまで酒を飲んで騒いでいた。

8/8(晴)サニ・ゴンパ内を再調査。夕方カルシャのロンボ宅へもどると、ちょうどバクラ・リンポチェが来て仏間でロンボと話をしていた。遠慮して外で待っていたが、その夜会見を許可された。

8/9(曇)バクラ・リンポチェは午前中にジープでカルギルへ向けて帰った。チュチージャル・ゴ

ンパ再調査。去年は尼僧1名と聞いたが、堂内では6人程の尼僧がお勤めをしていた。地元の人、リンチェンサンポはアルチ、スムダ、マンギユの各寺を建てた後に、このチュチージャル・ゴンパを建立したと考えている。フランケは別の伝承を紹介していて、カシミールの僧が最初にカニカ・ゴンパ(サニ・ゴンパ)を建て、絵具が余ったので次にスムダとアルチ、最後にマンギユを建てたことを述べる。

8/10(晴)ロンボの案内でカルシャ・ゴンパ再調査。最初に昨年見なかったゴンパ下の磨崖仏に案内される。左から金剛手、観音、阿闍、文殊、弥勒と呼ばれているが、ロンボの考えでは不空成就、宝生、大日(または阿闍)、金剛手、無量光であるという。この五仏の左側に弥勒堂があり、高さ約4mほどの弥勒が岩壁に立っている。しっくい塗り(?)の上に彩色がほどこされている。あるいは岩から彫り出された浮彫りであろうか。



(写真③) カルシャの磨崖仏

ゴンパに入ると僧全員が勤行の時間で、堂内で茶とツァンパの食事をとっていた。一同を集めて記念撮影。古いドカンの壁画の報告、前回のものに追補すると、東壁(右壁)は四天王。南壁左よりチャクドル(金剛手、または前回報告では不空成就?壁

面破損が激しいため確定できない)ナムパルナンゼ(毘盧遮那, 大日), オパーメ(無量光, 阿弥陀), ナーガラージャ(龍王)。西壁左よりマンラ(薬師), チェンレーシ(正観音), ドルジェチャン(持金剛), チャンパ(文殊)。北壁(正面)左よりトンドゥプリンチェン(サキヤパンディタ・クンガーギャルツェン?), ツォンカバ(祖師, チェーリンポチェ)シャキヤトツパ(釈迦), サキヤパンチェン, チュテージル(十一面千手観音)の順となっている。



(写真④) カルシャ・ゴンパ, 古いドカンの壁画, ヴァイローチャナ(四面大日)

8/11(晴, 時々曇)ここからリンシェに向かうため, 馬を換えることにしたが, 新しい馬と馬方(馬が使えなくなった場合, 荷役もするという約束)がなかなか来ない。馬を集めて来るのに時間がかかっているらしい。今日からのコースは前回未踏査の地域である。ロンポの息子がガイド兼通訳として同行してくれる。12:00カルシャ発, コック, ガイド, 馬方3名を含め総員10名, 馬10頭(乗用5頭, 荷用5頭)母馬に子馬3頭がついてくる。14:00リナム通過, ラカンあり。対岸シリンスキット。14:30水場で休憩16:00対岸ツァザル通過, ガイドのナムギャルがいろいろ話をしながら歩いてくれる。

彼によると, ザンスカールが一番古い村は, ランタクシャ, リナム, クミとカルシャだという。クミはカルシャの対岸, ランタクシャはトゥンリから3kmほどペンシラ峠寄りの村である。

17:00ピシュ村へ到着。50~60年前にできた尼寺があるという。河原の良いキャンプ地にテントを張る。フランス人のトレッキング隊が先着していた。老人, 女性を混じえた20人程の大部隊である。対岸はザンラ村で, つり橋でわたることができる。

8/12(晴)フランス隊を先発させた方が危険が少ないというので待つうち遅くなってしまふ。

10:45ピシュ村発, 13:00ベタン村(対岸ホーニャ), 14:00ピドモ村, 昼食, 風が強い。15:50発, 騎馬では少々危い所もあったが, 最後に馬で小流を渡って18:00ハナムル村着。二軒ほどの小さな部落である。ガイドのナムギャルが, ボザというチャンより少し濃いどぶろくを調達してくれる。



(写真⑤) ザンスカール川左岸に沿って下る。(滝雄一氏撮影)

8/13(晴)夜のうちに馬2頭が逃げてカルシヤの方へもどってしまった。馬方がつれもどしに行く。8:20氏家、山崎、滝先発。10:00馬がもどり、荷を積んで出発。今日からは道路が危険なので、荷を全部の馬に配分して重さを減らす。一頭は病気なので抗生物質をツァンパのだんごに入れて食わせる。道は岩だらけで、ところどころ壊れていて場所によっては荷をいったん降ろさなければならない。馬方が非常に神経を使っている。11:00渡渉、道はずっと左岸に沿って岩稜帯を下る。再び登りになって小さな峠に向う。道幅が狭くガケ下には濁流が渦巻いている。13:00傾斜30度以上の岩の溝を馬をひっぱりあげる。

14:00ファルフィラ峠(高度計、3800m)。峠を少し下って水場(わき水)で昼食15:30発。樹林帯の急な下りを駆け降りる。先発のフランス隊の荷馬隊が居て、聞くと馬が1頭この先のガケで落ちたので怖くなって引き返して来たのだという。道はここから岩場を横に長いトラバースをしながら登って行く。人間でさえ足場が危い。フランス隊の馬方たちは、荷を自分で担いでピストン輸送し始めた。我々の隊も荷を人力で運ばなければと思って、後の荷馬へ連絡をつけにもどると、すでに荷馬は岩場をよじ登り始めていた。ガイドに相談すると、我々の馬は荷を減らしてあるから大丈夫行けると言う。まったくここいらの馬の身軽さには感心してしまう。登山用語で言えば、岩場2級ルートを荷を積んだ馬がよじ登るのである。

17:30ジンチェン村手前に着く。リマラルサ峠から流れてくる川は増水して渡れないので、部落の対岸でキャンプ。先発のフランス人たちは、昼過ぎに対岸へ渡ってしまっていて荷物隊を待っていた。結

局1時間ほどして彼等の馬も到着したが、食糧やテント対岸に移すことができなかった。

8/14(晴)川に洗面に行くと、水量はいくらか減っているようである。雪どけ水は手がきれるほど冷たい。昨夜、フランス隊は焚き火を囲んで夜明けかしをしたらしい。腰までの水量なので、大事をとってザイルを張った。

10:00馬と人も全員川を渡りジンチェン側に立つ。すぐに出発、道は昨日同様ひどく悪い。11:00ガレ場で馬2頭が荷がずれをおこし、谷側へすべり落ちる。ザイルを使って荷を上げたりして半時間程消費。(後で聞くと遠まわりだが別の安全なルートもあった)12:30ニェルツェの水場(沢)着。(ここには人家はない。昨年度地図、村の記号訂正)昼食。ガイドは今日中にリンシェに着けると言うが、この分では無理だろう。13:00出発、沢づたいにどンドン登る。



(写真⑥) ハヌマネラ峠よりリンシェ村をのぞむ。(左より、ガイドのナムギャル、山崎、佐藤、コックのテンジン、常多、氏家)

登るにしたがって傾斜がゆるやかになり、谷も広くなる。途中岩小屋に人が居て、ヨーグルトを分けてくれた。16:30谷が二股に分かれているところでキャンプ。ラングマトブチ(4300mぐらい)道はここから北側の沢を登って峠に至る。

8/15(晴)9:00出発、雪渓を踏みしめて峠を目ざす。10:00ハスマネラ峠(4550m)遠くに今日の目的地、リンシェ村が見える。10:30峠発、今度はどんどん下って11:30小流の水場へ降りる。(3900m)再び岩場を登る道をとるが、馬方2人が昨日の事故に懲りて、荷馬7頭と共に別のルートをとる。ガイドと別の馬方ももどるように叫ぶが、聞き入れなかった。12:15さほどのこともなく、サパンラ峠(4100m)を越す。リンシェはもう近い。少し下って水場(わき水)で昼食。遠くに迂回路をとったフランス隊が見える。13:15発、村を目ざしてどんどん下る。リンシェ村は下の村と上の村に分かれている。14:00下の村着、村人からチャン酒をもらい一服。換え馬やポーターの手配をする。16:00リンシェ・ゴンパ下にキャンプ。食糧が足りなくなったのでゴンパで米と砂糖などを分けてもらう。



(写真⑦) リンシェ・ゴンパの僧侶と記念撮影

8/16(晴)ゴンパ調査。カルシャのロンポの息子がガイドなので寺側の対応も良い。僧数70名、ゲルク派。ガクワン・リンポチェにより400年程前に創建されたという。この寺の僧は仏画を描くことで有名。

カンギュルカンにラサ版カンギュル101帙。ドカン南向950×900cm。左壁にナルタン版テンギュル220帙。壁を修理中で仏像等が動かされていた。正面仏像チョーリンポチェ、ツォンカバ、釈迦、阿弥陀、弥勒像等。左右の壁にも仏像多数。ドカンの奥左に小さな部屋が接していて、普明のマンダラ。半分は新しい壁に仕切られていて見えない。傷みも激しいが壁の具合から見てドカンの建てられる前からあったのだろう。ドカンの外側に六道輪廻図、四天王の壁画。東の壁(ドカン入口前のテラス)に鹿に乗った老人を中心とする絵がある。長寿の六



(写真⑧) 長寿の六相の老人と鹿

相(tshe ring rnam drug)を表し、老人、鹿(一角獣?), 鶴, 岩, 水(滝?), 木(松?)の6が

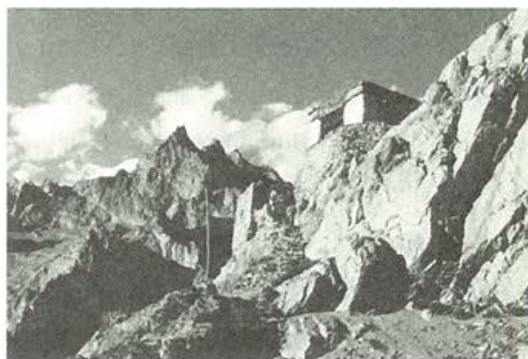
テーマである。いかにも中国的な図柄。ラカン（護法堂）は南向550×520cm。古い壁画がある。正面中央に十一面観音像。その左にチョルテンがありタンカも多く掛かっている。

ヘッドドラマの部屋ではお茶をよばれる。この寺所属の僧はレーやランドゥン・ゴンパにも滞在しているが、多くは寺内にとどまって修行に励んでいるという。我々がやって来た道のことを考えると、この寺の僧が出かけるのは大変なことであると納得する。夜、羊を一頭買う。

8/17（晴）新しく乗用の馬2頭、ポーター4人（1人は馬方を兼ねる）を雇う。カルシャからの10頭の馬とガイド、コック等は佐藤さん等3名と共にもとの道をもどるので、我々2名（氏家、常多）は彼等の案内でラマユルを目ざす。タシ・カルザン35才、ロブサン・ツェリン24才、ブンツォク・トゥンドゥブ17才それにワンチュク・ドルジェ50才前後の4人のポーターのうち実際に荷をかついだのはワンチュク1人で、他はロバ3頭に荷を運ばせる。

9:30皆に見送られてリンシェ発。10:30ムグンラ峠（4100m）11:00スニトクラ峠（4200m）11:30スキュンパタ村（4軒）着。新しいゴンパがあり、リンシェの僧1名が住持している。20年前建立。本尊は十一面観音。池があったのでそこで昼食。13:30発。20分程でゴンマ村下を通過、峠への登り道にかかる。15:00チュパラ峠（4200m）ここから左へのまき道は直接シンギラ峠へ行く。ユルチュン村へはまっすぐ下へくだる。15:50ユルチュン。ここにはチベット文字とは違った古い文字の書かれている洞窟があると聞いて来たのだが、村人

に聞いてもわからないと言う。どうやら今日通過したゴンマ村にあるかも知れないという情報を得たが、日程の関係で引き返すことはできなかった。この村にはゴンパが2寺あり、村から少し離れた場所にあるタシトンゼ（bkra sis mthoñs mdze）・ゴンパへ向う。僧1名。本堂西向、本尊十一面観音、壁画ツォンカバ他。



（写真⑨）ユルチュンのタシトンゼ・ゴンパ

8/18（晴）朝食の後、部落内にある別のゴンパに行く。タシドマ（またはユルチュンドマン yul cun hdo mañs）ゴンパ。リンシェの僧が1名。本堂東向、中尊トンパ（釈迦）、右に十一面観音、左にツェパメ（無量寿、阿弥陀）。壁画は正面に釈迦、祖師像等。右壁にドルマ（緑ターラ）左壁に35仏。

9:30ユルチュン出発。峠を目ざして登る。12:00峠手前の水場（沢）で昼食（4300m）12:30発、13:40シンギラ峠（5060m、高度計4800m?）風が吹き上げて来る。峠に仏像があると聞いたが、雪渓に岩が浮き出て仏の形をしたものであった。14:20峠を下る。牧童の岩小屋でミルクとバターを買う。15:30休憩、バター茶を飲む。16:30遅くなったので荷をまかせて馬方1人と共に

馬をとばす。かなりの速歩なので振り落とされないよう必死に鞍にしがみつく。18:30ミチラ峠(4400m)19:10フォトクサ村着(4100m)20:20荷物到着。民家の前にテントを張り、遅い食事をとる。

8/19(晴)朝食後、村のゴンパに向う。ここにも2寺あり、ディグン派とドック派の寺でラダックのラマニル寺とヘミス寺の僧がそれぞれ住持している。ヘミスの僧は不在だったので大きい方のゴンパは調査できなかった。ディグン派の寺はギャシドゥンカル(bkya' sis dtun' hkar)ゴンパ。建物は新しく最近建てられたものである。本堂南西向。中尊釈迦、壁画なし。このゴンパの東方少し登った所に廃寺。4臂の観音(木造)が1体遺棄されていた。壁画は釈迦、祖師像、観音、金剛薩埵など。最近廃寺になったものようである。たぶん下のディグン派の寺へ移されたものであろう。



(写真⑩) フォトクサのギャシドゥンカル・ゴンパ

10:00フォトクサ発。谷ぞいに西に向かう。11:00大きなチョルテンがあり、ここから北西に転じて小沢をつめる。12:00昼食13:40発14:40シルシル峠(4990m?高度計4700m)15:00発、少し下って西南からの大きな流れが見えたところで、右の

ホノパタへの道をとらず左の道(西)をとる。ポーターの話では、こちらの方が安全だからという。川沿いに右岸を廻行。水量が多く、大きな岩が音を立てて流れている。渡渉地点を探して上流に行くうち岩小屋があり、そこでキャンプすることにした。老人と少年が居たがミルクも何もなし。



(写真⑪) シルシル峠

8/20(晴のち曇, 小雨)岩小屋の横に、木に石板をわたした小橋があった。荷を人手で対岸に移す。ロバも橋をわたるが馬は水量の減った川を渡渉。9:00出発。岸を少し下って、すぐ左へ小さな峠まで登る。別の小沢へ降りたところに人家がある。パンタンナム。右の沢をつめる。峠の手前でポーターの1人が倒れてしまった。風邪のようである。薬を与えてゆっくり進む。雲が出て来て寒い。11:40ニュグチェラ峠(5000m位)遠くの山は雪。天候が下り坂なので急いで下る。ガンジラ峠が目の前北西方向に見える。13:00小雨が降り出す。14:00昼食15:00発、狭い谷ぞいに下るので道は左岸と右岸を何度も入れ変わる。渡渉をくり返すが馬を使えるところは比較的楽である。17:30樹林帯の中のシラクンという場所でキャンプ(3800m)雨が降っているのでポーターにカサとポンチョを貸す。

8/21(晴)ロバが上流にもどってしまったので出発に手間どる。9:00出発。樹林帯が続くので馬をおり徒歩で進む。道端にある赤や黄の木の実をつまみながらのんびりと歩く。温泉があるところを過ぎると谷が開けて大きな村が見える。13:30シーラ村。河原で昼食。(3300m)15:00発、このまま川にそって下るとワンラ村に出るが、我々はラマユルへ出るので北西に進路をとる。水のない狭い谷をつめる。16:30プリンキティラ峠(3750m)眺

めは殺ばつとして気持ちの悪い峠である。17:20ラマユル村着。ゴンパの中に外人用の宿舎があり、ポーターに支払いをすませて久しぶりの落ち着いた食事をする。

翌日、ゴンパを見た後、トラックの荷台に乗ってカラツェ村で一泊、レーに帰った。

(なお今回の調査の行程および地理については、後記の地図を参照されたい。)

プクタル・ムネ寺調査

佐藤 健

ザンスカールに入った5人の隊を2つに分けることになった。高野山大学隊と、毎日新聞隊3人である。レーに残った7人とわかれてザンスカールへむかった私たち5人はレーからカルギルまでトラックでまる1日。カルギルからザンスカールの入口のトンリまでやはりトラックでまる2日半。さらにトンリから徒歩でリンシェまでまる6日の旅をした。全員がリンシェ・ゴンパの調査を終えて出発点のトンリまでもどるにはやはり徒歩で6日かかる。何も全員が来た道をもどる必要がないではないか、ということが隊をわけた理由である。高野山隊の2人は、再びトンリ、カルギルの往路のコースを通過して帰るだけの日数がない。

リンシェ・ゴンパで隊を2つに分けた。高野山隊の氏家助教授と常多君は、リンシェからさらに5000m級の峠を2つこえて、ユルチュン・ゴンパとフォトクサ・ゴンパを調査してラマユル・ゴンパへ抜け、ラダック街道で車をつかまえて、松長教授らの待つレーにもどることになった。3日間の行程だがなまやさしくない。(実際には5日かかっている。)われわれザンスカール隊の当初の目的はリンシェ・ゴンパの調査であった。このゴンパは、ザンスカールの最も奥にある。そこにたどりつくまでの行程でも大変なの

に氏家・常多の2人は、その奥にある大きな峠を2つ越えていこうというのである。しかもほとんど未知のコースである。しかし、そのコースを無事のりきってラマユルへ抜ければ、われわれの今度の調査隊は、ラダック・ザンスカールの全域を踏査することになる。「行きましょう」氏家助教授が決断した。その未知のコースに挑戦しようというのである。

ロバと数人のポーターをつれて登って行く2人を見送った毎日隊3人にも任務があった。リンシェからカルシャまで5日間とってかえし、さらにバダンに出て、前年の高野山の未調査地であるプクタル・ゴンパに向わなければならないからである。これまで、学者とジャーナリスト、そして僧侶が、たがいに協力しあいながら調査取材をしてきたのだが、佐藤、山崎、滝の3人だけが残り、独自で調査しなければならない。われながら心もとない気がしたが、ゼイタクはいていられない。ザンスカールのリンシェ・コースと、もうひとつの巨大な谷あいにあるプクタル・コースを踏査すれば、同地域のすべてを踏査することになる。とにかく出発した。リンシェからカルシャまで5日でもどった。その間にザンラの王様にインタビューする幸運にめぐまれた。カルシャのロンボの家で1日休養をとり、すぐにカルシ

ムネゴンパ所有のゴムボートに乗ってわたり、徒歩で約3時間でパダンに着いた。人口約600。ザンスカールで最も大きな町である。ここで少なくなった(ほとんどなくなっていた)食料を整える。といってもビスケット、ジャム、大麦粉と塩、砂糖。それに芽のでた玉ねぎとジャガイモだけだったが、食料の少ないザンスカールでは予想以上に購入できたくらいである。ここでも、パダンの王にインタビューできたのは、われわれのガイド、ナムギャルが、王家と親せき関係にあったことによる。

パダンを出発したのは8月24日午前9時である。屋前にパルダン・ゴンパについた。ザンスカール川の上流のツェラップ川につきでた巨大な岩の上にあるこのゴンパの調査は、前年の高野山隊がくわしくしているのので、ここでは省略する。午後5時、ムネ・ゴンパ着。ゲルツ派の寺で、600年前にチェンジャンセン・シェラザンポによって創建されたといわれ、21名の僧が在籍するが、われわれが訪れた時は3人の僧と4人の小僧きりいなかった。



(写真①) ムネゴンパ全景

ドウカンの中尊はチャンバ(弥勒)であり、むかって右に十一面観音、左に2つのツォンパカ像があった。右の壁には釈迦と歴代の祖師、左の壁もまたツォンカパを中心とする祖師、また、入口の左右には忿怒尊

が描かれている。この夜はムネ・ゴンパ前にテントを張って寝る。



(写真②) ムネゴンパ ゴンカン正面弥勒菩薩



(写真③) ムネゴンパ ドカンの祖師と諸尊

8月25日、ムネ・ゴンパ発。カルシャのロンポが「もしかしたらリンチェンザンポが建てたチョルテンがあるかも知れない」というイチャ(イチャール)・ゴンパへ着く。つり橋で対岸にわたったところにある寺だ。寺には僧がいなかった。はるか山の上に新しくできた寺に僧が1人いると聞いたが、その寺には壁画その他はまったくないという。近くの子供に頼んで、カギを持っている村人をさがしてもらったが見つからなかった。しかし、目的のチョルテンは見ることができた。このチョルテンは村人に大切にされているらしく、まわりには白壁が作られ、



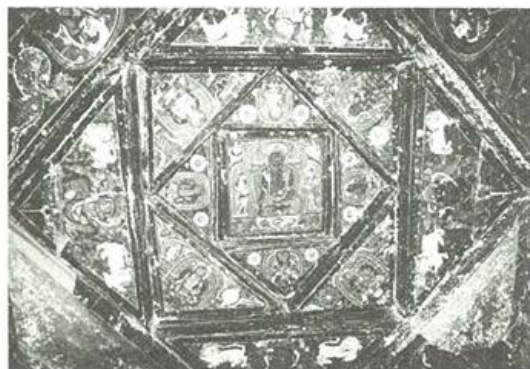
(写真④) イチャルゴンパ全景



(写真⑤) イチャルゴンパのチョルテン

屋根で保護されている。チョルテンの天井には、阿閼如来のマンダラらしく、青で触地印を結んだ仏が中尊になり、そのまわりに白、青、赤、黄などの女

神と、同じ色の忿怒尊、そして四天王が描かれている。(くわしくは、滝雄一・毎日新聞社写真部員の写真を参照)



(写真⑥) イチャルゴンパ リンチェンザンポの建てたといわれるチョルテンの中の阿閼の曼荼羅

そのあと、上の寺の僧が通りかかったので質問をすると、リンチェンザンポは、カルシャとパダンとこのイチャにチョルテンを作りそのひとつがこれだというのが、確かな証拠はない。調査のあと、ひたすら歩く。夜、作戦会議。最終目的地のブクトル・ゴンパへ行くには2つのコースがある。ひとつはチャーからつり橋をわたって川ぞいの山の上に行く方法。これは短時間だが、つり橋を馬がわたれないため、荷を運ぶことはできない。もうひとつは、さらに上流のブルネ村の大きな橋をわたり、馬をブルネ村に待たせてブルネ村からブクトル・ゴンパへの約10キロを歩いて行く方法。われわれは前者を選んだ。26日。チャーのつり橋は古く、まるでつなわたりのようなだったが無事に対岸へ。徒歩で2時間10分歩き、目的のブクトル・ゴンパに着いた。(その間の山の景観はすばらしい)

ブクトル・ゴンパは巨大な岩の洞窟をうまく利用した巨城のような寺で、なぜかその巨岩の上に、この地方では絶対見ることがない松に似た木が一本立



(写真⑦) ブクタルゴンパ全景

っている。しかも青々とした葉をしている。神木だという。

カルシャのロンボからの紹介状を出し、寺の中へ入った。ヘッドラマはいなかったが、セカンド・ヘッドラマのタシ・トンルップ師(41才)が気軽にインタビューに応じてくれた。その要約。

この寺は500年前にできた。ゲルック派。この岩屋ではritotという名の3人の僧のグループがメディテーションをしていた。ある時、リンシェ・ゴンパを作ったのと同じチャンセン・パクスバ・シェラップザンボが、2匹のネズミに導かれてこの地に来て3人であい、ここに寺を作ることに決めて、弟子のシェンシャティ・イチャールに作らせたのがこの寺である。以来この寺では、多くの僧がメディテーションをし、現在でも盛んだ。洞窟の中には、寺の創建者であるイチャールの遺体が埋葬してあり、そのわきの穴からは1年中、清らかな水がわき出ている。在籍僧は80人。毎年入る小僧の数は年々ふえ

ている。寺と村との結びつきが強く、信頼されているので、子供を寺にあずける人が多い。小僧にはまず、チベット語のアルファベットを教え、そしてシニア・モンクとして、上級の僧がマン・ツォ・マンで教えていく。17歳から本格的な仏教修業をはじめめるが、優秀な者はダライ・ラマ師のいるダラムサーラへ留学することもある。現在も9人の僧が行っており、ダラムサーラから帰った僧はゲシエスという仏教哲学の博士号をもらえる。

インタビューのあと、寺の中を案内してもらったが、この寺の中心はゴンカンだという。岩屋をうまく利用している。中尊はベラワ。その他マハーカーラ、マハーカーラの妻、ハモ、チョジュギャル、チョジュギャルの妻などの像が布につつまれている。写真撮影の許可を願いすると「7日間祈祷しなければ、布をはずすことはできない」とことわられた。

この部屋に立体マンダラがある、というので期待したが、中国風の家の模型(1.5メートル四方)の中に10センチほどの諸仏が、10体ほどあるだけで、期待ほどのものではなかった。

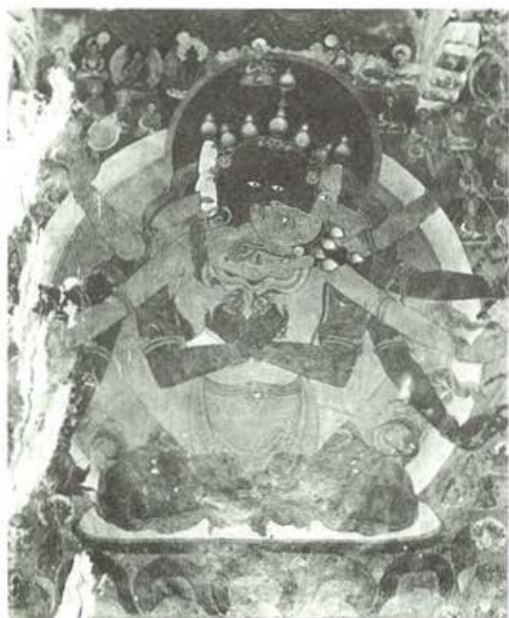
もうひとつの堂はカンギュール・ラカンで正面に経棚、右の壁が凹型になっており、十一面観音と弥勒の像。そして左の壁にはカーラチャクラ(時輪)とマハーカーラの壁画が描かれている。さらにもうひとつの堂はストンバ・ラカンで中尊は釈迦如来像、その両わきにグルリンボチェ、ジャンバ(文殊)、チャンバ(弥勒)、チェンレジ(観音)の像。正面にむかって右の壁にはマンラ(薬師)、トスパ、サンワ(秘密尊)、チェンレジ(観音)の絵、右の壁にはドルジェチャン(持金剛)、オパーメ(無量光、阿弥陀)、ジュンドルマ、などがあり、入口の左右の壁は両方ともゴンカルと呼ばれている。また、右



(写真⑧) ブクタルゴンパ ストンバラカンの
釈迦牟尼像



(写真⑩) ブクタルゴンパ ストンバラカンの
持金剛と八十四成就者



(写真⑨) ブクタルゴンパ ストンバラカンの
グフヤサマージャ



(写真⑪) ブクタルゴンパ ストンバラカンの
ターラー菩薩

側の壁の下方に仏伝図らしきものが描かれているが、はがれはじめており、はっきりしない。

以上がブクトル・ゴンパの概略だが、寺についての時間が午後3時15分。この寺の調査のあと、暗くならないうちにブルネ村までひきかえさなければならず、十分に調査できないのが残念だった。

暗くなってブルネ村に着くと、待っているはずの馬方と馬がおらず、まっ暗やみの川沿いの道をチャーまでもどると、彼らは、われわれが往きの道をもどると思って待っていた。連絡がうまくいかなかったらしい。チャーで宿泊。8月27日。帰路にはイチャのゴンパを是非みたいと思い馬をいそがせ2時すぎにイチャ村に着いたが、やはり寺は開いておらず、この夜はイチャ泊。

8月28日。早朝イチャを発とうとして大事故が起きた。四番目につり橋を渡った滝カメラマンの馬が、カメラとフィルム、三脚その他、写真の撮影機材をすべて積んだまま、約10メートル下の、川幅30メートルのツッラップ川へ落ちてしまったのだ。馬は荷をふりほどいて岸にあがったが、荷物は激流とともに下流へ。幸いにもガイドのナムギャルが1.5キロ下流で荷の流れに追いつき、水温約5度の川の中に飛び込んで荷をすくいあげてくれたが、もし、そのまま流されれば、ザンスカールの撮影分のフィルムの3分の1はなくなるころであった。

さて、その後の毎日隊の日程を記すと、

8月28日 ムネ・ゴンパ近くで宿泊。

8月29日 午後2時バダン着。バダンの丘の上のスタクリム・ゴンパ調査。ヘッド・ラ

マ・ワング・ジグメット師にインタビュー。バダンの王、ソナム・トンドゥブ・ナムギャルディ王の家に宿泊

8月30日 午前10時 バダンの小中学校見学。川をゴムボートで渡り、カルシャのロンボの家に着く。泊。

8月31日 休養日。ドイツ人の民俗学者Evak Dargyay 女史と会い情報交換。ロンボのソナム・ワンチュック氏にインタビュー。

9月 1日 トラック待ち。ザンスカールの先住民族(狩猟民族)の残した祈りの彫刻を撮影に行く。午後、カルシャ・ゴンパの僧に寺のシステムについてインタビュー。

9月 2日 カルシャからトンリへ。午後1時のトラックをみつけて残る。夜はジュルドー着。

9月 3日 ジュルドーを午前9時に出発、午後8時カルギル着。

9月 4日 午前10時30分ジープにてカルギル発。ムルベク手前のシャッゴル・ゴンパ(ゲルック派)へ行くが僧不在。ハナスクの旧王城を調査。午後5時、ラマユル着。ラマユル寺調査。

9月 5日 午前6時ラマユル発。午前11時30分。レー着。レー隊と合流。

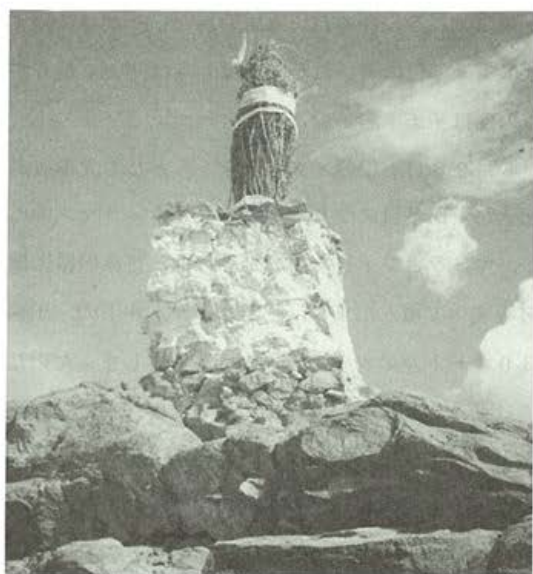
ラトーとファスプン

— サブー村の事例から —

山崎正矩

サブー村(レーの南東約5 km)は、谷間の入口に形成された扇状地に立地する南北に細長い村落である。およそ100世帯の戸数があり、そのほとんどが農業と牧畜に生活を依存している。ごくわずかの給与生活者(事務員、警官、教師など)がいるが、彼らも農牧業を兼業している。朝晩一便の定期バスが、サブー村とレー間を往復しており、この点で交通の未発達なラダックにあって、サブー村の人々は恵まれている。サブー村民の生活は、ザンスカールと比べると、レーに近いことが原因なのだろう、明らかに近代的消費文化がずっと浸透しているが、しかし依然として高い自足性を保持している。

サブーの村はずれに、まるで緑の絨氈を敷きつめたようなきれいな草地がある。そこには周年絶えることのない泉が湧いており、その水は、特に雪溶け水が全く絶える冬に、村人の貴重な飲料水となっている。またこの泉水は、頭痛や腹痛ほか種々の病気に薬効のある薬水としてラダック一般によく知られており、近隣の村落から水をもらいに来る人が絶えない。人々にとって大切なこの泉のそばに、立派なラトー(写真①参照)が泉を守るかのように立っている。このラトーは、サブーのアユ地区のラトーで、「ドルジユドンマ」と呼ばれる。



(写真①)

ラトー(Lhato)は下部を日干レンガや石で円型または方型に積みあげ、上部に木の枝の束を立て、その中心に護旗を立てたもので、大小はさまざまである。下部の中は空洞になっており、そこには神聖なる布片や穀物が入った壺が納めてあるという。ラトーとは、字義からすれば、ラーが神または神々、トーとは象徴であるから「神のやどるところ」の意味がある。いわば「守護神塚」といえようか。

サブー村は5つの地区からなっている。この5地区には、それぞれ、その地区を守護するラトーがあ

る。地区のラトーの名称は以下の如くである。

地区名	ラトーの名称
サブーフ（中心部）	チャグメンギャルモー
ヨックモス（東 部）	シャムルギャルモー
メヤック（西 部）	ラグゼギャルモー
アユ（南 部）	ドルジユドンマ
ゾン（北 部）	チョーグンスブドゥン

ラトーの名称は、同時にそのラトーにやどる神の名前でもある。人々はこの神がなにかにつけ自分達を守護してくれると信じ、生活の平安や畑の豊穡を、また種々の災難から守ってくれることを神に祈願する。

地区のラトーとは別に、村内には家のラトーが多数ある。その所在は様々で、村はずれの荒地、畑のあいだ、旧王城址、民家の屋根の上などにまつられている。家のラトーは1つの家だけで有しているものもあるが、社会組織の面からも興味深いのは、複数の家々が、共通に1つの特定のラトーを有しているケースである。共通のラトーを自分達の守護神として崇拝する複数の家が、ラダックで「ファスブン（Faspun）」と呼ばれる1つの社会集団を形成している。

「ファスブン」とは、「特定のラトーを絆の核とした、日常生活に濃密な相互関係を有する複数の家からなる恒常的集団」と規定できよう。大切なことは、ファスブンが家集団であることだ。サブーフでは、少なくとも10以上のファスブン集団が存在する。確認できた10のファスブン集団のラトーの名称と構成員のまとめたものが表1である。このほか調査にもれた家も、必ず1家以上のファスブンを持っているという。表1のファスブン集団Iを、さら

に具体的に示せば、①フェレツェリン家、②チャンチュン家、③ルギ家、④ビグ家、⑤フォドル家、⑥バシン家、⑦チャルドグ家、これら7家がファスブン集団の構成員であり、共通ラトー「スクルギャル」は、①の家の屋根の上まつられている。7家はすべてサブーフ村在住の家で、①②はアユ地区、③④⑤はサブーフ地区、⑥⑦はメヤック地区に居住している。

表1 ファスブン集団

	共通ラトーの名称	構成員の数
I	スクルギャル	7 家
II	チョタール	5
III	クルゴン	5
IV	パラセルラ	4
V	マブザンスクゥンドゥン	4
VI	チョシャーラ	5
VII	パラスクルギャル	7
VIII	チェラギャルモー	5
K	（未調査）	8
X	ドルレグ	2

ファスブンを構成するこれら7つの家が、元々どのような関係、例えば親族関係にあったのかどうか、いつ頃ファスブンを構成するようになったのかどうかは全く不明であり、その歴史については誰も知らない。元々は親族であった可能性も考えられるが、定かなことはわからない。どうやらファスブンの歴史は古そうであるが、とにかく、家の当人に聞いても、昔からのファスブンであったと言うだけである。

ファスブンは日常生活の中で重要な機能を果している。ファスブンを構成する家々は、必要に応じて相互扶助の関係をもっているが、とりわけ人間生活

の節目となる、誕生の祝い事、結婚式、葬式の三つにおいて、必要かくべからざる協力関係をもっている。残念ながら、その協力関係の実際例に接する機会はなかったし、具体例の十分な資料を得ることはできなかった。しかし聞いたところを概略するすなわば、例えばある家で葬式があった場合、まずもってその家のファスブンの人々が参集し、諸事相談したうえで、葬儀執行の手配をする。勿論、この葬儀には、死者の親族はもとより、近隣の人、村内の人々はすべて弔問に来るし、また必要に応じて十分助力もするが、一切の手配と指図はファスブンの人から従わねばならない。死者に手を触れることができ、運ぶことのできるのは、ファスブンのみということである。葬儀は極めて念入りであり、その手続きはおのずと複雑となることから、ファスブンの協力なくしては葬儀がおこなえない。

ファスブンの協力関係が村民の生活にとっていかに重要であるかは、社会的制裁としてファスブン集団からの排除という方法がとられることから推察できる。ある人がラトーを蹴したり、あるいは社会的規範を大きく逸脱した行為をとった場合、その制裁として、その人（そして結局はその人が属する家）はファスブン集団から除籍されてしまうことがある。この制裁は、日本の村八分に類するもので、村民にとっては、生活の存続さえ危ぶまれるほどのつらい制裁となる。

誕生・婚礼・葬式において、ファスブンは特に重要な相互協力の関係を有しているわけだが、祭祀についてはどうであろうか。家のラトーにかかわる年中行事として、定まったものは新年におこなわれる。新年を迎えるにあたり、ファスブンの構成員は協力して、ラトー上部の木の枝の束を新しいものに毎年

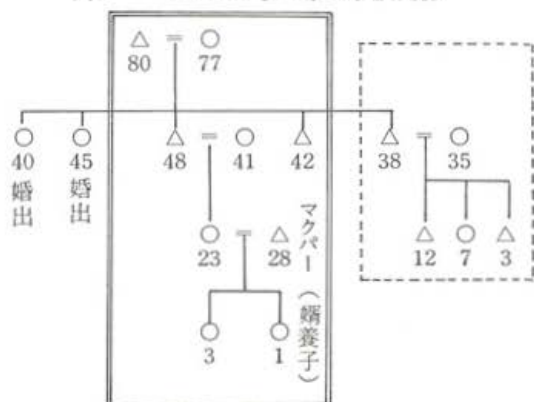
とり変える。この時、下部に納めてある藁をとり出し、なかの穀物の状態から、来年の作物の吉凶を占なう。その年に収穫した新しい穀物ととり変えたり、高名なリンボチェに祈禱してもらった聖なる布片を新たに納めたりもする。新年には、成員達はラトーに参拝し、僧侶に経をあげてもらい、種々の供物を神におそなえして、この年の平安を祈願する。婚礼や葬式のときにも、ラトーへの参拝と神の加護を願う儀礼は必ずおこなわれる。

ファスブンの構成員間の婚姻は禁じられている。しかし近年になって変化がみられ、ファスブン内婚は、どうしてもというならば許される傾向が出てきたが、それとても歓迎すべきことではなく、決してよいことではない。ファスブン内婚が禁じられているからといって、ファスブンを親族集団とすることは誤りであろう。ファスブンは、原理的に親族とは全く異なった集団である。いうまでもなく親族は特定の個人を中心としたある範囲の人々であるが、ファスブンは個人ではなく、「家」を社会的単位として構成されている。従って世代の交代にもかかわらず、家が存続する限り、ファスブンは恒常的な集団を保持し続ける。ある家に次代を担う子がない場合、養子、養女をとることによって家の存続を保つ。この制度は、日本と極めて類似している。

一方で、ファスブんと親族との重複は、特に分家設立の時に生じてくる。サブー村のおよそ100世帯の家は、カンチェン＝主家とカンブー＝新家の2種類の家からなっている。カンチェンとカンブーは本家一分家の関係にある。次、三男が彼の生家カンチェンから土地や家畜の分与あるいは家屋建築などに助力をうけ、独立した世帯を営んだ家がカンブーである。表2はファスブン集団Iの構成員であるチ

ヤンチュン家②の親族関係を図示したものである。図中のカンブーは、カンチェンの家名(カンミン)であるヤンチュンを継承していると共に、カンチェンと同じファスブンに属している。この事例からわかるように、新しく設立された新家は、それが分れた主家が属するファスブンの構成員となる。ヤンチュン家は主家と新家があるゆえに、実際はファスブン集団Ⅰは8世帯の家によって構成されていることになる。

表2 ヤンチュン家の親族関係



・=内はカンチェン
注・...内はカンブー
・数字は年齢

分家設立が古い場合、本家と分家が別々のファスブン集団に属している例がある。サブー村で上級階層に属するサブージムスカン家(別称:ジムスカン ニンバ ニンバとは古いの意)とアユジムスカン家(別称:ジムスカンソマ ソマとは新しいの意)は、その家名が示すように、本家一分家の関係をもっているが、現在はそれぞれ別のファスブンに属している。前者はファスブン集団Ⅱ、後者は集団Ⅲの構成員である。アユジムスカンは、古くはカンブー(新家)であったわけだが、今日カンチェン(主家)の1つと考えられている。

ファスブンへの新規加入は、そのファスブンの元来の構成員の親族または分家でもなくとも可能である。X家が、ある事情から遠隔地から移転して来てサブー村に土地を購入して居住した場合、X家が加入を望むファスブンの構成員から承認を得、さらにそのファスブンの共通ラトーに参拝し儀礼を行うことによって、ファスブンに加入できる。この場合は、先に例示した本家一分家関係にもとづく加入ではなく、居住・実利的条件にもとづいた新規加入である。

この居住・実利的条件は、特定ラトーへの崇拜ならびにそれを支える信仰体系と共に、ファスブンを集団として成立せしめている2大要素であると思われる。ラトー信仰と実利的条件は、ファスブンを支える、いわば車の両輪であり、相互に補完しあいながらファスブンを集団として成立させている。このいずれにしろ一方が欠如したならば、ファスブンは集団として成立せず、別の形態をとることになる。実利的要件からいえば、ファスブンの構成員は、同一村落内に居住している方がなにかと都合がよい。実際、ファスブン集団の構成員は多く同村落に居住している。しかし村落は同じでも居住地区は様々に異なる。さらに、居住村落を異にする家によって構成されたファスブンも稀ではない。表1のなかで、集団Ⅲ、K、Xがその例である。集団Ⅲの場合、構成員5戸のうち、サブー村が2戸、レーに1戸、シェーに1戸、ティクセが1戸となっている。これら村落は、比較的近隣の村落であるが、交通未発達なラダックでは同村落居住に比べれば、相互協力には不便である。にもかかわらず依然としてファスブンを構成しているのはなにゆえか。ファスブン構成員が居住村落を異にするということは、ファスブンが居住・実利的要件からのみ成立し存続しているわけ

ではない一つの証左ではなかろうか。彼らを結びつけているのはラトー信仰であると考えたい。見逃がしてはならない重要なことは、ファスブンが特に関与する誕生、婚礼、葬式という行事は、聖なる側面が大きい行事であることだ。このことを、現代文明を享受しているわれわれは、とかく見失っている。実質的には多くを見失ってしまった日本においてさえ、葬式はいわずもがなであるが、依然として、子が生まれればお七夜をしたり宮参りをし、婚礼の時には神前で頭をたれるということをしている。日本では形式のみが残っている傾向にあるが、ラダックには、あまたの仏と神が「今におわす」のである。これら諸仏や神々と深いかかわりをもって生活しているのがラダックの住民である。この点で、日本人がとうの昔に失なった社会が今に生き続けているのがラダックであると言ったら言い過ぎであろうか。ともあれ、ラトーあるいはラーの信仰を知ることが、

ファスブンの理解にとって不可欠である。

人はパンのみにして生きるにあらず。と同時に、霞を食べては生きてゆけない。ファスブンの構成員が、あまりの遠隔地に居住したならば、成員相互の協力関係を維持することは困難となる。実利的要件は満たされず、その構成員はおのずとファスブンから離脱せざるをえない。

ファスブンと階層分化との関連など、まだ記すべきことも多いが、別の機会にゆずることにする。最後にあたり、結びとして触れたいのは、ラー(Lah)とはなにかということである。村内のあちこち、街道や山道の路傍、峠や頂にまつられているラー。ラバ(託宣師)が儀礼を通じて交流するラー。これら神々はラダック人の生活の中でどのような位置を占めているのか。神々と諸仏はどのような関係にあるのか。ラダックの宗教を知るうえで、仏教とならんでラーの研究が極めて重要であるように思われる。

水 難

滝 雄 一

二度も私のパスポートは川に流されてしまった。一度は私とともに、そしてもう一度は馬の背に乗ったまま。

ザンスカールの道には時々五千メートルを越す山の氷河からの雪溶け水が川となり、我々の行く手をさえぎる。そんな時はくつを振り分けに首にかけ、ズボンをまくるか、脱ぎ、命綱を張るなど集団で手に手をとって安定した石をまさぐりながら渡るのだ。

ゾングルゴンパの調査を終え、トンリに向っていた私たちザンスカール調査隊もその日こんな川にぶつかった。この“絵になる”光景を撮らないわけにはいかない。行きには渡るだけで精いっぱい写真のことまで手のまわらなかった私はそう思っていた。隊の先頭を歩いてきた私は隊員たちがその川に到着する以前に渡り切って彼らのこわごわ渡ってくる状態のアップを望遠レンズで、濁流のものすごさを広角レンズで強調してと考えながら一人で渡り始めたのだ。

「川を渡る時は午前中にしなさい」と以前土地の人が教えてくれた。昼間の三十度を越す直射日光で溶かされた氷河の水は午後には川に流れこみ水量が増えるのだ。比較的水量の少ない午前中が川渡りにはベターということだろう。その時はあいにく午後

になってしまい水量は太ももあたり。それが直径一メートル位の岩の間をうずまいて流れている。「撮りたい」「撮らねばならぬ」と思っていた私は行きには馬方に手をひかれて渡ったことも、目の前の危険もすっかり忘れてしまっていた。

氷河からの水は時に氷もまじりオンザロックの冷たさだ。私の足はだんだん感覚を失っていく。それはバランス感覚も失うのだ。私の足にあたって小さなうずをつくり右から左に激しく流れて行く水を見ているとトンボ回しにあったトンボのように目がまわってくる。流されてはいけないと傾けた体の足元を流れがすくう。

「あっ」という間の出来事だった。川にあおむけに倒された私はそのまま十数メートル。ようやく大きな石にしがみついた私が中州に立ちあがった時、左右の肩からさげたカメラから撮影済みのフィルム、パスポートを入れた腰袋からは水が雨だれのように落ちていた。

川を歩かないまでもザンスカールの橋もおそろしい。つたのような枝をからませて作った太い綱を三本わたし二本を手でつかみ一本の上を歩くサーカスの綱わたり風のと、丸木を二本わたしその間に平らな石を置いてあるだけの橋に大別される。イチャル

村では馬の草場のつごうで向う岸にテントを張った。翌日この石橋を渡って道にもどろうとして二度目の水難にあった。私は隊員たちが馬をひいて渡るようすを写そうとやや離れた位置からカメラをかまえていた。私の馬は村の子供にひかれて三番目に渡り出した。力強い馬だが、ちょっと運動神経がにぶい。橋の真中あたりにさしかかったところ、馬は左前足を石の間の溝に落した。たちあがろうと右前足でもがいたが、その足も溝に、両前足を穴におとした馬はバランスを失いそのまま数メートル下の川へまっさかさま。

馬はすぐ泳いで岸にはいあがってきたが、積んだ私の黄と赤のリュックは鞍ごとはずれて流れていくではないか。私がおもっていたのではまたいつか水につかるかもしれないとわざわざ別の荷物にいった撮影済みの写真原稿、カメラ、パスポートをいれたまま。ぼう然となり、なすすべを知らなかった私が「なんとしてもとりもどさねば」と流されるリュックを追ったのはだいぶ下流に流されてからだった。石ころだらけの川原を追うが、川の流ればそれ以上に速い。この高度三千五百メートルでのちょっとし

た運動は大変息苦しい。息がきれ、リュックを見失い、先に追いかけてくれたガイドのナムギャル君が見えなくなりそして希望を失いかけていた。

川に沿った道を馬で追っていたコックのタシ君が笑顔で下流の方を指さしながらもどってきた。二キロメートルくらい下流の対岸に我々が雨具用に持っていた赤いアノラックを着たナムギャル君が手を振っている。見れば足元にはあの黄色と赤色のリュックがあるではないか。この氷のまじる、我々では追いつくことのできない程の急流を泳いで彼はひろってくれたのだ。胸に熱いものがこみあげてきた。

「俺たちは友だちじゃないか、当然だよ」何度も感謝する私に彼ははずかしそうに言うのだった。

今度の旅の成果である写真原稿を、取材するカメラを、身元を保証するパスポートを、二度も川に流し、その度に肝をひやした私は「危険の中の安全を常に考えねばならない報道カメラマンの基本」を改めて思い知らされた。

なお小林隊員の実家浄土寺からいただいたお守りもこのパスポートとともに二度ともこの水難にあっている。

壁画の撮影

—その技術と苦労談—

加藤 敬

壁画は生きものだった。ただのペンティングであり、複写のテクニックさえ持ち合わせれば壁画など簡単に撮影が出来ると思っていたが重大な考え違いであった。お寺の堂内は真暗闇で天井から差し込む一条の光だけが唯一の照明。太陽の位置変化で光が微妙に移動し、堂内に立ちこめる煙とほこりと色とがあやしげにミックスして、その中に描かれた壁画が、浮び上ったり、沈んでしまったり、通常では考えられない独特な変化が撮影を困難にしたことは事実である。ラダック地方のゴンパを二十五ヶ寺以上も撮影して帰国した今もなお、すべてのゴンパのお堂が複雑怪奇な生きものとして、私の心に焼きついている。まったくカメラマン泣かせのバケモノのような生きものであった。

ラダック地方、西チベット……。私にとって、まったく未知の世界。それに一度きりしか撮影ができない遠い世界であり、出発前から絶対に失敗はゆるされないという重大な使命があったため、スタート三ヶ月前というものは、ラダック地方を理解することもさることながら、カメラの選定に大いになやんだものだった。高野山大学の二回の調査報告書を何度も何度も読みかえし、高野山大を訪れて撮影されたフィルムと8ミリ映画を参考に、可能なかぎり

のテストをくり返し、最終的には松長教授らの指導で、ラダック地方のゴンパを想定、ひとつは宿坊である蓮華定院の広間で、またひとつは根本大塔の特別撮影許可をもらってのストロボライティングやフィルムのテストを重ね、出発ぎりぎりまでカメラ、フィルムの最終決定をのばすありさま。未知の世界への挑戦に大いに迷ったものである。迷いに迷った結果、カメラはプロニーフィルム使用の中型カメラ＝マミヤRB6×7版＝に決定。レンズは魚眼から200ミリまで6本、ホルダー4、を主体にしてサブとして35ミリカメラ＝キャノン＝を3台、レンズは17ミリから200ミリまで7本、特殊レンズとしてシフト35ミリレンズを用意した。照明も電気のない世界であるから発電機にするかストロボにするかも、悩みの種であった。最終的には安全性をとってストロボにし、アンブレラを二つ使用することで壁画面の反射を無くすことにテストで成功はしたが、光量が半分になる欠点も生じ、スタート前から苦しい条件を余儀なくされた。壁面からの反射にストロボ光量の平均化をその場で知る必要度もあり、白黒のポラロイドフィルムも持参して、完璧を期したことは現地で大いに役に立った。現地ではポラロイドの記念撮影さんとして変な人気もの

となり、その他、ラダックへ持ち込んだフィルムと機材は、プロニー（6×7版）五百本＝エクターEPR三百とエクターEPD二百本＝35ミリフィルムKR64百本、ポラロイドフィルム百パック。ストロボ大型四台、小型二台、アンブレラセット脚付2台、三脚、脚立、フラッシュメーター、露出計、など。その他の物まで含めると莫大な量になって、隊の持ち込む全体量の3分の2を占めてしまい、食糧の持ち込みがほとんど不可能になった。このため隊員からうらまれることしきりであった。

四ヶ月というロングマンズの撮影の旅には、何と言ってもチームワークが第一。このたびの旅ほど、混成チームだったわりには、なんのトラブルもなく無事に終わったことを、うれしく思ったことはない。それにひきかえ旅の途中でのアクシデントには大いに困った。仕事を始めて間もなく、山（五千メートル）越えのためロバにカメラ機材を積んで登る途中、ロバが七メートル下の岩場に転落。ストロボが故障して最初から苦しい撮影の旅となり、最後までスト

ロボで苦難の旅をしいられることになるとは……。

寺から寺へと渡り鳥のような毎日。一度では終わらない時は二度三度と訪れ、そのたびに新しい発見をし、壁画とストロボ光との呼吸、目で見ただけでは分らない壁画の奥にある色彩がストロボの光によって鮮明に表現され、フィルムに映しだされるという、思いも寄らない結果も多々あった。また反対に堂内の煙と目に見えないちり、何世紀もそのままの壁についたほこりがストロボの光をはねのけ、全然映らない結果をまねいたり、などなど大変いじわるな壁画も多くあった。そのダダっ子ぶりはカメラマン泣かせそのものだった。このようにトラブル、アクシデントも数々あったが、楽しい撮影の旅で隊員全員の総結集が一万枚という世界的にも学術的にも貴重なフィルムを得ることの出来たことは、私にとっても大変うれしいことである。この結果が豪華本となり、大写真展となる喜びを高野山隊一行と毎日隊一行とともに分かち合いたいと思う。

第三次調査隊、バンザイ。

民衆とラマ教

馬場 昭道

私は、毎日隊の隊員の一人として高野山大学の調査に参加させて頂いた。今回の調査地域であったヒマラヤ・カラコルム山脈に囲まれたこの西チベット・ラダック地方は歴史上で多くの戦火をまじえているが、厳しい自然と五千メートルを越える山岳地域であるがゆえに、仏教文化が守られ、世界最後の宝庫とさえいわれているし、現在もチベット仏教が人びとの生活に息づいている。

チベット仏教は通称ラマ教と呼ばれているが、その源はインドの大乗仏教である。教義的には中観派あるいは唯識派にもとづいて独自の教理を展開している。八世紀以後のインドの後期密教の影響を強く受けている。ラマ僧たちは、経典を読んだり経典解釈の講義を聞くばかりでなく、禅宗のように自分の師匠とする僧に帰依して、その師を通し修行を積み、悟りの道を求めている。このような姿は、釈尊が亡くなられて、経典が作られるまでの間、法を伝承していく方法として行われていたものであろう。

ラマ教界の最高位にあるダライ・ラマ法王の存在もそれと同じである。現在のダライ・ラマ十四世は、ラマ僧の頂点であり、民族の父でもある。このダライ・ラマ法王の歴史は三百年前から始まる。菩薩の化身と信じられていた第十三世ダライ・ラマは19

33年に亡くなり、それと同時に第十四世の化身探しが行われた。チベット政府や高僧らが予言にしたがって首府ラサ（現在の中国領・チベット自治区）の東北にある小さな村の農家の子どもを探し出した。この子どもこそ現在インドに亡命中のダライ・ラマ十四世その人である。

このようにゴンパ（寺院）のリンポチェ（活仏の住職）も世襲制ではない。一般人の家庭の兄弟で最も優秀な子どもが、寺に入って僧となる。そのためラマ僧は徳の高い人が多い。ゴンパによると三百人ぐらいの僧が修行しているところもあるが、各ゴンパの頂点にいるラマ僧がリンポチェと呼ばれるのだ。リンポチェはダライ・ラマと同様に高僧の化身として探し出された者しか出来ない。だからあるゴンパのリンポチェは、わずか十四才の男の子だった。ラマ教の化身説をたずねると、インドの輪廻転生の思想にたどりつく。またリンポチェに対する民衆の尊敬の念はすばらしいものがある。

ゴンパは、僧たちの衣食住を支えるために寺領をもっている。寺領で働く農民たちは、収穫の三分の一をゴンパに収めているようだ。また僧は日常においても重要な役割を果たしている。僧侶としての日課のほか、寺小屋の先生をしている人、医者、星占

いなどをする僧もいる。仏教徒は僧から名前をつけてもらう習慣なので、名付け親にもならなくてはならず、善男・善女達は自分の名前はどこのゴンパのどの僧が私の名付け親であることを知っている。

また僧の行なう文化活動の一つに演劇、舞蹈がある。祭になると僧たちは仮面をかぶり、衣装をつけて演劇を披露する。スピトクゴンパという寺院では僧が壁画を描き、またほかでは数カ年計画で大仏を作り、その大仏殿も建設されつつあった。僧は修行、学問をするだけでなく、この地方の指導者であり、技術者、タレントでもあり、あらゆる面の仏道行者であった。

そういう仏道行者が民衆の精神の支柱となり、生活のよりどころとなっている。民衆とラマ教のつながりの深さを象徴するものに“マニ輪”がある。こ

れは直径十センチ、長さ十五センチくらいの金属の円筒で、その中には経典が入れている。マニ輪が一回転すると、その経典を一回読むだけの功德が得られるという。街頭の商人や、日なたぼっこをするおばあちゃんたちが、マニ輪をまわしている。

近代文明から置きざりにされたかのような地方であるが、ラマ教はこのように人びとの生活の中にしっかりと根ざしていた。

このほかテレビ・ラジオなど一切のマスコミから隔離された環境にいると、いかに自分が情報に支配され、ふりまわされていたかを痛感させられた。情報を断った生活での会話は、自分でも驚くぐらい生き生きとしたもので、自分自身の言葉で話ができるのであった。

二つのラダック

足立安史

ラダックとは、ジャム・アンド・カシミール州の州都スリナガルから約二百キロ東にあるカルギルという町を中心とする地域。そこからさらに二百キロ程東へ行った所にあるレーを中心とするレー地域。およびザンスカール山脈を狭みレー地域の南に位置するザンスカール地域の総称を指すが、ここではレー地域をラダックと呼ぶこととする。

ラダックにおけるほとんど全ての村落は、インダス川に注ぐ支流が山間から出たわずかな平地に、扇形状に成立している。村落から村落までの距離はおよそ10～20キロ。その間、木一本ない山・砂丘・荒野が続き、遠眺した時の村落はそれらの白っぽい茶褐色と村落の緑とが鮮やかなコントラストを示し、カオスに対するコスモス、或いは、それ自体独立した活動体といった印象を受ける。そして、インド（カシミール）とラダックを分ける険しい山脈と共に、この村落はラダックを理解する上で重要である。

その村落は、ちょうど日本における「庄屋サン」に当たるロンボを筆頭に、ローカドクター・オンボと呼ばれる占い師・常民・村のおかかえ芸人（音楽家）に分けられる俗なる人々と、寺という聖なる僧侶集団から成り立っている。

村落に対するコンパの果たす役割りは大きく又、

多岐にわたっている。仏教本来の人の生と死に係わる諸問題の処理は勿論のこと、マトー、バスゴーのように村の教育を受け持つ機関であったり、また養ってゆけない村の子供を僧あるいは尼僧として引き取る、人口を調節する機関の役割をはたすこともある。というのも今ラダックにおける産業は、麦類・イモの栽培と山羊の放牧を行なう半農半牧である上、何分にも耕作可能地自体狭く、自給自足であるため、養ってゆける人口が限られてしまっているのである。

一方、先ほど見た俗なる人々の区分であるが「身分」を表わし世襲的である点で、カーストに似た階級制度とも言える。が、ロンボ自身一人の労働者でありその点小作人と何ら変わらない。他の小作人に混じり、歌を唱いながら共に麦を刈り脱穀を行なう。又、収穫祭等一年の内数多く行なわれる祭りともなれば、輪になりチャンと呼ばれる地酒を飲みながら夜ふけまで歌い踊る。この点に着目する限り我々がふだん使う意味での階級とはかなり趣きを異にする。

こうした聖と俗とに担われ、山羊を追い回すおらかなラダックを一方とすれば、もう一方にあるものは、近代的な物質文明に色取られたはなやかなラダックである。

ラダックが外国人の前に再び開放されたのが七年

前。その後観光客が増え始め、現地の旅行代理店の人の話によれば、昨年この地を訪れた観光客は六～七千人。本年は一万人に達すると言う。ラダックにレー（LEH）という町がある。かつて最後の王朝の首都として栄え、今また対中国に備える軍事的施設や州行政の中心地として、その賑わいは他の村落には見られないものがあるが、そのレーでは、食料品（缶詰め・ビスケット・コーヒー等）靴・衣服類・時計・雑貨（万年筆・ボールペン等）電機製品（ラジオ・懐中電気・カセット等）土産（宝石・タンカ・仏像）など様々な物品を売る店が並ぶ一方、理容店や写真店まで営業している。さらに路線バスが運行し、レーと各村落との交通を容易にしている外、三日に一度の割合でともされる電灯、大々的に新築中のゲストハウス等々、観光地化の進展と共に、新たな物質文明が、この町の風景を一変させようとしている。

豊かな物質に担われた文明が、はたして人々の幸福につながるかどうかはさておいても、こうして観光地化してゆくことがラダックの人々にとって有益かどうかは、大いに疑問である。

まず第一には、インフレによるラダック人の生活への圧迫である。観光地化にともなってインフレとなることは日本でも軽井沢にみられる通りであり、その中で直接的な利益を受けるのはもっぱら商店や宿泊施設の経営に携わる者であって一般住民ではない。かえって彼らは、インフレのシワ寄せを一身に受ける被害者となり易い。レーにおいて前者は、ラダック人ではなく、スリナガルからやってきた者達である。いくぶん都市化されたとは言え、現在のラダック人は、自給自足的な半農半牧によって彼らの

生計を立てる者が多く、現金収入の限られている上たとえ文明の力を使っても、ラダックの自然的・地理的条件は農業の拡大あるいは工業の導入に対し消極的である。次第に顕著となるであろうインフレに対し、彼らがいかに対処して行くのか。思えば、インド共和国の成立と同時に、ラダックの王制は廃止され、インドに編入されてより、ラダック人は少数民族の一つとして統治の客体・対象へと転化してしまったのであるが、今さらに政治に加え経済の面においても、イニシアチブの低下が予想される。

第二には、回教徒の流入である。十一世紀、ラダックに仏教をもたらしたカシミールがその後回教圏となるや、しばしばラダックへ侵入し、それはあたかもラダック仏教史の裏面を構成するものであった。結局そうした試みがラダックに根づくことはなかったが、ここに至ってカシミールの回教徒達は、商人として何の争いを起こすことなくレーの町を闊歩している。レーにあるかつての王宮の下にはムスリム寺院が建ち、もはやラダック一少なくともレーの町を完全な意味での回教圏と呼ぶことは、出来なくなってしまった。

ラダックは、今、大きな岐路にさしかかっている。しかも今まで見て来たように、どうやらそれらはラダックの人々にとってあまり好ましくない方向に向うものである。十一世紀にまで溯る仏教の伝来は、それまでの風景を一変させ今日のラダックを導いたが、今や、それに並ぶ第二の社会変動の時機にさしかかったのではないか。こうした状況の到来に対しラダックの聖と俗が、いかなる対応を示すのか注目したい。

日 程 表

- 6 / 19 小林、塚木の両名、東京（山崎宅）へ行き毎日隊（佐藤隊長以下6名）と合流、共同装備分配。
- 6 / 20 最終点検。
- 6 / 21 毎日隊と小、塚の計8名先発。成田空港（15：30）デリー空港着（23：00）。
- 6 / 22 団費換金、休養。
- 6 / 23 デリー発（6：30）スリナガル着（8：00）荷物の整理、バスター手配。
- 6 / 24 装備、食糧品購入。
- 6 / 25 装備、食糧品購入、荷物パッキング。
- 6 / 26 スリナガル発（8：30）カルギル着（21：30）
- 6 / 27 カルギル発（6：00）レー着（17：00）高岡隊員と現地合流。
- 6 / 28 休養日。塚、高、レー市内のホテル捜し。夜、種智院大学調査団主催の親睦会に参加。
- 6 / 29 休養日。塚、高、リキル寺へ護摩修法の依頼に行く。
- 6 / 30 塚、滝の2名、先にレー出発へミス寺入り、リンボチェに会い調査の依頼と僧房の一屋貸用を交渉。午後、調査協力の田中、東の食料班到着、へミス泊。
- 7 / 1 午前中、加藤、小、足立、へミス寺入り、午後佐、山崎、馬場、へミス寺着合流。午後へミス泊。
- 7 / 2 へミス寺ラマ僧と祭りの打ち合わせ。
- 7 / 3
〈 へミス祭の調査。
- 7 / 5
- 7 / 6 へミス寺壁画撮影。
- 7 / 7 へミス寺壁画撮影。佐、塚、高の3名、先にレーに帰る。
- 7 / 8 松長団長、氏家助教授、常多の3名、デリー発（6：30）レー到着（9：40）佐等出迎える。夕方へミス隊レーに帰り全隊員合流する。
- 7 / 9 休養日。（今後の調査の打ち合わせ）
- 7 / 10 午前中、シェ寺とテョグラムサー寺の灌頂の調査。塚、常は午後仏教哲学学校へ。
- 7 / 11 ニャルマ寺調査。氏休養。
- 7 / 12 へミス寺調査班（松、佐、氏、滝）とシェ寺壁画撮影班（加、小、足、馬）とニャルマ寺遺跡実測班（塚、山、常）三班に分れ調査。
- 7 / 13 バスゴー寺調査。塚、レセプションの打ち合わせとニャルマ遺跡の測量図作成。小休養。
- 7 / 14 バスゴー寺調査。山、常、スムダへ行くルート調査へ。塚、レセプションの準備。夜レー市内のダ

クバンガローにて仏教交流レセプション開催。小休養。

- 7/15 常, 山を迎えに佐, 滝ニムまで行く。他は休養。
- 7/16 早朝, 加, 馬, 足, シェ寺写真撮影に行く。氏, 高, 先に護摩調査のためリキル寺へ出発。以後寺に宿泊。他はマンギェ行きの準備。常, 塚休養。
- 7/17 リキル寺息災護摩の調査へ。常, 山は休養。
- 7/18 松, 佐, 山, 加, 足, 馬, Pの7名はサスポール寺からマンギェ寺調査へ。氏, 塚, 高, 滝の4名はリキル寺増益護摩の調査。小, 常休養。
- 7/19 松隊, マンギェ寺調査。後で松, 佐, 馬, Pの4人レーに先に帰る。氏隊, リキル寺敬愛護摩の調査。小, 常休養。
- 7/20 松, 佐, 常, 小の4名はレーチュウコル遺跡調査。氏隊, 夕方リキルよりバスでレーに帰る。マンギェから加, 山, 足の3人もレーに帰る。馬スムダ行きの準備。
- 7/21 松, 佐, 馬, 常, Pの5名はアルチからスムダに向け出発。山の中腹で野営。塚, 高はフィヤン寺へ祭りの調査依頼へ, 午後氏, 高が同寺のタンカ開眼供養を調査。午後, 小, 塚, 滝の3名レーチュウコル遺跡の実測調査。加, 山, 足は明日から25日までのアルチ寺写真撮影の準備。
- 7/22 松隊, 小スムダ調査。氏, 加, 小, 山, 足の5名はフィヤン寺, サスポール寺調査をへてアルチ寺壁画撮影開始, 以後アルチ泊。塚, 高はフィヤン寺にて祭りの準備の様子を記録。
- 7/23 松隊, 大スムダ寺の調査をし小スムダにて泊。塚, 高, 滝は早朝アルチ寺に行き氏と共にリゾン寺調査。
- 7/24 松隊, 小スムダ寺調査, 山の中腹で夜営。氏, 塚, 高, 滝の4名, フィヤン寺, スピトク寺調査。
- 7/25 松隊, アルチに帰り, 加, 小, 山, 足のアルチ寺壁画撮影班と合流しレーに帰る。氏, 高, マトオ寺, スピトク寺, スタクナ寺調査。塚, レーチュウコル遺跡の実測図作成。
- 7/26 早朝(4:00), 佐, 塚, 加, 滝の4名, フィヤン祭の調査へ先に出発, 後で他の隊員も合流。佐, 常, 山, 馬の4名はザンスカール準備のためお昼で帰る。
- 7/27 塚, 氏, 滝の3名, フィヤン祭の調査へ, 氏, 滝の2名は昼前に帰る。他の隊員はラマヌル, ワンラ調査とザンスカール調査のため食糧, 装備の準備。
- 7/28 ラマヌル, ザンスカールに向う予定がジープのおり合いがつかず休み。塚はフィヤン祭の調査へ。
- 7/29 馬, 常, 足の3名は昨夜からトラックで荷物番。松, 加, 馬, 小, 足, Pの6名はラマヌル寺調査泊。佐, 滝, 氏, 常, 山の5名はザンスカール行き, カルギルにて宿泊。塚, フィヤン祭の調査へ。
- | | | |
|------|--------------------|--------------------------|
| 7/30 | <レー調査隊> | <ザンスカール調査隊> |
| | 松隊, ワンラ寺調査泊。塚記録整理。 | 佐隊, バザールへ買出し, トラック便手配。 |
| 7/31 | ワンラ寺からラマヌル寺調査を終えレー | カルギル→バニカル P, W, Dゲストハウス。 |

- に帰る。塚記録整理。
- 8 / 1 松, 塚, 加, 高, フィヤン寺のリンポチ
ェに会見。馬, 足, 小, スムダの準備。
- 8 / 2 松, 加, 馬, 足, テモズガン寺へ, 松レーに
帰り他アルチ泊。小荷物を運びアルチ行き
泊。塚8 / 16までリキル寺等で護摩調査。
- 8 / 3 加等4名, 小スムダ写真撮影 (8 / 6 ま
で) 松休養。
- 8 / 4 松記録整理。
- 8 / 5 松, Pスピトク対岸のCavetemple 調査。
- 8 / 6 松記録整理。
- 8 / 7 加隊, レーに帰る。松記録整理。
- 8 / 8 松午前中ニャルマへ再調査。午後, 松,
加, 小, 足, Pはスピトク寺調査。
- 8 / 9 松, 馬, 小はマトォ寺, スタクナ寺調査。
加, 足休養。
- 8 / 10 タクタク寺, チェムデー寺調査。
- 8 / 11 加, 馬, 足はタクタク寺, チェムデー寺
の写真撮影。松, 小はバスゴー寺実測調査。
- 8 / 12 ティクセ寺写真撮影。松昼で帰る。
- 8 / 13 マトォ寺, スタクナ寺写真撮影。松休養。
- 8 / 14 リゾン寺からアルム寺調査泊。
- 8 / 15 アルチ寺写真撮影
- 8 / 16 ♪
- 8 / 17 ♪
- 塚, 高, レーを出発ネパールへ。
(尚, 塚はネパールにて護摩調査を継続
する)
- 8 / 18 ♪

パニカル→バルカチ→シンモダンサ→ジュルド
ジュルド→ランドン寺→ベンシラ峠→チブラ→トゥ
ンリ。

トゥンリ→橋→シャーカル→アティン→トクタ。

トクタ (←ゾンクル寺) →シャーカル。

シャーカル→シラツェ寺→トゥンリ→トラハン→ラ
ンミ
ランミ→カルシャ
カルシャ→トゥンリ→サニ
サニ→トゥンリ→カルシャ
チュチャージャル寺調査。

カルシャ寺調査。

カルシャ→リナム→ピシュ (キロ数は概算)
8k 12k

ピシュ→ベタン→ピドモ→ハナムル
8k 4k 6k
ハナムル→ファルフィラ峠→ジンチェン
10k 7k
ジンチェン→ニェルツェ→ラングマトブチ
4k 8k
ラングマトブチ→ハヌマネラ峠→サバンラ峠→リン
シエ 2k 3k 3k
リンシエ寺調査。

氏常, リンシエ→ムグンラ峠, スニトクラ峠→スキ
1k 2k
ユンバタ→ゴンマ→チュパラ峠→ユルチュン。
1k 1k 2k
佐, 滝, 山はもとの道を5日間かけカルシャにもど
る。途中ザントラに立ち寄り王様に会見。

氏, 常, ユルチュン→シンギラ峠→ミチラ峠→フォ
6k 9k
トクサ

- | | | |
|--------|---|---|
| 8 / 19 | アルチを出発サスポール寺調査を終えレーに帰る。 | 氏, 常 フォトクサ→シルシルラ峠→岩小屋。
4k 3k |
| 8 / 20 | 休養日。 | 氏, 常 岩小屋→バンタンナンマ→ニュクチャラ峠→シラクン。
1k 3k 12k |
| 8 / 21 | 休養日。 | 氏, 常 シラクン→シーラ→プリンキィラ峠→ラマヌル。
12k 2k 1k |
| 8 / 22 | フィヤン寺とグル堂調査。 | 佐, 滝, 山, カルシャ帰着。
氏, 常 ラマヌル→カラツェ (トラック)
佐隊, カルシャで休養。 |
| 8 / 23 | ストックの遺跡調査。氏, 常の2名, カラツェよりレーに帰る。 | 佐隊, カルシャ→渡河 (ゴムボート) →ビピティン→バダン (荷馬隊はトゥンリ経由) |
| 8 / 24 | 氏, 常 レーを去り帰国の途につく。松隊ティクセ寺調査。 | 佐隊, バダン→バルダエン寺→ムネ寺 |
| 8 / 25 | 松隊, ツェモ堂調査。 | 佐隊, ムネ→イチャール→川べりの砂浜 |
| 8 / 26 | 松, レーを去り帰国の途につく。 | 佐隊, 砂浜→トインパツェタン→チャー→ブクトル寺→ブルネ→チャー |
| 8 / 27 | 休養日。 | 佐隊, チャーの橋→イチャール |
| 8 / 28 | 加, 小, 馬, 足, アルチ寺三層堂1階撮影 (アルチ泊9 / 4まで) | 佐隊, イチャール→ムネ |
| 8 / 29 | 加隊, アルチ撮影。
松, 氏, 常, 日本帰国。 | 佐隊, ムネ→バダム (スタクリモ寺調査) |
| 8 / 30 | 〃 | 佐隊, バダム→渡河 (ゴムボート) →カルシャ |
| 8 / 31 | 〃 | 休養日。カルシャ泊。 |
| 9 / 1 | 〃 | カルシャ滞在, トラック待ち |
| 9 / 2 | 〃 | カルシャ→トゥンリ → ジュルドー |
| 9 / 3 | 〃 | ジュルドー → カルギル |
| 9 / 4 | 〃 | カルギル → シャルゴル寺 → ハナスク → ラマヌル |
| 9 / 5 | ザンスカール隊 (佐, 滝, 山), ラマヌルを早朝出発しレーに帰る。レー撮影班もアルチをたちレーに帰り合流する。 | |
| 9 / 6 | 休養日。 | |

- 9/7 スタクナ寺撮影。滝，山，サブー村訪問。
- 9/8 テイクセ寺撮影。佐，滝，山，テイクセ寺，マトォ寺，スピトク寺調査。
- 9/9 テイクセ寺撮影。滝，山，タクタク寺，チェムデー寺，サブー寺調査。
- 9/10 スピトク寺撮影。佐，滝，山，アルチ寺，リゾン寺，サスポール寺調査。
- 9/11 アルチ寺三層堂2階，3階撮影。
- 9/12 アルチ寺三層堂2階，3階撮影。滝，山，サブー寺調査。
- 9/13 アルチ寺三層堂2階，3階撮影，バスゴー寺撮影。夜，歓送会。
- 9/14 休養，整理日。ストライキにてフライト中止。
- 9/15 毎日隊3名（佐，馬，滝）帰国の途につく。
- 9/16 ツェモ堂撮影。山，9/20までサブー村調査。
- 9/17 スピトク寺，シェ寺，サンカル寺撮影。塚，日本帰国。
- 9/18 スピトク寺，フィヤン寺撮影。
- 9/19 フィヤン寺撮影。
- 9/20 ヘミス寺撮影。佐，馬，滝，日本帰国。
- 9/21 グル堂撮影。
- 9/22 グル堂撮影。
- 9/23 アルチ寺撮影。
- 9/24 アルチ寺，マンギユ寺撮影。
- 9/25 アルチ寺撮影後レーに帰る。
- 9/26 サブー寺撮影。
- 9/27 スタクナ寺撮影。
- 9/28 写真班四名（加，小，足，山）帰国の途につく。
- 10/12 写真班四名，日本帰国。

<注> 略記号

松－松長団長， 氏－氏家助教授， 小－小林隊員， 塚－塚木隊員， 常－常多隊員， 高－高岡隊員，
 佐－佐藤毎日隊々長， 加－加藤カメラマン， 滝－滝カメラマン， 馬－馬場隊員， 山－山崎隊員， 足－
 足立隊員。P－トッブテン・バルダン師。

チベット仏教文化研究会所蔵備品目録

A. 調査機材・備品

〔調査機材〕

品 名	数 量
テント（エスペース4人用）フライシート・内張付	2セット
ツェルト（2～3人用 底付）	2セット
血圧計	1
巻 尺（20m用，5m用）	3
コンパス	2

〔カメラ関係〕

品 名	数 量
カメラ（ニコンFM，FE）本体	2
レンズ（35mm F2.8，マイクロ55mm F3.5）	2
カメラ（インスタント・カメラ，コダックEK300）	1
8ミリカメラ（ELMO 612S-XL	2
露出計（ミノルタ・オートメーターⅡ）	1
ストロボ（サンバックAZ-3400）	1
三脚 （スリックS-104）	1
・カメラ・ケース（ハクバ）	1
その他アクセサリー	11

〔備 品〕

品 名	数 量
スライド映写機（ツインキャビンオート）	1
カートリッジ	5
ライト・ボックス	3
スライド整理ロッカー（吊下げ式，2段）	2
事務用ボックス	2

B. 文献資料

〔 図 書 〕

チベット語関係 16点

欧文関係 22点

雑誌 14点

〔 経 典 〕 48点

1. rtags rigs kyi rnam bshag chos kun gsal baḥi me lod shes bya ba bshugs so
|| (1 a - 2 5 a) 仏教哲学学校寄贈
2. bsdus graḥi don kun bsdus pa legs bśad mkhas paṇi dgaḥ ston bshugs so ||
(1 a - 2 1 b) 仏教哲学学校寄贈
3. bcom ldan ḥdas kun rig gi cho ga rgyud don gsal baḥi sñiñ po bsdus pa yid
bshin gyi nor bu shes bya ba bkras lhun gsañs sñags rgyud pa grva tshañ gi
chal don gtoñ rgyun ltar bkod pa bshugs so || (1 a - 3 2 a) リキル寺所蔵
- . bcom ldan ḥdas kun rig gi cho ga rgyun don gsal baḥi sñiñ po bsdus pa yid
bshin gyi nor bu bum bskyed nag haros su bkod pa bshugs so || (1 a - 1 3 b)
- . bcom ldan ḥdas kun rig gi cho ga rgyun don gsal baḥi sñiñ po bsdus pa yid
bshin gyi nor buḥi dbañ chog nag ḥgros su bkod pa bshugs so || (1 a - 1 9 b)
- . bcom ldan ḥdas kun rig gi cho gaḥi phyi rol mchod pa nag ḥgros su bkod pa
bshugs so || (1 a - 9 a)
- . bcom ldan ḥdas rnam par snañ mdzad kyi smon lam dañ | bkra śis bcas bshug-
s so || (1 a - 5 a)
- . mgon dkar yid bshin nor buḥi gtor chag bshugs so || (1 a - 1 0 a)
4. dpal gsañ ba ḥdus paḥi cha ga ḥag don gyi rim par bsgrigs pa bkris lhun po
gsañs sñags rgyud pa grva tshañ gi shal ḥdon gtoñ rgyun ltar nag ḥaros su
bkod pa bshugs so || (1 a - 7 a) リキル寺所蔵
- . dpal gsañ ḥdus paḥi bshag bskyed ḥag ḥdon bkra śis lhun po rgyun pa grva
tshañ gi ḥdon rgyun la rje thams cad mkhyen pas shum ḥag mdzad pa bshugs
so || (1 a - 7 6 b)
- . dpal gsañ ba ḥdus paḥi bum bskyed bkra śis lhun poḥi rgyud pa grva tshañ
gi ḥdon rgyun ltar bkod pa bshugs so || (1 a - 1 9 a)
- . dpal gsañ ba ḥdus paḥi mdun bskyed bkra śis lhun poḥi rgyud pa grva tshañ
gi ḥdun rgyun ltar bkod pa bshugs so || (1 a - 5 4 b)

- phyi rol mchod pa bshugs so || (1 a - 8 b)
- dpal gsañ ba ḥḍus paḥi dbañ gi cho ga smon lam śis brjod bcas bshugs so ||
(1 a - 7 6 a)
- 5 • dpal rdo rje ḥjigs byed kyi shi rgyas kyi sbyin sreg gi ḥag ḥdon || (写真・護摩次第)
- 6 • dpal rdo rje ḥjigs byed kyi shi rgyas dbañ drag po gi sbyin sreg dañ gśin poḥi sbyañ chog | (写真・護摩次第)
- 7 • rdo rje sgra dbyaḥs gliñ gi shal ḥdoñ dpal rdo rje ḥjigs byed chen poḥi sgo nas dbañ gi sbyin sreg bya thul || (写真・護摩次第)
- 8 • dpal rdo rje ḥjigs byed kyi shi baḥi sbyin sreg bya thul kyi cho ga | (写真・護摩次第)
- 9 • ḥphags pa bskal pa bzañ po pa shes bya ba thegs chen poḥi mdo || (1 a - 5 8 b)
- 10 • ḥphags pa śes rab kyi pha rol tu phyin brgyad stoñ pa || (1 a - 5 6 7 b)
- 11 • tog gzuḥs dañ | grva lña | gser ḥod bcas bshugs so || (1 a - 5 3 9 a)
- 12 • mdo sñags gsuñ rab rgya mtshoḥi sñiñ po mtshan gzuns mañ bsdus bshugs so || (1 a - 9 a)
- ḥphags pa ḥjam dpal gyi mtshan yañ dag par brjod pa bshugs so || (1 a - 3 4 2 a)
- ḥphags pa śes rab kyi pha rol tu phyin pa sdud pa tshigs su bcad pa bshugs so || (1 a - 3 5 2 a)
- 13 • mñam med tsoñ kha pa chen pos mdzad paḥi byañ chub lam rim che ba bshugs so || (1 a - 5 2 3 a)
- byañ chub lam rim chen moḥi sa bcad bshugs so || (1 a - 1 6 a)
- 14 • bkaḥ gdams kyi skyes bu dam pa rnams kyi gsuñ bgros thor bu ba rnams bshugs so || (1 a - 6 0 b)
- 15 • khyab bdag rdo rje ḥchañ pha boñ kha pa dpal bzañ pos thun drug bla maḥi rnal ḥbyor dan | sdom pa ñi śu pa | bla ma lña bcu pa | sñags kyi rtsa ltuñ sbo ma po bcas kyi bśad krid gñañ baḥi zin tho mdor bsdus bshugs so ||
(1 a - 4 8 a)
- 16 • rgyal ba bskal bzañ rgya tshoḥi gsuñ rdo rje ḥjigs byed dpaḥ bo gcig pa bdud las rnam rgyal gyi dkyil chog las bdag ḥjug bya tshul ḥdon sgrigs nag bo ḥgro śes su bkod pa bshugs so || (1 a - 9 0 b)
- 17 • sgrol ma dkar sñon gyi bstod pa bshugs so || (1 a - 1 9 a)

- 18 · sgrol ma maṇḍala bshi paḥi cho ga dpag bsam sñe ma shes bye ba bshugs so
 || (1 a - 2 4 b)
- 19 · bcom ldan ḥdas ldan sman blaḥi mdo chog sñiñ po bsdus pa yid bshin nor b-
 u shes bya ba bshugs so || (1 a - 1 5 b)
- 20 · cha gsum bshugs so || (1 a - 1 0 a)
- 21 · rje btsun sgrol ljañ bla med lugs nē brgyud ḥphags maḥi shal luñ citta mañi
 las sgrub thabs rkyañ paḥi ḥdon sgrigs zur ñu bkol ba bshugs so ||
 (1 a - 1 6 b)
- skabs gsum pa bshugs so || (1 a - 1 2 a)
 - jo bo rjeḥi bstod pa bshugs so || (1 a - 6 b)
 - rje thams cad mkhyen pa tsoñ kha pa chen pos rañ ñid kyi rtags brjod ñams
 mgur du stsal ba mdun leṭama shes bya ba bshugs so || (1 a - 8 a)
 - dpal ldan sa gsum ma bshugs so || (1 a - 7 a)
 - chos gos dur smrig sogs bshugs so || (1 a - 1 4 b)
 - myur mdzad ma dañ | brkyañs ma sogs le tshan brgyad bshugs so || (1 a - 1 3 a)
 - ḥphrin bcol phyogs bsdus bshugs so || (1 a - 5 a)
- 22 · rje btsun rdo rje rnal ḥbyor manāro mkhaḥ spyod kyi sgrub thabs thun moñ
 ma yin pa bde chen ñe lam dañ | dkyi I ḥkhor gyi cho ga bde chen dgaḥ sto-
 n bcas ñag ḥdon bde phyr nag ḥgros su gsal bar bkod pa bshugs so || ḥdi d-
 bañ dañ byin rlabs thob kyañ rim gñis kyi zab khrid ma thob pas blta bar mi
 byaḥo || (1 a - 7 0 a)
- 23 · rje btsun rdo rje nal ḥbyor manāro mkhaḥ sbyod kyi rim gñis zab moḥi ñams
 lon vaidūra shun maḥi them skas shes bya ba bshugs so || (1 a - 7 1 a)
- 24 · rje btsun blo bzañ chos kyi rgyal mtshan gyis mdzad paḥi ḥbyun bshi gtor ma
 bshugs so || (1 a - 5 b)
- 25 · gtor ma brgya rtsa gtoñ tshul rje bla ma pha boñ kha pa bde chen poḥi phyag
 bshes man ñag nag ḥgros su bkod pa sku gsum nor bu ḥdren paḥi mchod sbyin
 ḥphrul gyi siñ rta shes bya ba bshugs so || (1 a - 3 0 a)
- 26 · thun moñ rten ḥbrel sgrig byed paḥi lha rnam mñes byed bsañs yig bshugs
 so || (1 a - 7 0 b)
- 27 · thub dbañ gnas brtan bcu drug dan bcas pa la mchod ciñ gsol ba gdab paḥi
 tshul khru gsol dañ bcas pa thub bstan rgyas byed yid bshin gyi nor bu shes

- bya ba bshugs so || (1 a - 4 0 b)
- 28 . lha rnam mñes bar byed pañi bsañs mchod bkra śis ḥkhyil ba bshugs || (1 a - 2 6 a)
- 29 . ḥdus pa ḥphags lugs kyi sgrub thabs mdor bsdus mchog gi dgaḥ ston shes bya ba bshugs so || (1 a - 3 5 b)
- 30 . sdom pa gsum gyi dkaḥ bañi gnas la dogs pa dpyad pa sdom gsum nor buhi byi dor shes bya ba bshugs so || (1 a - 4 7 a)
- 31 . dpal ldan dmag zor rgyal moñi sgo nas rno mthoñ sgrub tshul deñi ḥbras bśad dañ bcas pa bshugs so || (1 a - 4 9 b)
- 32 . dpal ldan lha moñi cho dañ ḥbrel bar ma moñi ḥkhrugs skoñs gtoñ tshul bshugs so || (1 a - 2 0 a)
- brgya bshiñi cho ga legs tshogs kun bsdus gegs sel kun phan nor bu shes bya ba bshugs so || (1 a - 2 5 a)
 - yum rgyas ḥbrin bsdus gsum gyi don bsdus śes rab sñiñ poñi sgo nas bdud bzlog gi rim pa bshugs so || (1 a - 2 2 b)
- 33 . dpal ldan lha mo dañ | sku lña | rdo rje grags ldan bcas kyi thugs dam bskañ ba dañ | dgyes pa skyed par byed pañi cho ga gsol mchod mdor bsdus tiñ ḥdzin lha yi rol gar dños grub kun gyi gter gyur ces bya ba bshugs so || (1 a - 1 9 a)
- 34 . dpal māro mkhaḥ sbyod dbañ moñi lam rim pa gñis kyi zab khrid ji ltar nos pañi zin bris śin tu gsañ ba gnas gsum mkhaḥ ḥgroñi sñiñ beud ces bya ba bshugs so || lha mchog ḥdi ñid kyi dbañ dañ khrid ma thob par rañ dgar ñams mtshar ltad moñi tshul du ston pa dañ blta bbyar mi ruñ ño || (1 a - 1 2 4 a)
- 35 . byañ chub lam gyi rim pañi dmar khrid myur lam gyi sñon ḥgroñi dag ḥdon gyi rim pa khyer bde bklag chog bskal bzañ mgrin rgyan shes bya ba bshugs so || (1 a - 2 5 b)
- 36 . bla ma dañ spyen ras gzigs dbyer med kyi rnal ḥbyor dños grub kun ḥbyuñ shes bya ba bshugs so || (1 a - 8 a)
- 37 . mitra lugs ñe brgyud thun moñ ma yin pañi thugs rje chen po phyi sgrab ñan soñ kun sgroḥ | gyi sgrub thabs yin bshin nor bu shes bya ba bshugs so || (1 a - 1 0 b)

- 38 · tshe dpag med nañ sgrub ḥchi med lha lñaḥi sgo nas brtan bshugs ḥbul tshul ḥchi med dpal sbyin dañ | de dañ ḥbrel baḥi mkhaḥ ḥgro bsun bzlog gi cho ga ḥchi med rdo rjeḥi srog mkhar ḡñis kyi naḡ ḥdon bklag chog dkyus gcig tu bsgrigs pa mthoñ śes nor buḥi me lon ḥchi med ḥdod rguḥi gter mdzod shes bya ba bshugs so || (1 a - 5 5 a)
- 39 · zab lam bla ma mchod pa bde stoñ dbyer med ma dpal ḥkhor lo sdom pa dañ ḥbrel baḥi rnal ḥbyor ñams su len tshul gyi cho ga nag ḥgros su bkod pa shar byuñ dañ bcas pa sñan brgyud bdud rtsiḥi zil thugs shes bya ba bshugs so || (1 a - 4 9 b)
- 40 · śes rab sñin po | gdugs dkar mchog grub | deḥi bstod pa | señ gdoñ maḥi bzlog pa bcas bshugs so || (1 a - 2 5 b)
- 41 · gso sbyoñ | dbyar gnas | dgag bde | bslab byaḥi sdom tshig | tshun drug bden gsol smon tshig sogs sdom pa gsum dañ ḥbrel baḥi skor byañ grol khañ bzañ ḥdzeg paḥi the ma skas bshugs so || (1 a - 7 1 a)
- 42 · ayon padmaḥi rnam thar bkaḥ thañ bsdus pa bshugs so || (1 a - 1 7 a)
- 43 · ḥphags pa śes ra kyi pha rol tu phyin pa rbo rje gcod pa shes bya ba theg pa chen poḥi mdo bshugs so || (1 a - 3 7 a)
- lha mo brgyad rtsis gzaḥ ḥbras dañ bcas pa bshugs so || (1 a - 8 a)
- 44 · 現觀莊嚴論 (2 7 枚)
 大乘莊嚴經論頌 (8 3 枚)
 弥勒五部論書 究竟一乘宝性論 (4 5 枚)
 法法性分別論 (7 枚)
 中辺分別論頌 (1 2 枚)
 (バスゴ-寺所蔵・写真)
- 45 · bla ma drag po thugs sgrub gyi las byañ dños grub ḥbyun baḥi mdzes rgyan shes bya ba bshugs so || (1 a - 1 9 b) (写真)
- 46 · bla ma drag poḥi las byañ dños grub ḥbyuñ ba bshugs so || (1 a - 1 2 b) (写真)
- 47 · cab chos shi khro ñes don sñiñ po sgo nas rañ dañ gshan gyi don mchog tu sgrub paḥi las rim la por paḥi mun gshoms kun bzañ thugs rjeḥi shad mdzod ces bya ba bshugs so (1 a - 1 1 9 a) (写真)

C. 仏具類

1 7 点

護摩の資具 13点

D. 民俗・生活用品 7点

E. 写真資料

第1回調査団(スライド23巻 カラーネガ7巻, 白黒ネガ36巻) 66巻

第2回調査団

ラダック班(スライド76巻, ネガ9巻) 85巻

ザンスカール班(スライド19巻, ネガ21巻) 40巻

第3回調査団

ラダック地域(スライド12巻, ネガ10巻) 22巻

ザンスカール地域(ネガ5巻) 5巻

毎日隊(加藤氏撤影のスライド)寄贈品約1500コマ分(6×7版)

(8ミリ映画)

第2回調査団

リキル寺息災護摩の記録 1巻

ザンスカール紀行 3巻

第3回調査団

ヘミス寺の祭り 2巻

リキル寺の護摩の記録 6巻

フィヤン寺の祭り 1巻

ザンスカール紀行 1巻

<備考>

C. 仏具類およびD. 民俗・生活用品は第1回・第2回報告書参照のこと。

第三回チベット仏教文化調査団収支報告

予算総額	5,005,000 (単位円)	収入総額	5,019,782
<内 訳>		<内 訳>	
本山援助金	2,000,000	本山援助金	2,000,000
大学援助金	1,000,000	大学援助金	1,000,000
寄 付 金	2,005,000	寄 付 金	2,005,000
		預 金 利 子	14,782
支 出 総 額		5,019,782	
<内 訳>			
遠征費		3,426,355	
写真機材・フィルム購入費		451,640	
装備機 費		58,800	
保険・薬品費		110,180	
調査整理費		269,915	
報告書作成費(1500部)		60,000	
事務費		102,892	

<支 出 明 細>

遠征費	3,426,355	ジープ・タクシー・バス費	313,995
旅費(東京・大阪→デリー スリナガル往復5人分)	1,174,440	人件・馬輸送費	247,160
同 (カトマンズ→スリナガル往 復1人分)	110,000	謝礼・土産費	128,480
国内旅費(広島・尾道→高野 山→大阪・東京)	261,600	自炊具その他現地装備費	96,140
滞在費(ラダック・ザンスカール・ス リナガル・デリー6人分延 70日間)	990,200	現地調達食料費	104,340
		写真機材・フィルム費	451,640
		フィルム費	213,170
		ハミリ機材2台	208,000
		マイクホルダー	6,080
		フィルター	2,920

第三回昭和54年度調査団派遣

寄付者御芳名

三脚	1,890	金百万円	高野山住職会
ボラロイドカメラ	19,080		
電池	500		
装備機材費	58,800	金貳拾万円	酒井真典
ツェルト2張	21,000		
カセットテープ	9,400	金拾万円	高峰秀海 後藤昌大 中川善教
国内食料購入費	28,400		
保険・薬療費	110,180		浄土寺(広島県尾道市)
調査整理費	269,915	金五万円	阿部野竜正 稲葉義猛 和田有玄
写真現像・焼付費	169,915	金参万円	麻生恵光 伊勢木俊範 島田信了
八ミリ用リール	9,400		
アルバム費	90,600		辻徹秀 吉本都観 山岳部OB会
報告書作成費(1500部)	600,000		円通寺(広島県神辺町)
事務費	102,892	金貳万円	北川智城
文房具	5,420		
通信費	14,450	金貳万五千元	大学教員有志
コピー代	8,460		
調査打合せ会費	25,562		(順不同 敬称略)

団 員 名 簿

団長 松長有慶

<高野山大学隊>

隊 長	松長有慶 (密教学科教授 1929 年生)	和歌山県伊都郡高野町高野山680
会 計	氏家昭夫 (仏教学科助教授 1938 年生)	和歌山県伊都郡高野町高野山318
記 録	小林暢善 (密教学科修士課程卒業 1952 年生)	広島県尾道市東久保町20-28浄土寺
日 誌	塚本佳道 (仏教学科修士2 在学中 1955 年生)	広島県深安郡神辺町東中条664円通寺
渉 外	常多 昇 (仏教学科4 年在学中 1951 年生)	大阪府茨木市庄1 丁目20-1
通 訳	高岡秀暢 (名古屋大学卒業 1943 年生)	名古屋市昭和区天白町野並28-341

<毎日新聞社隊>

隊 長	佐藤 健 (毎日新聞社会部記者 1942 年生)	東京都世田谷区池尻3の21の249
写 真	加藤 敬 (現代企画さっぽろ代表写真家 1936 年生)	札幌市中央区北五条東4 丁目 ガーデンプラザ503
会 計	山崎正矩 (臨済宗興禅寺副住職 1946 年生)	東京都台東区谷中5の2の11
写真助手	馬場昭道 (浄土真宗真栄寺副住職 1945 年生)	宮崎県宮崎市江平西2の3の15
写 真	滝 雄一 (毎日新聞写真部記者 1949 年生)	横浜市保土ヶ谷区権太坂533の2 ニックハイム保土ヶ谷610
写真助手	足立安史 (早稲田大学法学部4 年在学中)	東京都中野区若宮2-11-4 藏方 (昭和55年3月現在)

チベット仏教文化研究会会則

- 第 1 条 本会はチベット仏教文化研究会と称し、事務所を高野山大学内に置く。
- 第 2 条 本会はチベット仏教文化の研究と調査を目的とする。
- 第 3 条 本会は右の目的を達成するために、左の事業を行う。
1. 研究会の開催
 2. チベット仏教文化の現地調査と資料の収集
 3. 研究と調査の成果刊行、その他
- 第 4 条 本会の主旨に賛同する者をもって会員とする。
- 第 5 条 本会の会員を分けて左の二種とする。
- 正会員
- 賛助会員
- 第 6 条 本会は寄付金および賛助会費をもって運営し、賛助会費は別に定める。
- 第 7 条 本会に左の役員を置く。
- | | |
|-----|-----|
| 会 長 | 1 名 |
| 副会長 | 1 名 |
| 参 与 | 若干名 |
| 委 員 | 若干名 |
| 幹 事 | 若干名 |
- 第 8 条 役員の仕事、選出、任期は左の通りである。
1. 会長は高野山大学学長が当り、本会を代表して、会務を統理する。
 2. 副会長は高野山大学学監が当り、会長を補佐する。
 3. 参与は委員会の求めに応じて、本会の事業を遂行するための助言を行う。
 4. 委員は委員会を組織し、本会の事業を遂行するための企画、運営に当る。
 5. 幹事は本会の事業遂行に関する事務を担当する。
 6. 参与、委員、幹事は会長が委嘱し、任期は2年とするが重任をさまたげない。
- 第 9 条 本会の規則変更、その他事業計画は役員会の決議によって行う。
- (本規定は昭和53年3月13日より施行する)

(原文縦組)

チベット仏教文化研究会 昭和54年度収支報告（昭和55年3月15日現在）

(収入の部)

53年度より繰越金	704,965円	社行会費用	70,620円
社行会会費	42,000円	8ミリフィルム複製代	150,984円
報告書(74冊分)	36,450円	第二次隊事務費	67,668円
賛助会費	10,000円	資料整理費(アルバイト代)	65,000円
預金利子	6,617円	会合費(報告会費用も含む)	48,140円
小計	800,032円	コピー代	4,024円
		文房具代	9,500円
		通信費	13,480円
		小計	429,416円

差引残高 370,616円 (55年度へ繰越金)

編 集 後 記

ラダック地方に残存するチベット密教の文化遺産を現地調査すべく、本山及び大学当局並びに関係各方面の御理解と多大なる援助に支えられながら、昭和52年夏以来ひき続いて第三回の学術調査団が派遣されることになった。この間に学内には「チベット仏教文化研究会」が設立され、前回の調査団がもたらした成果に基づいて次回の調査計画が綿密に立案、検討され、調査の着実な進展をみた。そして今回、松長教授を団長として有能かつ経験豊富な隊員に加えて、毎日新聞関係者の参加をえ、特色のあるきわめて強力な調査団が組織された。短期間ではあるが三カ月余りの充実した学術調査を終え、もろもろの新発見、記録、蒐集等、多くの貴重な成果を収めて、全員無事帰国することができた。そしてここにその報告書が上梓される運びとなった。心から同慶の意を表するとともに、想像を絶するような現地のきびしい悪条件下の労苦に耐えて調査に当たられ、帰国されるや直ちにいち早く、その調査研究を纏められた団長をはじめとする隊員各位の並々ならぬ尊い熱意に、甚深の敬意と感謝の意を表する次第である。さらにこの調査計画が継続され、これを踏み足として、なお一層の成果が得られることを念願し期待して、編集のあとがきとしたい。

(チベット仏教文化研究会)

第三回高野山大学チベット仏教文化調査団報告書

1980年3月20日 印刷

1980年3月30日 発行

編集・発行所 チベット仏教文化研究会

〒648-02

和歌山県伊都郡高野町高野山

高野山大学内

TEL 07365-6-2921(代)

印刷所 正美社印刷所

〒601 京都市南区唐橋門脇町6

TEL 075-672-1381

(非売品)

ラダック・ザンスカールの主な寺の位置と地形

作図 常田 昇

